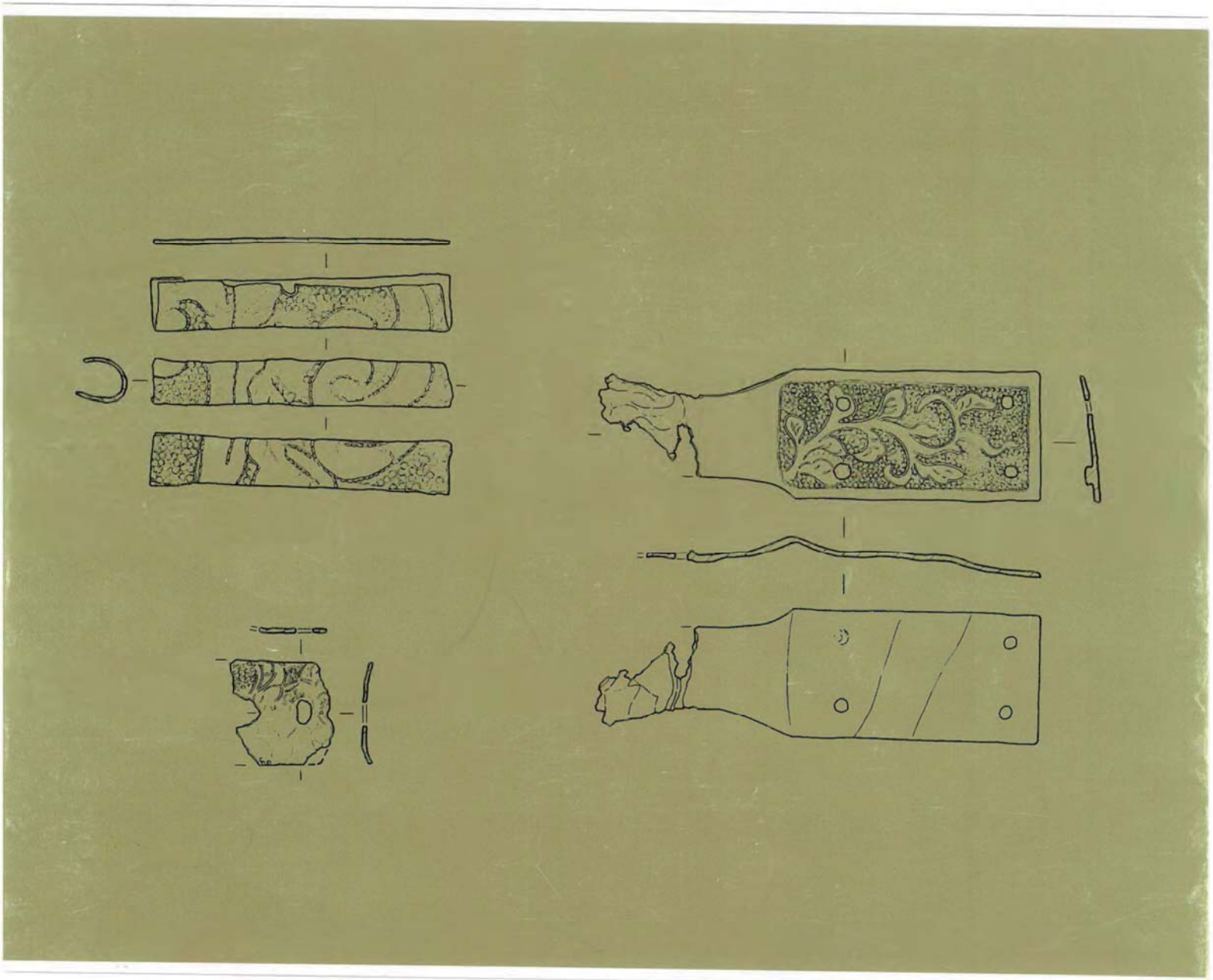
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第45集

首　里　城　跡

－黄金御殿地区発掘調査報告書－



平成19（2007）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

首　里　城　跡

－黄金御殿地区発掘調査報告書－

平成19（2007）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、国営沖縄記念公園整備に伴い、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成15（2003）年度及び平成17（2005）年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものです。

調査地点は、戦前まで黄金御殿という建物が存在していた場所で、国王や国王親族の私的空間とされる御内原の一画を構成していました。その中でも黄金御殿は、王や王妃の寝室として使用されていた場所であったことから、特に秘匿性が高く、その構造については文書や絵図等にも現れず、謎を秘めた場所でした。

この２ヶ年にわたる発掘調査の結果、遺構は近代以降の沖縄戦による空爆や開発等により壊滅的な被害を受けたものの、一部では建物の基盤を成す礎石跡等を検出するとともに、付随する石積みや石敷きのほか、石造の水路や枡状の石組み遺構が検出されました。また、あわせて中国陶磁器をはじめとする器類や装身具等、王家の生活を偲ばせる資料が多数出土し、そのくらしの一端を明らかにしています。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成19（2007）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田　場　清　志

例　言

1．本報告書は、国営沖縄記念公園整備に伴い、平成15（2003）年度及び平成17（2005）年度に実施した首里城跡黄金御殿地区の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査及び資料整理は、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所より委託を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．資料整理作業は、平成18（2006）年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

4．資料整理にあたり、下記の方々には出土遺物の同定を依頼した。記して謝意を表したい。
中国産陶磁器：小野正敏（国立歴史民俗博物館）
本土産陶磁器：野上建紀（有田町歴史民俗資料館）
金属製品：久保智康（京都国立博物館）
石製品：大城逸朗（理学博士）

5．本書に掲載した地図は、国土地理院発行の1／25,000地形図を使用した。

6．本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて日本測地系に基づくものである。

7．土層、出土遺物の色調については、小山忠史・竹原秀夫著『新版標準土色帳24版』 によるものである。

8．本報告書の編集は小橋川剛、比嘉優子、天久瑞香ほかの協力により羽方誠、仲座久宜が行い、各章の執筆は次のとおり行った。
仲座久宜　第1章、第2章、第4章第4節・第5節1～5・11～13、第6章
羽方　誠　第3章、第4章第1節～第3節
小橋川剛　第4章第5節6～10・14～18

9．本書に掲載した調査時の写真撮影は羽方誠が行い、出土遺物の写真撮影は矢舟章浩、香嶋香が行った。

10．発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　次

序

例言

第１章　調査に至る経緯……1

　第１節　調査に至る経緯……1

　第２節　調査体制……1

第２章　位置と環境……4

　第１節　地理的環境……4

　第２節　歴史的環境……4

第３章　調査経過……10

第４章　遺構と遺物……22

　第１節　寄満地区の遺構と遺物……23

　第２節　黄金御殿地区の遺構と遺物……26

　第３節　近習詰所地区の遺構と遺物……79

　第４節　撹乱層の遺物……119

　第５節　遺物の種類別概観……122

第５章　自然科学分析　……199

第６章　結語……206

カラー図版……211

報告書抄録

図目次

第 1 図　沖縄本島の位置図 ……6
第 2 図　首里城の位置図と周辺の遺跡 ……7
第 3 図　旧首里城図 ……8
第 4 図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図 …9
第 5 図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）…9
第 6 図　調査区遺構平面図 ……19
第 7 図　寄満地区北側平面図 ……23
第 8 図　寄満地区平面図 ……24
第 9 図　石組み 1 平面図 ……28
第 10 図　石組み 1 立面図 ……28
第 11 図　石組み 1 内土層図 ……28
第 12 図　石組み 1 断面図 ……28
第 13 図　石組み 1 出土遺物 ……31
第 14 図　石組み 2 平面図 ……32
第 15 図　石組み 2 断面図 ……32
第 16 図　石組み 2 立面図 ……32
第 17 図　石組み 2 出土遺物 (1)……35
第 18 図　石組み 2 出土遺物 (2)……36
第 19 図　石組み 4 平面図 ……37
第 20 図　石組み 5 平面図 ……38
第 21 図　石組み 5 断面図 ……38
第 22 図　石組み 5 立面図・土層図 ……38
第 23 図　石組み 5 出土遺物 (1)……41
第 24 図　石組み 5 出土遺物 (2)……42
第 25 図　石積み 8 東壁立面図 ……43
第 26 図　石積み 11 平面図……45
第 27 図　石積み 11 立面図……45
第 28 図　石積み 11 出土遺物……45
第 29 図　石積み 12 平面図……46
第 30 図　石積み 12 東壁立面図……46
第 31 図　石列 3 平面図 ……47
第 32 図　石列 3 南壁立面図 ……47
第 33 図　石列 3 断面図 ……47
第 34 図　石列 3 南壁下部土層図（南側）……47
第 35 図　石列 5 平面図 ……48
第 36 図　石列 5 南壁立面図 ……48
第 37 図　石列 5 出土遺物 ……48
第 38 図　石列 9 平面図 ……51
第 39 図　石列 9 北壁立面図 ……51
第 40 図　石列 9 出土遺物 ……51
第 41 図　石列 11 ～ 13 周辺出土遺物 ……52
第 42 図　階段 1 平面図 ……53
第 43 図　階段 1 立面・断面図 ……53
第 44 図　建物跡 1 西壁土層図 ……55
第 45 図　物跡 1 出土遺物 ……55
第 46 図　建物跡 1 北壁土層図 ……56
第 47 図　C～E−4～6 グリッド黒褐色土出土遺物…58
第 48 図　溝 1 土層図・断面図 ……59
第 49 図　溝 1 壁面出土遺物 ……63
第 50 図　溝 2・溝 4 平面図 ……64
第 51 図　溝 4 南壁立面図 ……64
第 52 図　溝 2 出土遺物 ……64
第 53 図　溝 4 土層図 ……65
第 54 図　溝 2 断面図 ……65
第 55 図　溝 2 西壁立面図 ……65
第 56 図　トレンチ 1 東壁土層図 ……70
第 57 図　トレンチ 1 出土遺物 ……70
第 58 図　トレンチ 5 平面図 ……71
第 59 図　トレンチ 5 西壁土層図 ……71
第 60 図　トレンチ 5 出土遺物 ……73
第 61 図　トレンチ 8 土層図 ……74
第 62 図　トレンチ 8 出土遺物 ……77
第 63 図　石組み 3 平面図 ……80
第 64 図　石組み 3 立面図 ……80
第 65 図　石組み 3 断面図 ……80
第 66 図　石組み 3 出土遺物 ……80
第 67 図　トレンチ 7 出土遺物 ……83
第 68 図　石敷き 2 出土遺物 ……83
第 69 図　近習詰所地区北側平面図 ……85
第 70 図　石積み 1 南壁立面図 ……85
第 71 図　石積み 1 出土遺物 ……85
第 72 図　石積み 2 南壁立面図 ……86
第 73 図　石積み 2 出土遺物 ……86
第 74 図　近習詰所地区南側平面図 ……87
第 75 図　石積み 3 北壁立面図 ……90
第 76 図　石積み 5 東壁立面図 ……92
第 77 図　石積み 6 南壁立面図 ……92
第 78 図　石積み 6 東壁立面図 ……92
第 79 図　石積み 5 東西断面図 ……92
第 80 図　石積み 6 断面図 ……92
第 81 図　石積み 9 南壁立面図 ……93
第 82 図　石積み 10 東壁立面図 ……96
第 83 図　石列 4 平面図 ……97
第 84 図　石列 4 北壁立面図 ……97
第 85 図　石列 4 南北立面図 ……97
第 86 図　石列 4 出土遺物 ……98
第 87 図　階段 2 東壁立面図……100
第 88 図　階段 2 断面図……100

第 89 図　礎石跡 1 ～ 9 断面図……101
第 90 図　溝 3 立面図……106
第 91 図　溝 3 断面図……106
第 92 図　溝 3 出土遺物 (1) ……109
第 93 図　溝 3 出土遺物 (2) ……110
第 94 図　溝 5 平面図……111
第 95 図　溝 5 南壁立面図……111
第 96 図　溝 5 南北断面図……111
第 97 図　トレンチ 3 南壁土層図……113
第 98 図　トレンチ 3 出土遺物……115
第 99 図　トレンチ 4 南西壁土層図……116
第 100 図　トレンチ 4 出土遺物……118
第 101 図　撹乱層等の出土遺物 (1) ……119
第 102 図　撹乱層等の出土遺物 (2) ……120
第 103 図　撹乱層等の出土遺物 (3) ……121
第 104 図　中国産青磁 (1) ……125
第 105 図　中国産青磁 (2) ……126
第 106 図　中国産白磁・染付 (1) ……129
第 107 図　中国産染付 (2) ……130
第 108 図　ベトナム産染付・中国産色絵・瑠璃釉・緑釉鉄絵・三彩・白地鉄絵・天目・朱泥・タイ産褐釉陶器・半練土器 ……134
第 109 図　中国産褐釉陶器……135
第 110 図　本土産陶磁器……138
第 111 図　沖縄産施釉陶器 (1) ……140
第 112 図　沖縄産施釉陶器 (2) ……141
第 113 図　沖縄産無釉陶器……142
第 114 図　陶質土器・瓦質土器……145
第 115 図　高麗系瓦・大和系瓦……147
第 116 図　大和系瓦・明朝系丸瓦 ……148
第 117 図　明朝系平瓦・丸瓦・飾り瓦……149
第 118 図　金属製品 (1) ……151
第 119 図　金属製品 (2) ……152
第 120 図　銭貨・玉類 ……155
第 121 図　貝製品・骨製品 ……157
第 122 図　煙管・碁石・円盤状製品・石器・石製品……159
第 123 図　石製品・石造製品 (1) ……160
第 124 図　石造製品 (2) ……161
第 125 図　№ 1（赤色土サンプル）のＸ線回析図……202
第 126 図　№ 8(黒色付着物サンプル) のＸ線回析図 ……204
第 127 図　№ 8(黒色付着物サンプル) の蛍光Ｘ線スペクトル……205
第 128 図　首里城図（部分)……207
第 129 図　仮称「阪谷測量図」……207
第 130 図　仮称「阪谷測量図」と遺構平面図の重ね図……209

表目次

第 1 表　発掘調査工程表……17
第 2 表　遺構等一覧表 (1) ……18
第 3 表　遺構等一覧表 (2) ……21
第 4 表　中国産青磁観察一覧表 (1) ……127
第 5 表　中国産青磁観察一覧表 (2) ……128
第 6 表　中国産白磁観察一覧表……131
第 7 表　中国産染付観察一覧表 (1) ……132
第 8 表　中国産染付観察一覧表 (2) ……133
第 9 表　その他の輸入陶磁器観察一覧表 …136
第 10 表　タイ産半練・タイ産褐釉薬陶器・中国産褐釉陶器観察一覧表……137
第 11 表　本土産陶磁器観察一覧表 ……139
第 12 表　沖縄産施釉陶器観察一覧表 (1) …143
第 13 表　沖縄産施釉陶器観察一覧表 (2) …144
第 14 表　沖縄産無釉陶器観察一覧表 ……144
第 15 表　陶質土器観察一覧表……146
第 16 表　瓦質土器観察一覧表……146
第 17 表　瓦観察一覧表……150
第 18 表　金属製品観察一覧表 (1) ……153
第 19 表　金属製品観察一覧表 (2) ……154
第 20 表　銭貨法量一覧表……156
第 21 表　玉類観察一覧表……156
第 22 表　貝製品観察一覧表……158
第 23 表　骨製品観察一覧表……158
第 24 表　煙管法量一覧表……162
第 25 表　碁石観察一覧表……162
第 26 表　円盤状製品観察一覧表……162
第 27 表　石器・石製品・石造製品観察一覧表…162
第 28 表　黄金御殿地区遺物出土状況 ……167
第 29 表　中国産白磁出土状況一覧 ……173
第 30 表　中国産染付出土状況一覧 ……173
第 31 表　中国産青磁出土状況一覧 ……174
第 32 表　その他の輸入陶磁器出土状況一覧…176
第 33 表　中国産・タイ産褐釉陶器出土状況一覧……176
第 34 表　本土産陶磁器出土状況一覧 ……177
第 35 表　沖縄産施釉陶器出土状況一覧 ……178
第 36 表　沖縄産無釉陶器出土状況一覧 ……180

第37表　陶質土器・瓦質土器・土器出土状況一覧 ……181
第38表　瓦出土状況一覧 ……182
第39表　塼出土状況一覧 ……184
第40表　金属製品出土状況一覧 ……185
第41表　銭貨出土状況一覧 ……186
第42表　玉類出土状況一覧 ……186
第43表　煙管出土状況一覧 ……186
第44表　円盤状製品出土状況一覧 ……186
第45表　貝製品・骨製品・石器・石製品・石造製品出土状況一覧 ……187
第46表　貝類出土状況（巻貝） ……188
第47表　貝類出土状況（二枚貝） ……191
第48表　魚骨出土状況 ……195
第49表　ニワトリ出土状況 ……196
第50表　トリ出土状況 ……197
第51表　ウミガメ・ウマ・ネコ・ヤギ・ウシ・ネズミ・ジュゴン出土状況 ……197
第52表　ブタ出土状況 ……198
第53表　放射性炭素年代測定結果 ……199
第54表　暦年較正結果 ……200
第55表　№1（赤色土サンプル）のX線回析測定条件 ……200
第56表　№8（黒色付着物サンプル）のX線回析測定条件 ……203
第57表　蛍光X線分析の測定条件 ……203
第58表　№8（黒色付着物サンプル）の半定量結果 ……203

図版目次

図版1　発掘調査開始前の状況（東から） ……10
図版2　発掘調査開始前の状況（南西から） …11
図版3　重機による掘削作業（南西から） ……11
図版4　コンクリート製の建物基礎（北から） ……12
図版5　旧琉球大学の水道管の撤去状況（東から）……12
図版6　調査区内の環境整備作業状況（南西から）……13
図版7　完掘後の状況（南から） ……13
図版8　聞き取り調査風景 ……14
図版9　聞き取り調査風景 ……14
図版10　室内作業風景 ……14
図版11　発掘調査のメンバー ……15
図版12　平成17年度作業風景（北東から） …16
図版13　調査区全景（東から） ……22
図版14　寄満地区北側 ……23
図版15　寄満地区（西から） ……25
図版16　寄満地区（北西から） ……25
図版17　黄金御殿地区全景（南から） ……26
図版18　黄金御殿地区全景（東から） ……27
図版19　石組み1検出途中状況（北東から） 29
図版20　石組み1検出途中状況（北から） …29
図版21　石組み1（北東から） ……30
図版22　石組み1（南東から） ……30
図版23　石組み1（南から） ……31
図版24　石組み2（東から） ……33
図版25　石組み2（西から） ……33
図版26　石組み2南壁（北から） ……34
図版27　石組み4（北東から） ……37
図版28　石組み5（東から） ……39
図版29　石組み5（北西から） ……39
図版30　石組み5（北から） ……40
図版31　石積み8（北西から） ……43
図版32　石積み7・8（東から） ……44
図版33　石積み7・8（南西から） ……44
図版34　石積み11（東から） ……45
図版35　石積み12（北西から） ……46
図版36　石列3石敷き3（北西から） ……47
図版37　石列5（北西から） ……48
図版38　石列5（北東から） ……49
図版39　石列5（北から） ……49
図版40　石積み12、石列6・7・14・16（北から） ……50
図版41　石列11～13（北西から） ……51
図版42　石列15（南東から） ……52
図版43　階段1、石列8（東から） ……53
図版44　階段1、石列8（西から） ……54
図版45　建物跡1土層堆積状況（西から） ……55
図版46　建物跡1（北東から） ……57
図版47　建物跡1（北から） ……57
図版48　建物跡1（南西から） ……57
図版49　建物跡1（北西から） ……57
図版50　建物跡1（南西から） ……57
図版51　溝1北壁（南西から） ……60
図版52　溝1南壁（北西から） ……61
図版53　溝1北壁（南から） ……61
図版54　溝1（西から） ……62
図版55　溝4（北西から） ……66

図版 56　溝 4（北東から）……66
図版 57　溝 4（南西から）……67
図版 58　溝 2（北東から）……67
図版 59　溝 4（東から）……68
図版 60　溝 2（西から）……69
図版 61　溝 4（北から）……69
図版 62　トレンチ 1 東壁（北西から）……70
図版 63　トレンチ 5 内遺物出土状況（南から）……71
図版 64　トレンチ 5（南から）……72
図版 65　トレンチ 8（北から）……75
図版 66　トレンチ 8（北西から）……75
図版 67　トレンチ 8 南壁（北から）……76
図版 68　トレンチ 8 南壁（北から）……76
図版 69　近習詰所地区（東から）……79
図版 70　石組み 3 検出途中状況（東から）…81
図版 71　石組み 3 内土層堆積状況（北東から）……81
図版 72　石組み 3（南西から）……82
図版 73　石組み 3（南から）……82
図版 74　石敷き 2 と礎石（北東から）……83
図版 75　石敷き 2（東から）……84
図版 76　石積み 1・2（西から）……86
図版 77　石積み 1・2・9(東から）……88
図版 78　石積み 1・2・5・6（西から）…89
図版 79　石積み 3（南から）……90
図版 80　石積み 5・6（東から）……91
図版 81　石積み 6（北から）……93
図版 82　石積み 9 と礎石跡（東から）……94
図版 83　石積み 10（東から）……95
図版 84　石積み 10（西から）……96
図版 85　石列 4 検出途中状況（南から）……99
図版 86　石列 4（南から）……99
図版 87　階段 2（北西から）……100
図版 88　礎石跡（東から）……102
図版 89　礎石跡 4（東から）……103
図版 90　礎石跡 6（北から）……103
図版 91　礎石跡 1・2（東から）……104
図版 92　礎石跡 4 検出作業状況（北から）…105
図版 93　溝 3（東から）……106
図版 94　溝 3 検出途中状況（東から）……107
図版 95　溝 3 検出途中状況（北から）……107
図版 96　溝 3 検出途中状況（東から）……108
図版 97　溝 3 検出途中状況（北西から）……108
図版 98　溝 5（北から）……111
図版 99　溝 5（西から）……112
図版 100　トレンチ 3（北から）……113
図版 101　トレンチ 3（西から）……114
図版 102　トレンチ 4 掘削前状況（南東から）116
図版 103　トレンチ 4 掘削途中状況（北西から）……117
図版 104　トレンチ 4 南壁（北から）……117
図版 105　貝 1　巻貝 ……163
図版 106　貝 2　巻貝・二枚貝 ……164
図版 107　骨 1 ……165
図版 108　骨 2 ……166
図版 109　調査区全景（東から）……212
図版 110　調査区全景（南から）……213
図版 111　寄満地区北側（北西から）……213
図版 112　寄満地区（西から）……214
図版 113　寄満地区（北西から）……214
図版 114　黄金御殿地区（南西から）……215
図版 115　黄金御殿地区（北西から）……215
図版 116　石組み 1 検出途中状況（東から）216
図版 117　石組み 1（東から）……216
図版 118　石組み 1 内遺物出土状況（北から）217
図版 119　石組み 2 内遺物出土状況（南東から）……217
図版 120　石組み 2 内土層堆積状況（東から）218
図版 121　石組み 2（西から）……218
図版 122　石組み 2 内南東隅（北西から）……219
図版 123　石組み 2 内（北から）……220
図版 124　石組み 5 内土層堆積状況（北から）220
図版 125　石組み 5（北から）……221
図版 126　石組み 5（西から）……222
図版 127　石列 11 ～ 13（北西から）……222
図版 128　石積み 7・8（東から）……223
図版 129　石積み 7・8（北東から）……223
図版 130　石組み 11（東から）……224
図版 131　石積み 12、石列 6・7・14・16（北から）……224
図版 132　石列 3、石敷き 3（北西から）……225
図版 133　石列 5（北から）……226
図版 134　階段 1、石列 8（南から）……226
図版 135　階段 1、石列 8（西から）……227
図版 136　建物跡に敷かれた礫（南から）……227
図版 137　建物跡南東隅（南東から）……228
図版 138　建物跡（北東から）……228
図版 139　作業風景（東から）……229
図版 140　建物跡南壁（南東から）……230

図版 141　建物跡南壁（南西から）……230
図版 142　溝 1 南壁（北西から）……231
図版 143　溝 1 南壁（北から）……231
図版 144　溝 1 北壁（南から）……232
図版 145　溝 4 内土層堆積状況（南西から）……232
図版 146　溝 4 内土層堆積状況（西から）……233
図版 147　溝 4（西から）……234
図版 148　溝 4 南壁（北から）……235
図版 149　溝 2（北から）……235
図版 150　トレンチ 5（北から）……236
図版 151　トレンチ 5（東から）……237
図版 152　トレンチ 8（北西から）……237
図版 153　トレンチ 8 北壁（北から）……238
図版 154　トレンチ 8 底部（北から）……238
図版 155　トレンチ 8 内（西から）……239
図版 156　近習詰所地区（東から）……239
図版 157　石組み 3（西から）……240
図版 158　石組み 3（南から）……240
図版 159　トレンチ 7（西から）……241
図版 160　石積み 2 前面検出途中状況（北から）241
図版 161　石積み 1・2・9 ……242
図版 162　石積み 2・6（北から）……242
図版 163　石積み 2・5・6・9（西から）……243
図版 164　石積み 1・2・9（東から）……244
図版 165　石列 4（南西から）……245
図版 166　石列 4（南から）……246
図版 167　礎石 4（東から）……246
図版 168　礎石 4・5（北東から）……247
図版 169　溝 3 検出途中状況（北から）……247
図版 170　溝 3 内遺物堆積状況（西から）……248
図版 171　溝 3 検出途中状況（南から）……248
図版 172　溝 3 内（東から）……249
図版 173　トレンチ 3 南壁（北から）……249
図版 174　溝 3 崩落部（北から）……250
図版 175　溝 3（東から）……250
図版 176　トレンチ 4 南壁（北から）……251
図版 177　トレンチ 4 南壁（北から）……251
図版 178　中国産青磁 (1)　外面……252
図版 179　中国産青磁 (1)　内面……253
図版 180　中国産青磁 (2)　外面……254
図版 181　中国産青磁 (2)　内面……255
図版 182　中国産白磁・染付 (1) 外面 ……256
図版 183　中国産白磁・染付 (1) 内面 ……257
図版 184　中国産染付 (2) 外面 ……258
図版 185　中国産染付 (2) 内面 ……259
図版 186　ベトナム産染付・中国産色絵・瑠璃釉・緑釉鉄絵・三彩・白地鉄絵・天目・朱泥・タイ産褐釉陶器・半練土器外面 ……260
図版 187　ベトナム産染付・中国産色絵・瑠璃釉・緑釉鉄絵・三彩・白地鉄絵・天目・朱泥・タイ産褐釉陶器・半練土器内面 ……261
図版 188　本土産陶磁器　外面……262
図版 189　本土産陶磁器　内面……263
図版 190　沖縄産施釉陶器 (1)　外面 ……264
図版 191　沖縄産施釉陶器 (1)　内面 ……265
図版 192　沖縄産施釉陶器 (2)　外面 ……266
図版 193　沖縄産施釉陶器 (2)　内面 ……267
図版 194　上：中国産褐釉陶器
下：沖縄産無釉陶器
左：外面　右：内面……268
図版 195　上：陶質土器・瓦質土器
下：高麗系瓦・大和系瓦
左：外面　右：内面……269
図版 196　上：大和系瓦・明朝系丸瓦
下：明朝系平瓦・丸瓦・飾り瓦
左：外面　右：内面……270
図版 197　金属製品　左：表　右：裏……271
図版 198　銭貨・玉類　表……272
図版 199　銭貨・玉類　裏……273
図版 200　上：貝製品・骨製品
下：煙管・碁石・円盤状製品・石器・石製品
左：表　右：裏……274
図版 201　上：石製品・石造製品
下：石造製品
左：表 右：裏 ……275

第1章　調査に至る経緯

第1節　調査に至る経緯

首里城内郭地区の整備は、昭和61（1986）年に国営沖縄記念公園首里城地区として整備されることが閣議決定されたことにより始まる。以降、年次的に発掘による遺構確認調査が実施され、その調査成果及び昭和59（1984）年に沖縄県により策定された首里城公園基本計画の理念に基づき復元整備が行われ、現在に至っている。今回の調査はこれまでの経緯をふまえ、内閣府沖縄総合事務局沖縄記念公園事務所の委託により、国王・王妃の居間であったとされる黄金御殿跡の遺構を中心に確認する目的で、平成15（2003）年度及び平成17（2005）年度に実施された。

第2節　調査体制

本報告書に係る発掘調査及び資料整理業務は、平成15（2003）年及び平成17（2005）年度に実施し、調査報告書作成に係る資料整理業務は平成18(2006)年度に実施した。その体制は次のとおりである(職名は当時のもの)。

平成15（2003）年度

事業主体　沖縄県教育委員会
　教育長　山内　彰

事業所管課　沖縄県教育庁文化課
　課長　日越 国昭
　課長補佐　大城　慧（事業担当）・上地 泰順（事務担当）
　記念物係　係長　島袋　洋・専門員　中山　晋（事業担当）
　文化係　主幹兼係長　宮国　栄（事務担当）・主事　富里 貴子

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　所長　安里 嗣淳
　副所長兼庶務課長　安冨祖 英紀
　庶務課 主査 比嘉 美佐子・主査 西江 幸枝・主事 川元 哲也
　調査課 課長 盛本　勲
　調査課 専門員 羽方　誠
　文化財調査嘱託員 宮城 奈緒、比嘉優子、仲地和美

発掘調査作業員
　比嘉清惠、吉田洋、比嘉剛、渡嘉敷努、島袋文子、照屋榮子、津波古美津江、嘉味田千枝子、諸見里幸子、西島本成子、玉城史子、大嶺愛子、當銘広予、岩田智子、小谷大道、森下想一、石川栄有、知名伸、尾上智紀、我那覇修太、奈良伊理奈、石井龍太

資料整理作業員
　大村由美子、国場のりえ、池原直美、玉寄智恵子、瑞慶覧尚美、高良三千代、玉城恵美利、赤嶺雅子、後藤典子、光嶋香、仲本志乃、玉城勝雄、新川貢、本村邦子、金城京子

資料整理指導
神谷厚昭、名和　純、家田淳一

聞き取り調査
知念源政、大城宜信、真榮平房敬

平成17（2005）年度
事業主体　沖縄県教育委員会
教育長　仲宗根 用英

事業所管課　沖縄県教育庁文化課
課長　千木良 芳範
課長補佐 島袋　洋（事業担当）・崎濱 文秀（事務担当）
記念物係　主幹兼係長 盛本　勲
専門員　知念 隆博、新垣　力（事業担当）
文化係　主幹兼係長　宮国　栄・主任 神谷リカ（事務担当）

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　田場 清志
副所長兼庶務課長　赤嶺 正幸
庶務課 主査　比嘉 美佐子・主査 山田 恵美子、主任 城間 奈津子
調査課 課長　岸本 義彦
調査課 専門員　山本 正昭
文化財調査嘱託員　比嘉尚輝、喜多亮輔、崎原恒寿、山田浩久
伊集ゆきの、矢舟章浩、仲間留美

発掘調査作業員
石垣浩充、吉村政博、泉谷塁、中村フサ子、浦崎京子、諸見里幸子、大宜見より子、与那嶺勢津子、真志喜正枝、我如古みどり、大城孝仁、仲田均、比嘉洋子、川上益子、島仲恵子、佐渡山正子、呉我フジ子、宮国恵子、宮城悦子、嘉味田千枝子、安次富マサ子、比嘉剛、大城誠

資料整理作業員
玉城恵美利、赤嶺雅子、石嶺敏子、上原園子、照屋利子、城間千鶴子、藤田奈穂美、金城克子、比嘉洋子、外間瞳、宮里なつ子、喜屋武朋子、又吉純子、比嘉登美子、比嘉孝子、平良貴子、新垣利津代、崎原美智子、上原美穂子、大村由美子、国場のりえ、譜久村泰子、荻堂さやか、吉村綾子、城間いづみ

資料整理指導
金子浩昌、森毅、樋泉岳史、堂込秀人

平成18（2006）年度

事業主体　　沖縄県教育委員会
　　教育長　仲宗根 用英

事業所管課　　沖縄県教育庁文化課
　　課長　千木良 芳範
　　課長補佐 島袋　洋（事業担当）・崎濱 文秀（事務担当）
　　記念物係　主幹兼係長 盛本　勲
　　専門員　知念 隆博、新垣　力（事業担当）
　　文化係　主幹兼係長　宮国　栄・主任 神谷リカ（事務担当）

事業総括・実施　沖縄県立埋蔵文化財センター
　　所長　田場 清志
　　副所長兼庶務課長　瑞慶覧 康博
　　庶務課 主査　玉寄 秀人・主査 山田 恵美子、主任 城間 奈津子
　　調査課 課長　岸本 義彦
　　調査課 主任　仲座 久宜
　　調査課 専門員　小橋川 剛

文化財調査嘱託員　比嘉優子、天久瑞香

資料整理作業
　埋蔵文化財資料整理嘱託員 金城克子、照屋利子、比嘉なおみ、仲地和美、喜屋武朋子、野村知子

資料整理指導
　上原　靜

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

首里城は、沖縄本島の南部、那覇市首里に所在する城跡である。標高は最高で136ｍを測り、那覇市内では弁ヶ嶽に次いで高所に位置している。そのため、首里城からは周辺の町並みや近隣市町村、那覇港及び東中国海を臨むことができる（第１・２図）。

この首里城の基盤を構成するのは、隆起珊瑚礁を起源とする琉球石灰岩で、その下位には第三期に形成された島尻層群が堆積している。表層の琉球石灰岩層に浸透した雨水は、不透水層である島尻層のクチャと称される泥岩・砂岩でせき止められ、両者の境界から湧泉としてあふれ出すこととなる。この湧水を利用した井泉・樋川は首里の各地に点在し、今日も豊富な湧水量を誇っている。

首里城はその北側に虎瀬山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地しており、風水思想の観点からも蔵風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

第２節　歴史的環境

首里城の創建について、現時点で明確な記録は確認されていないが、文献上最初に表れるのは、1427年建立の安国山樹華木碑記においてである。その碑文の概要は、首里城周辺に池（龍潭）を掘り、山を築いて華木を植えたことが記され、今日でいう都市計画・環境整備がすでに行われていたことを示している。この碑文の年代から推して、首里城は尚巴志王代（1422～1439）にはすでに王城としての構えを確立していたと考えられている。その後、明治12（1879）年の首里城明け渡しまで何世紀にもわたり、歴代の王により幾度もの拡張工事が行われるとともに、数回に及ぶ焼失・重修を経て、現在の首里城のフォルムが完成したとされている。

このように首里城は、15世紀前半とされる築城から、約500年間のながきにわたり、琉球王国として栄華を誇ってきた。この王国の崩壊後、正殿をはじめとするこれらの建造物群は、明治29（1896）年まで、熊本鎮台沖縄分遣隊の兵舎として使用されたほか、その後は首里市立女子工芸学校、県立工業徒弟学校、首里第一尋常高等学校などの校舎としても利用され、各所が改変された。その間に建物は老朽化により解体される危機を乗り越え、中心的建造物数件については、その沖縄独自の歴史や意匠から、大正14（1925）年に特別保護建造物に指定される。また、その３年後の昭和２（1927）年には解体修理が行われ、昭和４（1929）年には正殿や付随する主要な城門についても国宝となった。

しかし、これらの建造物群も、太平洋戦争時に日本軍第32軍司令部の陣地壕が首里城の地下深くに構築されたことで、昭和20（1945）年に米軍の集中砲火を浴び、その一帯は焦土と化すこととなる。

終戦後は、米国琉球軍政本部教育部の計画により、昭和25（1950）年に琉球大学が創設され、校舎等施設の造成・建設工事で首里城の痕跡はさらなるダメージを受けることとなる。しかし、このような状況においても首里城の威容は衰えることなく、規模・内容ともに沖縄を代表するに相応しい城跡として、昭和47（1972）年の日本復帰と同時に国の史跡として指定され、その後平成12（2000）年12月には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の一部として世界遺産に登録された。今日では年間182万人もの観光客が訪れる沖縄の一大観光地として、常に賑わいを見せている（平成18年度実績）。

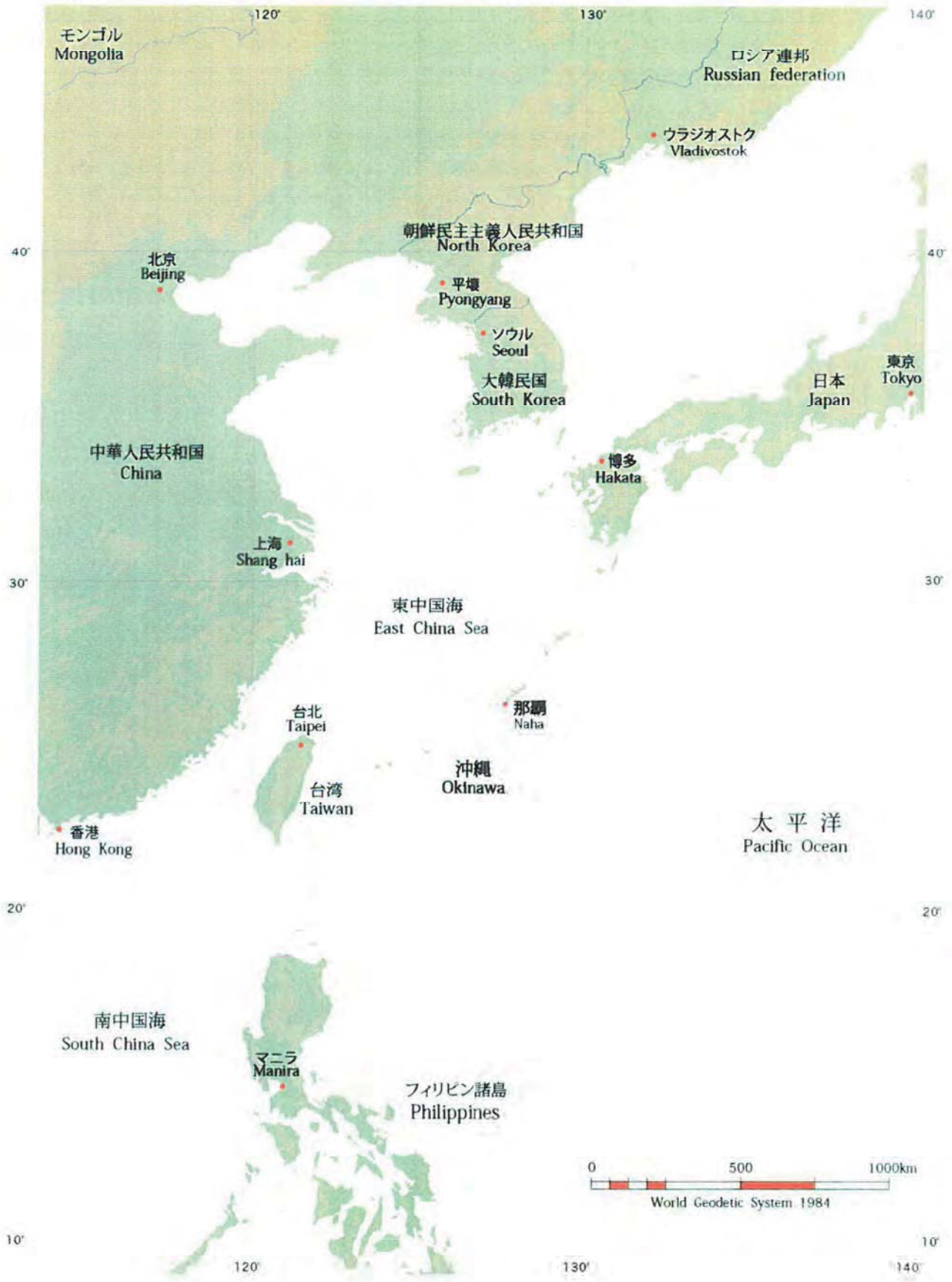
今調査の対象となった黄金御殿は、御内原書院または奥書院とも呼ばれ、首里城の正殿裏側一帯を指す御内原の中心的建物であった。正殿の南側に位置し、国王・王妃の寝室・居間として使用されていた建物である。創建年代は不明であるが、1660年の失火により焼失し、1670年までには正殿ほかの建物とともに重修された記録が残っている。その後1709年に再び焼失し、重修が行われるが、この重修後の建物の構造は、二階建て・寄棟造り・本瓦葺きであったとされる。

一階部分は西側に左掖門（暗墨〔くらしん〕御門）が付随する通路が設けられており、そこは石段を

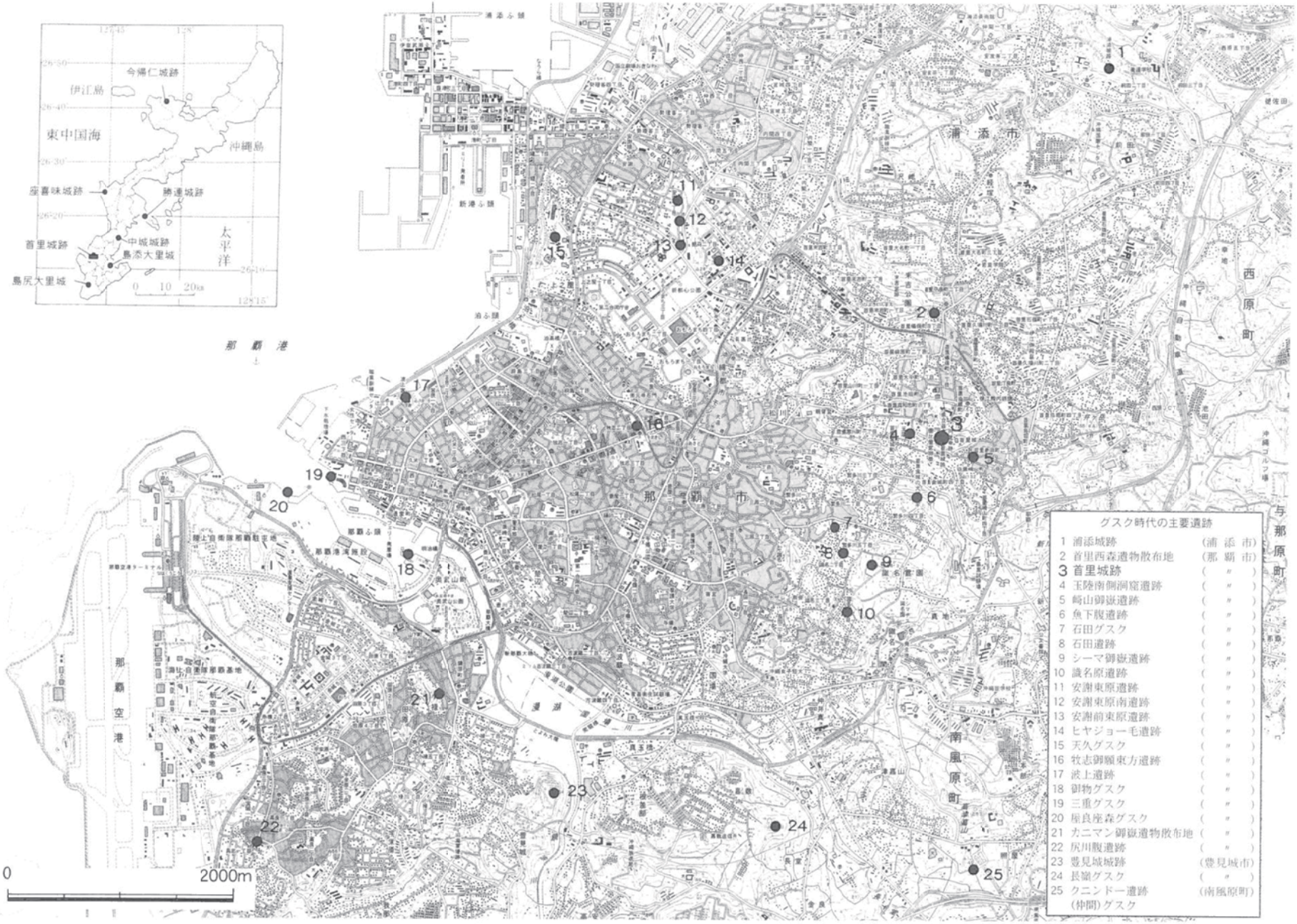
上がると石敷きが施され、直進して右に折れると二階殿へ通じていた。二階部分は国王・王妃の寝室・居間として使用され、北側に接する正殿及び南東の二階殿へと往来可能な通路が存在していたとされる(第3・131図)。東側は国王親族の厨房である寄満に接する。また、南西側には近習詰所と称される国王の諸雑用を行う役人の詰め所が鈴引之間をはさんで接し、鈴の音を合図に御内原と正殿との連絡を取り次いでいたとされる。なお、今回の調査範囲はこの黄金御殿のほか、近習詰所及び寄満の一部にも及んだが、これらの建物構造に結びつく記録は現時点で見あたらない。

王国の崩壊後、黄金御殿の建物は熊本鎮台沖縄分遣隊の医営官舎（第4図）として使用されたほか、首里市立女子工芸学校の校舎としても使用され、その後昭和11年（1936）以降には、書院や鎖之間等の建物とともに、古材を南殿の修復に使用するために解体された。

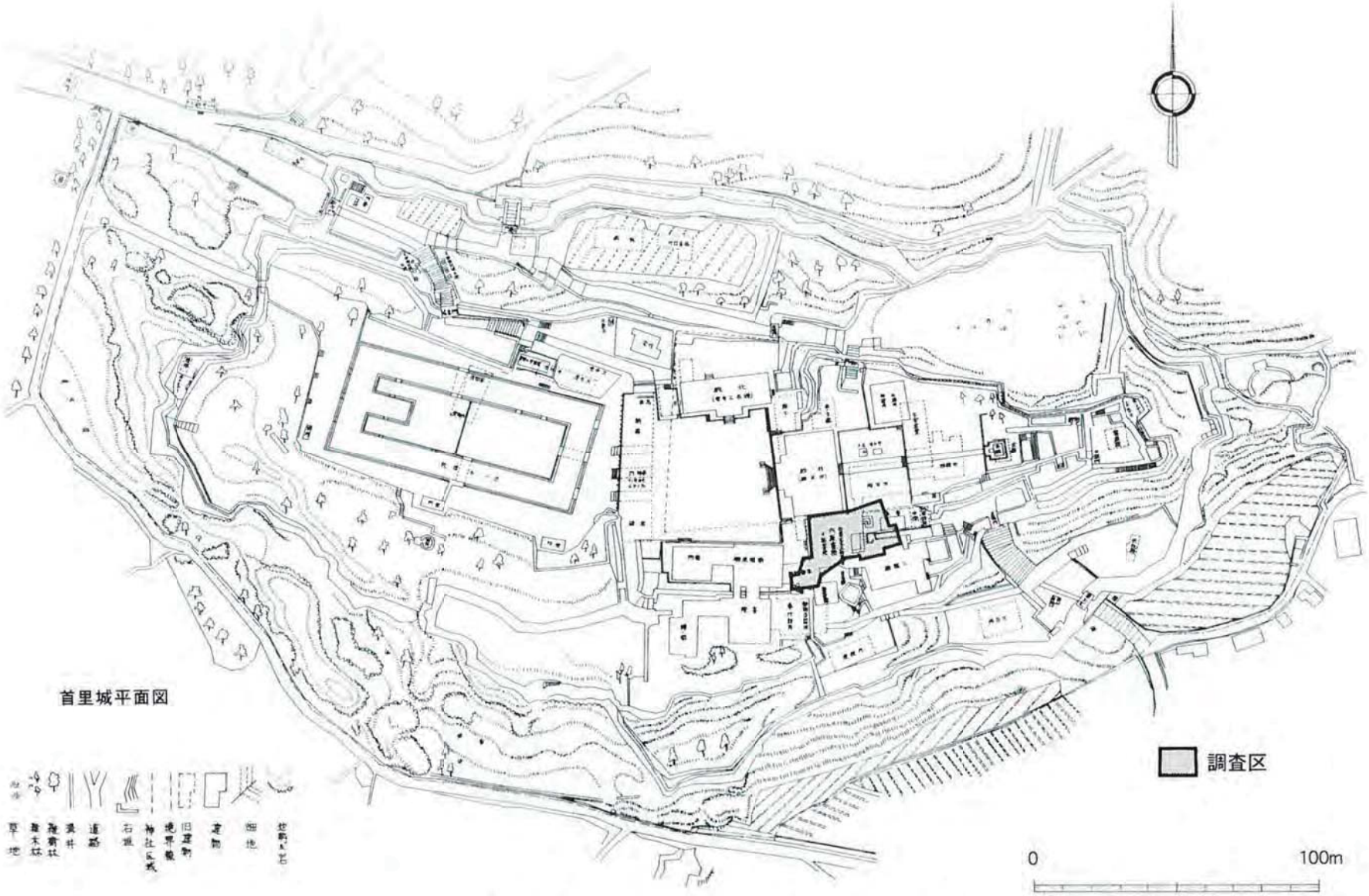
その数年後には戦災により一帯は灰燼に帰すこととなり、その廃墟の中、昭和25（1950）年には琉球大学の開学により多くの校舎・施設が建設される。黄金御殿跡周辺の敷地は、大学が西原町に移転を終える昭和59（1984）年まで、本館西側及び教養教室F南側の駐車場として使用されていたようである（第5図)。


モンゴル
Mongolia
ロシア連邦
Russian federation
ウラジオストク
Vladivostok
朝鮮民主主義人民共和国
North Korea
北京
Beijing
平壌
Pyongyang
ソウル
Seoul
大韓民国
South Korea
日本
Japan
東京
Tokyo
中華人民共和国
China
博多
Hakata
上海
Shang hai
東中国海
East China Sea
台北
Taipei
那覇
Naha
沖縄
Okinawa
台湾
Taiwan
香港
Hong Kong
太 平 洋
Pacific Ocean
南中国海
South China Sea
マニラ
Manira
フィリピン諸島
Philippines
0
500
1000km
World Geodetic System 1984
120°
130°
140°
40°
30°
20°
10°

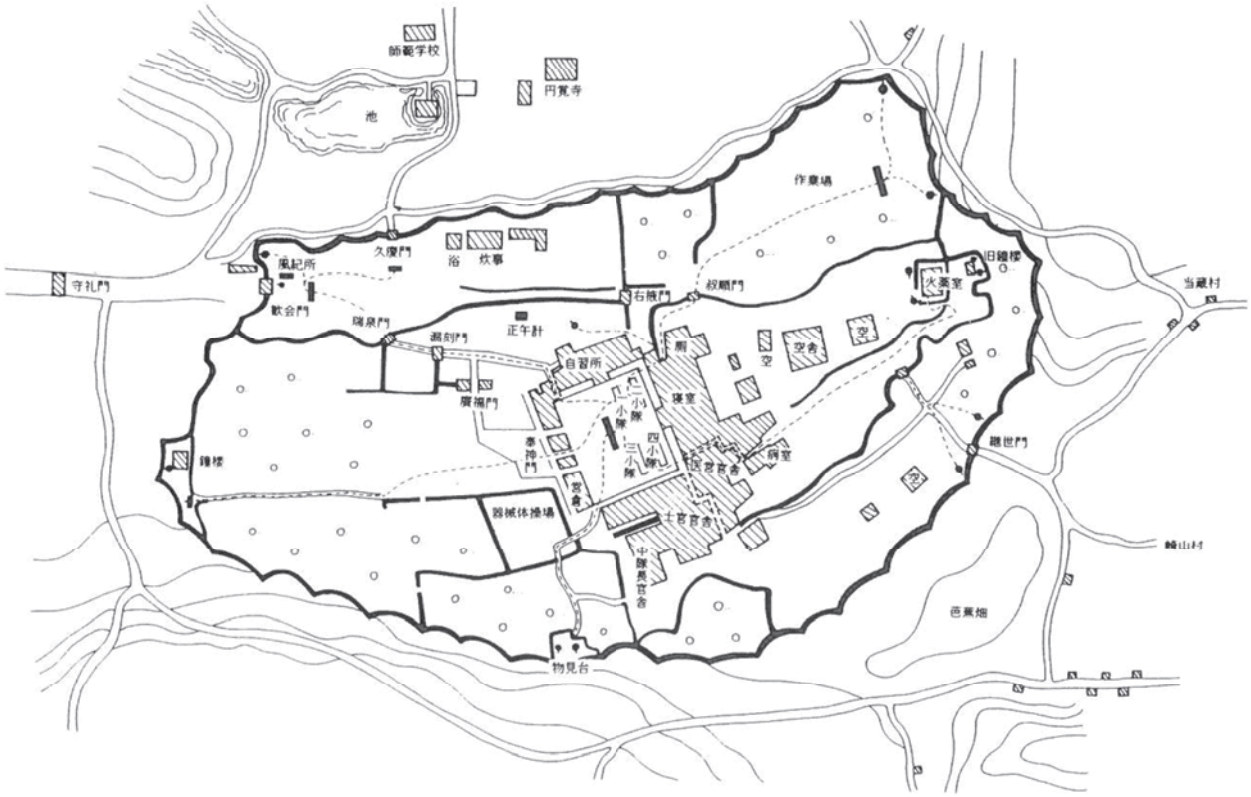
第１図　沖縄本島の位置



第２図　首里城の位置及び周辺の遺跡



第３図　旧首里城図（昭和６年頃　坂谷良之進図　県立図書館蔵）



第４図　旧首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図
（本図は、原図を模写し新たに文字を打ち直したものである。沖縄県史料編集室蔵）

第５図　旧首里城図（旧琉球大学校舎配置図）

第３章　調査経過

１　**平成 15 年度**　（調査期間：平成 15 年 6 月 2 日～平成 15 年 12 月 27 日　　調査面積：450 ㎡）

発掘調査区は、沖縄戦以後に持ち込まれた造成土や養生芝生に覆われていた。また首里城公園内の管理・運営業務に使用されている水道管や電気管といった埋設物が多数あることが事前に判明していたので、これらが発掘調査の妨げになると考えられた。そこで発掘調査を開始する際に、まずこれらの埋設物を移設するよう国営沖縄記念公園事務所首里出張所に要請したが、使用中のため移設されることはなかった。

造成土については、沖縄県立埋蔵文化財センター職員立ち会いのもと、国営沖縄記念公園事務所首里出張所が委託した首里城内の保全工事業者が除去することになっていた。当初の予定では 6 月から発掘調査を開始することになっていたため、それに合わせて現場事務所の設置準備や発掘調査作業員の雇用手続きを行ったが、保全工事業者の決定が遅れたため調査を開始することが出来なかった。そこで調査を開始するまでの間は、現場事務所内において資料整理作業を行うこととした。

造成土の除去は 8 月 18 日から始まり、埋設物を傷つけないよう慎重に作業が行われた。埋設物がある部分については、埋設物上面を露出させて位置を確認し、それ以上の掘削は行わなかった。

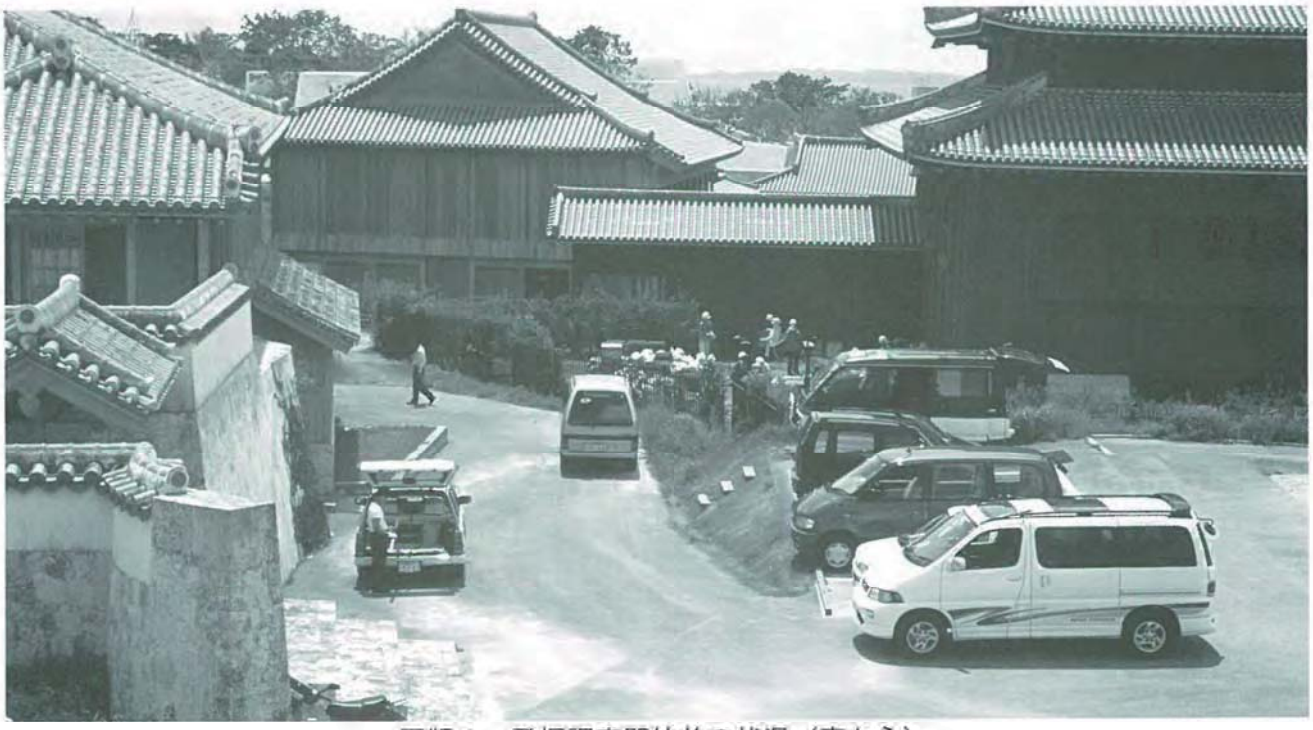
重機で造成土を除去した後、沖縄戦時の不発弾の有無を確認するために磁気探査を行ったが、不発弾等は確認されなかった。

人力による作業はまず、調査区内の環境整備から行った。埋設物がある部分は畦状に土が残っていた状態であったので、両サイドに土嚢を積み、崩落を防いだ。また調査区を東西に縦断するように走っていた電気ケーブル部分については、土砂で覆い、その上に板を敷き、掘削土運搬等に使う通路とした。

造成土を除去した段階で、遺物を含む撹乱層（暗褐色土）や過去に発掘調査した部分の保護砂・埋め土が確認されたので、これらを掘り下げていき遺構の検出を行った。遺構の検出作業が終了した段階で、高所作業車を使って全体写真撮影を行った。

調査期間中、雨天時には現場事務所内において出土品の洗浄・ナンバーリング等の作業を行った。

調査区の埋め戻し作業は国営沖縄記念公園事務所首里出張所が行うことになっていたので、調査区をブルーシートで覆った後、現場を引き渡して作業を終了した。



図版１　発掘調査開始前の状況（東から）

図版２　調査開始前の状況（南西から）

図版３　重機による掘削作業（南西から）

図版４　コンクリート製の建物基礎（北から）

図版５　旧琉球大学の水道管の撤去状況（東から）

図版６　調査区内の環境整備作業状況（南西から）

図版７　完掘後の状況（南から）

図版８　聞き取り調査風景

図版９　聞き取り調査風景

図版 10　室内作業風景

図版 11　発掘調査メンバー

2　**平成 17 年度**（調査期間：平成 17 年 10 月 24 日～平成 17 年 12 月 1 日　　調査面積：50 ㎡）

本年度の調査は、平成 15 年度の調査において埋設物があったため調査できなかった部分について行った。その結果、平成 15 年度に検出した遺構に連続する遺構が確認された。また平成 15 年度の調査では検出できなかった遺構も検出された。

図版 12　平成 17 年度　作業風景（北東から）

3　平成 18 年度

平成 15･17 年度の発掘調査で得られた遺物･図面･写真等は調査終了後に沖縄県立埋蔵文化財センターへ搬入し、平成 18 年度から本格的な資料整理を実施した。調査で得られた遺物は遺物収納コンテナに換算して 49 箱であった。まず遺物の取り上げ名称を整理した後、出土地点ごとに遺物を作業台に広げ、種類ごとに遺物を分類した。分類作業と並行して、遺構の時期を特定する遺物や特徴的な遺物、残りが良い遺物を抜き出し、実測図を作成し写真撮影を行った。そして遺構・遺物の実測図をレイアウトして、トレースを行い版組を行った。

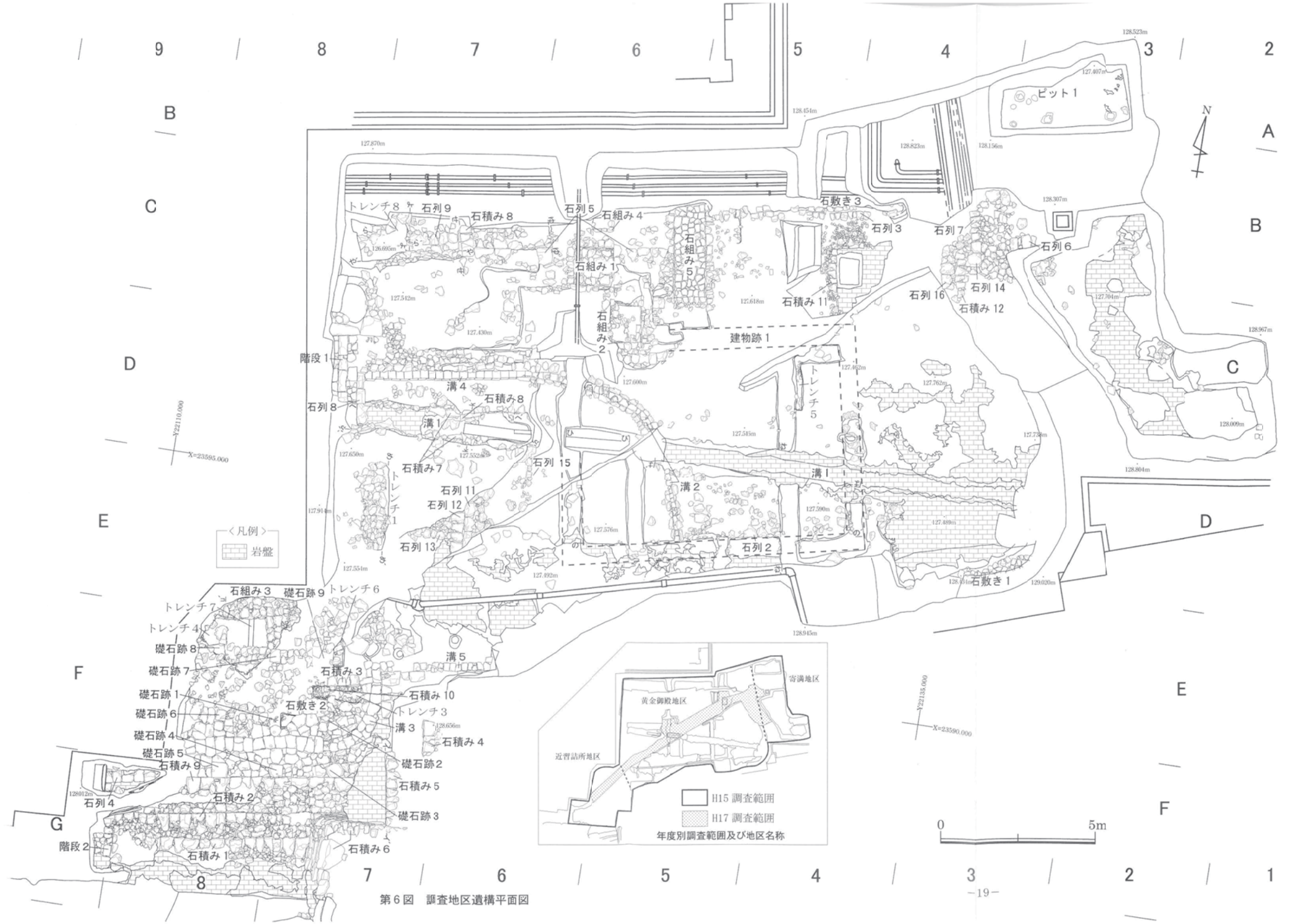
印刷業者が決まった後、校正を行い報告書を印刷･製本した。作成部数は 500 部である。なお遺物･図面･写真等はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターの収蔵庫・記録保存室に保管されている。

第１表　平成15･17年度　首里城跡黄金御殿地区発掘調査　工程表

作業項目			平成15年度																						平成17年度								
			６月			７月			８月			９月			１０月			１１月			１２月			１０月			１１月			１２月		
			上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
資料整理																																	
客土の除去（重機）																																	
調査区周辺の環境整備																																	
磁気探査																																	
グリッド設定																																	
客土・撹乱層の除去	寄満地区																																
	黄金御殿地区																																
	近習詰所地区																																
遺構の検出・清掃作業	寄満地区　ピット																																
	黄金御殿地区	石組み1																															
		石組み2																															
		石組み4																															
		石組み5																															
		石敷き3																															
		石積み7																															
		石積み8																															
		石積み11																															
		石積み12																															
		石列2																															
		石列3																															
		石列5																															
		石列6																															
		石列7																															
		石列8																															
		石列9																															
		石列11																															
		石列12																															
		石列13																															
		石列14																															
		石列15																															
		石列16																															
		階段1																															
		建物跡1																															
		トレンチ1																															
		トレンチ5																															
		トレンチ8																															
		溝1																															
		溝2																															
		溝4																															
		石敷き1																															
	近習詰所地区	石組み3																															
		石敷き2																															
		石積み1																															
		石積み2																															
		石積み3																															
		石積み4																															
		石積み5																															
		石積み6																															
		石積み9																															
		石積み10																															
		石列4																															
		階段2																															
		礎石跡1																															
		礎石跡2																															
		礎石跡3																															
		礎石跡4																															
		礎石跡5																															
		礎石跡6																															
		礎石跡7																															
		礎石跡8																															
		礎石跡9																															
		溝3																															
		溝5																															
		トレンチ2																															
		トレンチ3																															
		トレンチ4																															
		トレンチ6																															
		トレンチ7																															
測量																																	
撤収作業																																	
全体撮影																																	
聞き取り調査																																	
台風10号																																	

第２表　首里城跡黄金御殿地区　遺構等一覧

	名称	小地区	構造・用途など	時期	過去の調査歴
1	ピット群	寄満	地山の赤土面で検出。	－	
2	石組み1	黄金御殿	四方を石積みで囲い、底に石を敷く。	～18c頃	
3	石組み2		四方を石積みで囲む。	～18c頃	
4	石組み4		三方を石積みで囲む。北側は破壊されている。	－	正殿「ＳＷ8」
5	石組み5		三方を石積みで囲み、底に石を敷く。北側は破壊されている。	－	正殿「溝遺構」
6	石敷き3		石列3に接する。	－	
7	石積み7		下層遺構。石積み8と面を合わせて南北に走る。	15c頃～	
8	石積み8		下層遺構。石積み7と面を合わせて南北に走る。	15c頃～	
9	石積み11		Ｌ字形に走る。	－	
10	石積み12			－	
11	石列2		残りが悪いため不明確。	－	
12	石列3		北側に面を持つ。	－	正殿
13	石列5		北側に面を持つ。	－	
14	石列6			－	
15	石列7		直上に石列14がある。	－	
16	石列8		黄金御殿の西端を成す基礎石。	－	南殿・北殿「ＳＴＷ3」
17	石列9		下層遺構。南側に面を持つ。	15c頃～	
18	石列11		石積み8と一連の遺構である可能性がある。	－	
19	石列12		石積み7と一連の遺構である可能性がある。	－	
20	石列13		東端は石列12の裏込め石に接する。	－	
21	石列14		石列7の直上にある。	－	
22	石列15			－	
23	石列16			－	
24	階段1		左掖門から黄金御殿へと至るときに上る階段。	－	南殿・北殿「ＳＴＷ3」
25	建物跡1		コンクリート使用	近・現代	
26	トレンチ1		黄金御殿地区の下層を調べるために設定。	－	
27	トレンチ5		黄金御殿地区の下層を調べるために設定。	－	
28	トレンチ8		攪乱部分を利用し、黄金御殿地区の下層を調べるために設定。	－	
29	溝1		旧琉球大学時代の水道管埋設溝。	1950～1984年頃	
30	溝2		石灰岩を用いている。西側は溝4につながる。	－	



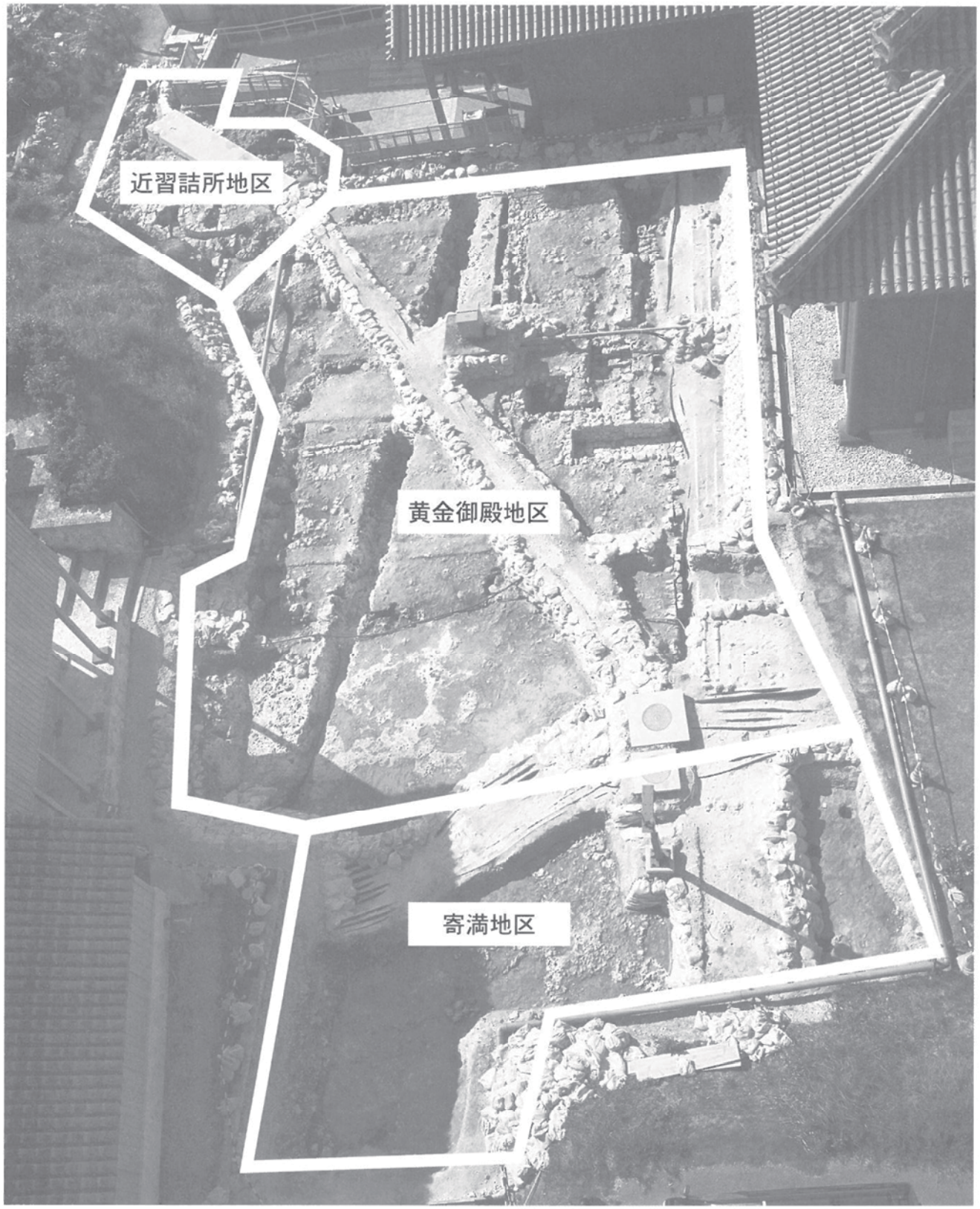
第6図　調査地区遺構平面図

第３表　首里城跡黄金御殿地区　遺構等一覧

	名称	小地区	構造・用途など	時期	過去の調査歴
31	溝4	黄金御殿	塼を用いている。東側は溝2につながる。	－	南殿・北殿「ＳＷＰ６」
32	石敷き1			－	二階殿「西ＳＢ1」
33	石組み3	近習詰所	四方を石積みで囲む。	18c頃～か	
34	石敷き2		広範囲に敷かれる。溝3の蓋石を兼ねる。	18c後半頃か	
35	石積み1		積み直し後の石積み６に取り付く。	－	
36	石積み2		石積み6に連続する。	－	
37	石積み3		東端は溝3の側石を兼ねる。	－	
38	石積み4			－	二階殿
39	石積み5		石積み6に接する。	－	二階殿
40	石積み6		Ｌ字形に走る。積み直しが確認できる。	－	二階殿
41	石積み9		礎石跡3～5に接する。	－	
42	石積み10		下層遺構。石敷き2に埋め殺されている。	18c後半頃～	
43	石列4			～19c頃	
44	階段2			－	南殿・北殿「ＳＴW4」
45	礎石跡1			18c後半頃か	
46	礎石跡2			18c後半頃か	
47	礎石跡3		石敷き2の石灰岩が浅くくぼむ。	18c後半頃か	
48	礎石跡4		砂岩製の礎石が残る。	18c後半頃か	
49	礎石跡5		砂岩製の礎石が残る。	18c後半頃か	
50	礎石跡6		石灰岩製の礎石が残る。	18c後半頃か	
51	礎石跡7		石灰岩製の礎石が残る。	18c後半頃か	
52	礎石跡8		砂岩製の礎石が残る。他の礎石跡に比べ、位置が低い。	～18c後半頃か	
53	礎石跡9			18c後半頃か	
54	溝3		石灰岩を用いている。北側で溝5につながる。	～1945年頃	
55	溝5		石灰岩を用いている。西側で溝5につながる。	－	二階殿「ＳＤ１」
56	トレンチ2		石積み9を検出する際に設定。	－	
57	トレンチ3		石積み3の下部構造を調べるために設定。	－	
58	トレンチ4		近習詰所地区の下層を調べるために設定。	－	
59	トレンチ6		礎石跡の有無を調べるために設定。	－	
60	トレンチ7		石組み3の下層を調べるために設定。	－	

第４章　遺構と遺物

今回の発掘調査では調査面積が広範囲に及び、検出された遺構も多岐にわたっている。そこでかつて存在した首里城の建造物の位置をもとに、調査区を東側から寄満地区・黄金御殿地区・近習詰所地区と３つの小地区に分け、第１～３節で各小地区の遺構を報告する。



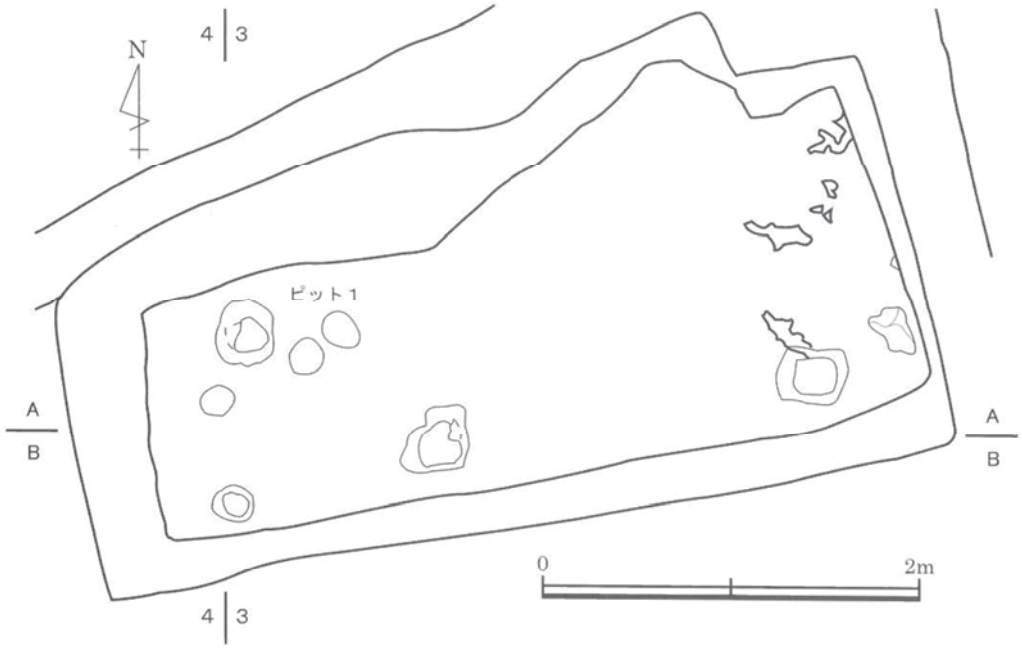
図版 13　調査区全景（東から）

第１節　寄満地区の遺構と遺物

調査区東側、Ａ～Ｄ－２～４グリッドにあたる。Ｃ－２グリッドでは、琉球石灰岩の岩盤が検出され、その表面は火を受けて橙色に変色している。岩盤は北西側に向かって下がっており、Ｂ・Ｃ－３グリッドでは、石灰岩小礫を多く含む暗褐色土が堆積していた。

Ａ－３グリッドでは、地山の赤褐色土部分まで撹乱が及んでいた。赤褐色土の表面で、７基のピットを検出した。平面形態や規模は様々で、規則的な配列も見られない。

今回の調査では、寄満に関する遺構は検出されなかった。



第７図　寄満地区北側平面図（縮尺 1/40）

図版 14　寄満地区北側

第8図　寄満地区平面図（縮尺 1/40）

図版 15　寄満地区（西から）

図版 16　寄満地区（北西から）

第２節　黄金御殿地区の遺構と遺物

調査区中央、Ｂ～Ｅ－４～７グリッドにあたる。約１ｍの厚さで堆積していた客土を重機で取り除くと、北側では礫交じりの黄褐色土が、西側では砂が現れた。これらは正殿や南殿を調査した際の埋め戻土や保護砂である。これらについては、今回検出する遺構とのつながりを確認するために除去した。

他の部分については撹乱層と考えられる暗褐色土が堆積しており、この暗褐色土を掘り下げていくと、次々と遺構が現れた。

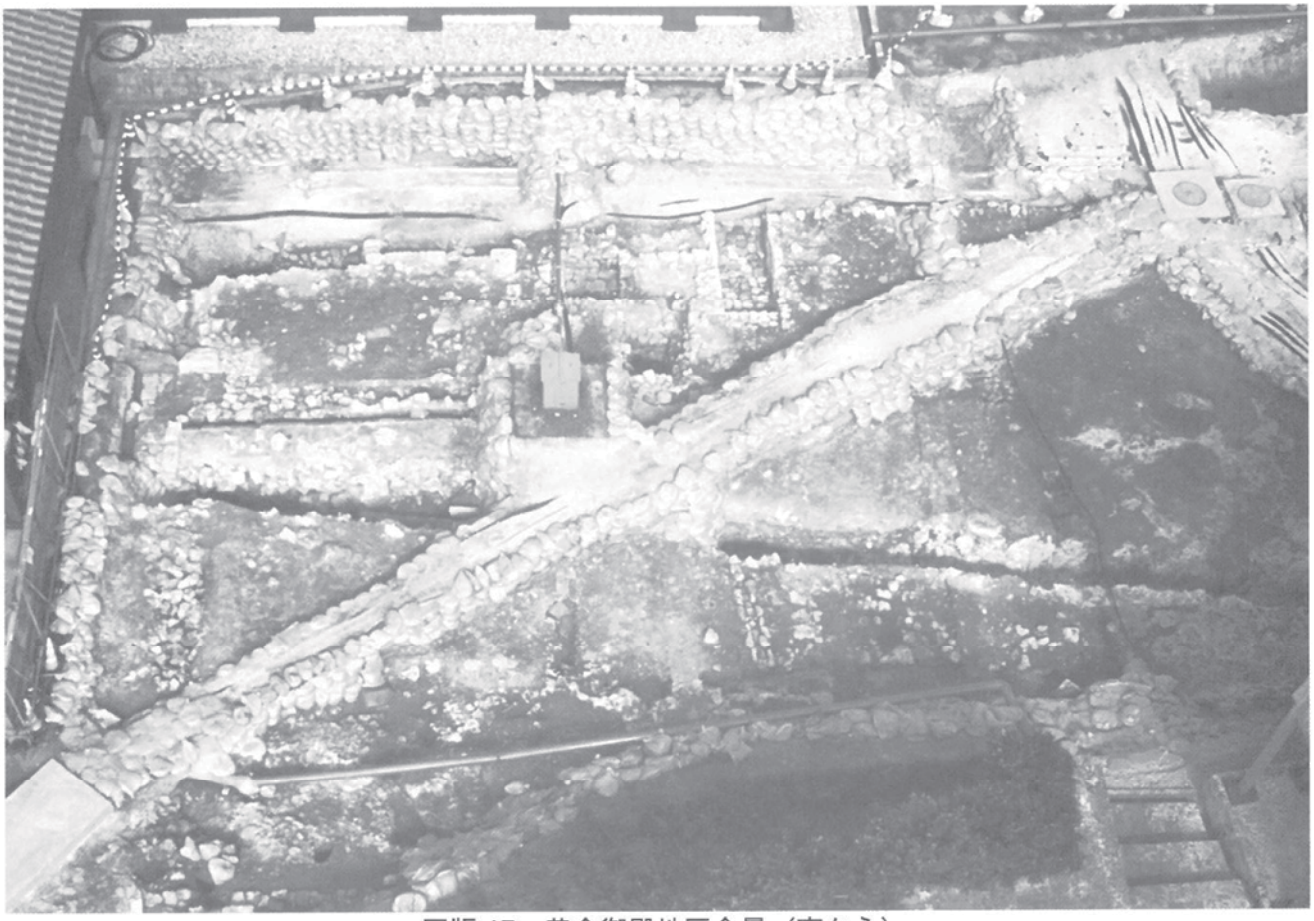
遺構については、機能や時期などから以下のように大別できる。

①黄金御殿地区の地盤かさ上げに関する遺構（下層遺構）
　石積み７・８など

②黄金御殿を直接構成する建物基礎、排水遺構
　石列８、階段１、溝２・４、石組み１・２など

③黄金御殿が取り壊された後の遺構
　建物跡１、溝１

寄満地区と同様に石灰岩の岩盤は北西に向かって低くなっており、この高低差をなくすために地盤のかさ上げ工事が行われたようである。出土遺物によると、かさ上げ工事は15世紀頃以降におこなわれたと考えられる。



図版 17　黄金御殿地区全景（南から）

図版 18　黄金御殿地区全景（東から）

1　石組み１（C－６グリッド　第９～ 13図　図版19～23・116～118）

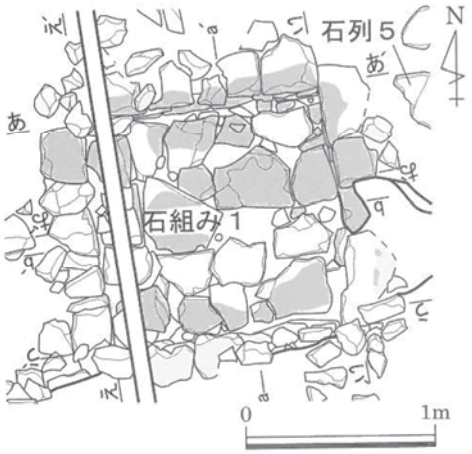
四方を石積みで囲い、底部に石を敷いた遺構である。平面形態は正方形で、１辺の長さは内側1.2 mである。石積み上部は破壊されており、最高で高さ0.7 mが残っている。

石積みは東壁は布積みで、そのほかは相方積みであるが、相方積み部分の石同士の隙間が目立つ。西壁については、手前にも石積みがあり、二重構造となっている。底部は凹凸が目立ち、石同士の隙間も大きい。

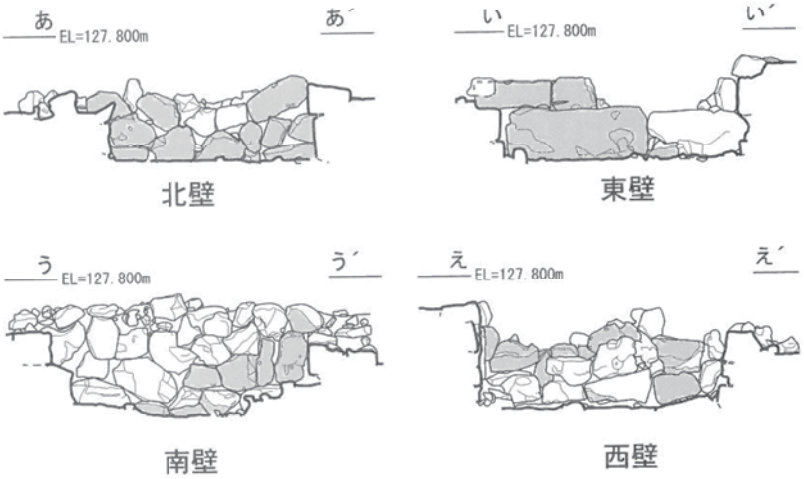
全体的に石の表面には黒色の付着物のようなものが見られる。また石組み内には大小の石灰岩が多く見られた。

このような構造を持った石組みは、首里城の正殿地区においても検出されており、用途は不明であるが、「浸透枡ではないか」という意見が聞き取り調査によって得られた。

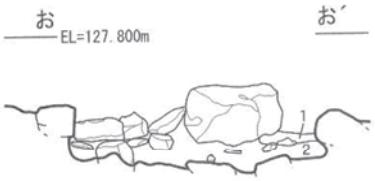
…黒色付着物　　…橙色



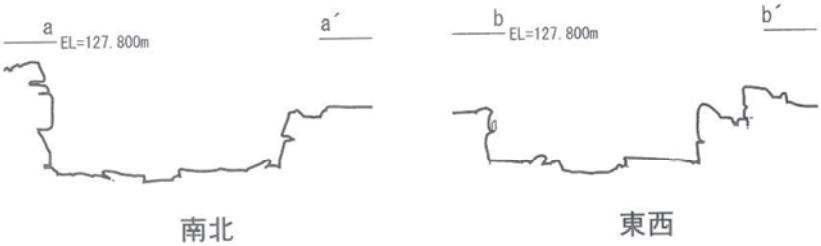
第９図　石組み１平面図（縮尺 1/40）



第 10 図　石組み１　立面図（縮尺 1/40）



第 11 図　石組み１内土層図（縮尺 1/40）



第 12 図　石組み１　断面図（縮尺 1/40）

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
11	1	褐灰色	10YR4/1	4	粘質で炭を多く含む。	
	2	褐色	7.5YR4/3	8-24	粘質で炭を少し、焼土を多く含む。	

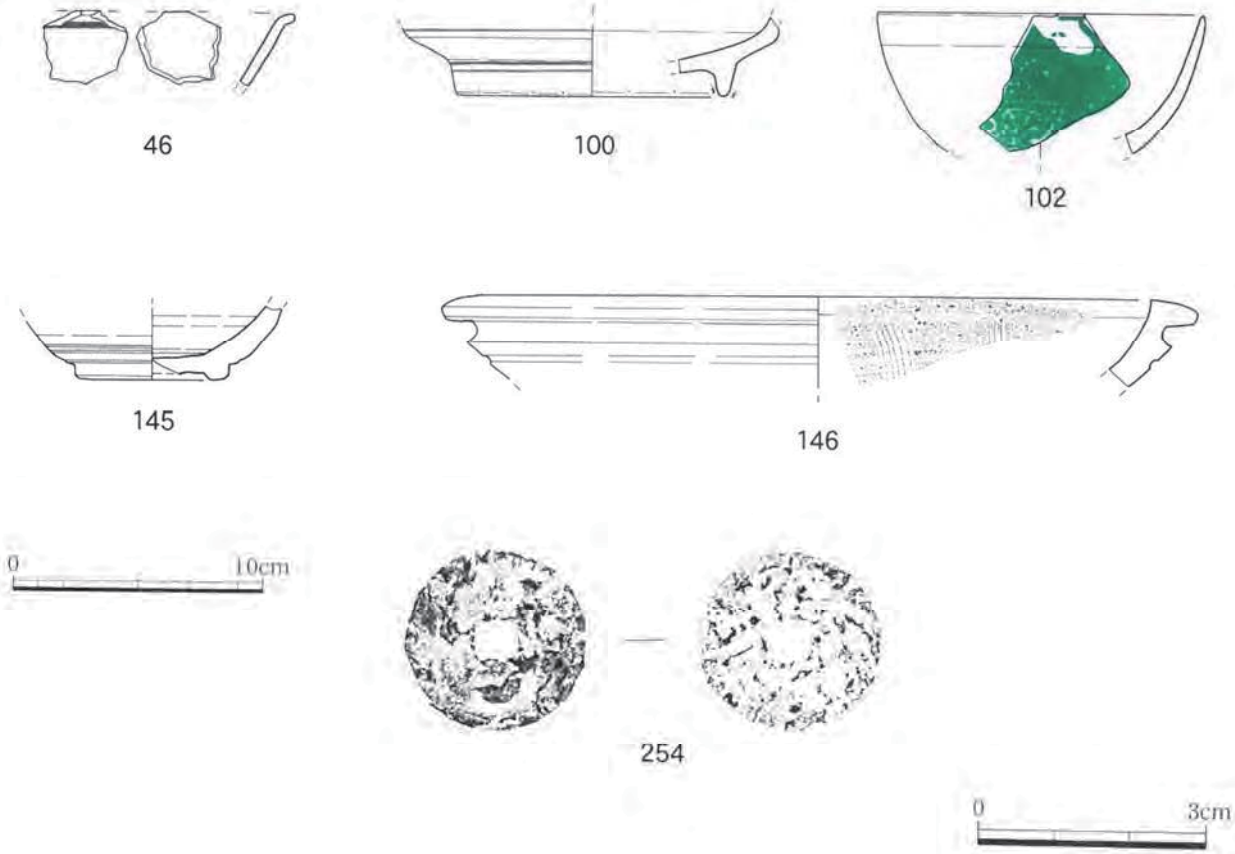
図版 19　石組み 1 検出途中状況（北東から）

図版 20　石組み 1 検出途中状況（北から）

図版 21　石組み 1（北東から）

図版 22　石組み 1（南東から）

図版 23　石組み 1（南から）



第 13 図　石組み 1　出土遺物

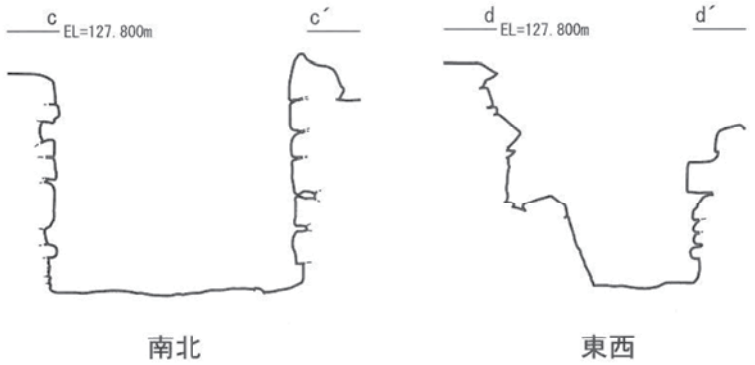
2　石組み２（C－６グリッド　第14～18図　図版24～26・119～123）

四方を石積みで囲った遺構である。石組み１と違い底面に石は敷かれていない。平面形態は正方形と考えられ、一辺の長さは内側で1.1 mである。石積みは最高で高さ1.2 mが残っている。

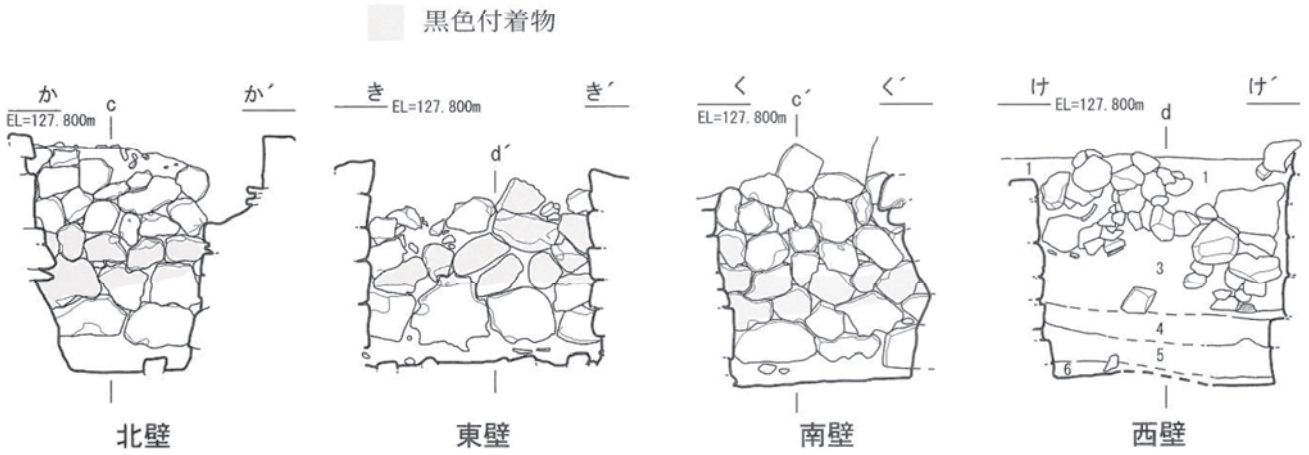
石積みは相方積みで、石同士の隙間が大きい。石積みの四隅については、隣り合う石積みと交互に石をかみ合わせ積んでいる。

石組み内の上部には石灰岩が多く堆積していた。また各石積みの標高127 m付近には、帯状に黒色付着物が見られた。

第14図　石組み２　平面図



第15図　石組み２　断面図



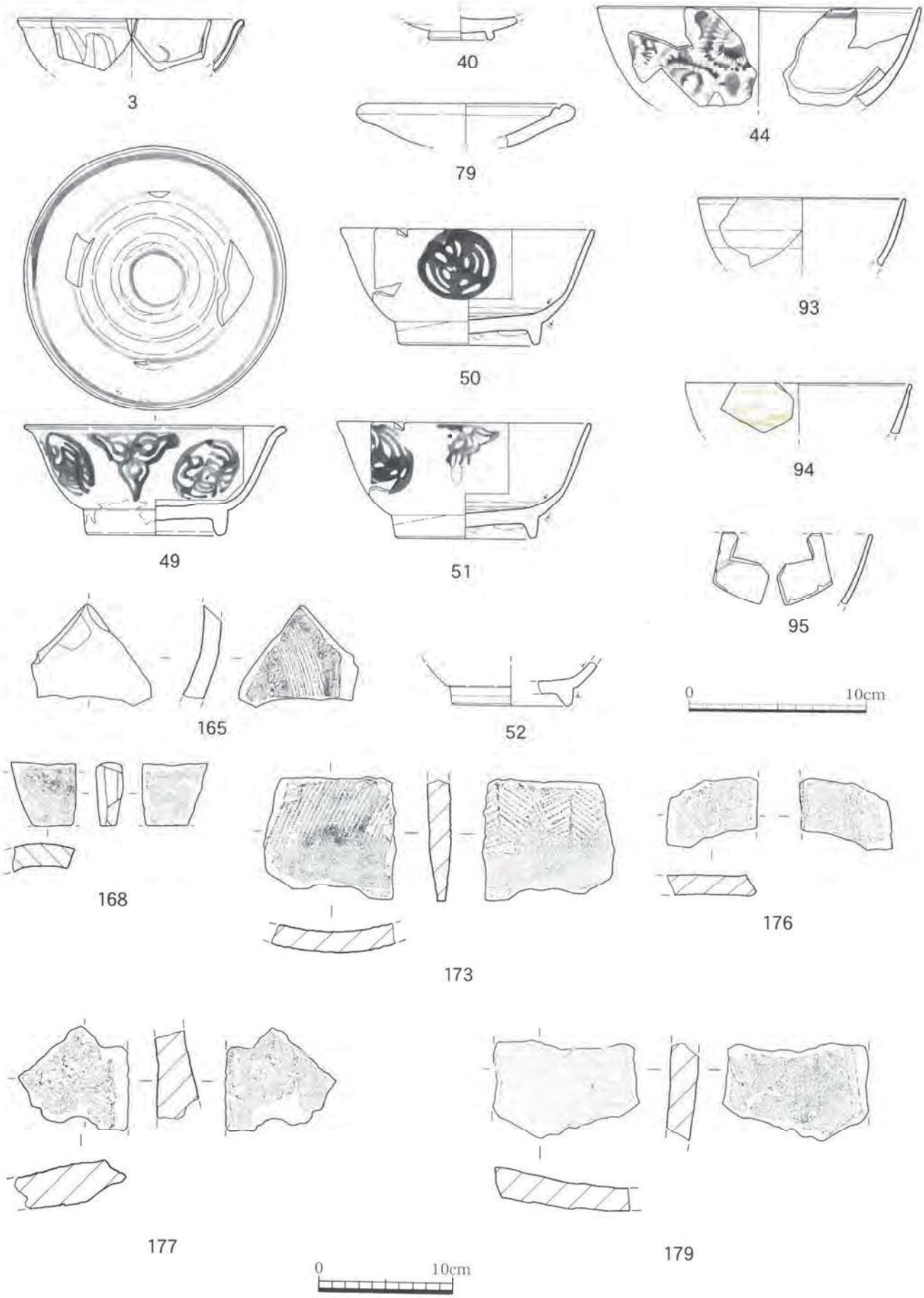
第16図　石組み２　立面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
16	1	黒褐色	10YR3/2	16-28	粘質で被熱した石、木炭、石灰岩小礫を含む。上面に赤褐色粘土（焼土？）を含む。	
	2	－	－	－	－	礫層。
	3	暗褐色	－	45	粘質土。	
	4	黄褐色	2.5Y5/4	10-16	粘質で灰色瓦、染付を含む。	
	5	暗褐色	10YR3/3	12-18	粘質土。	
	6	黒褐色	10YR3/2	4-8	粘質で４前後の石灰岩礫を多く含む。	

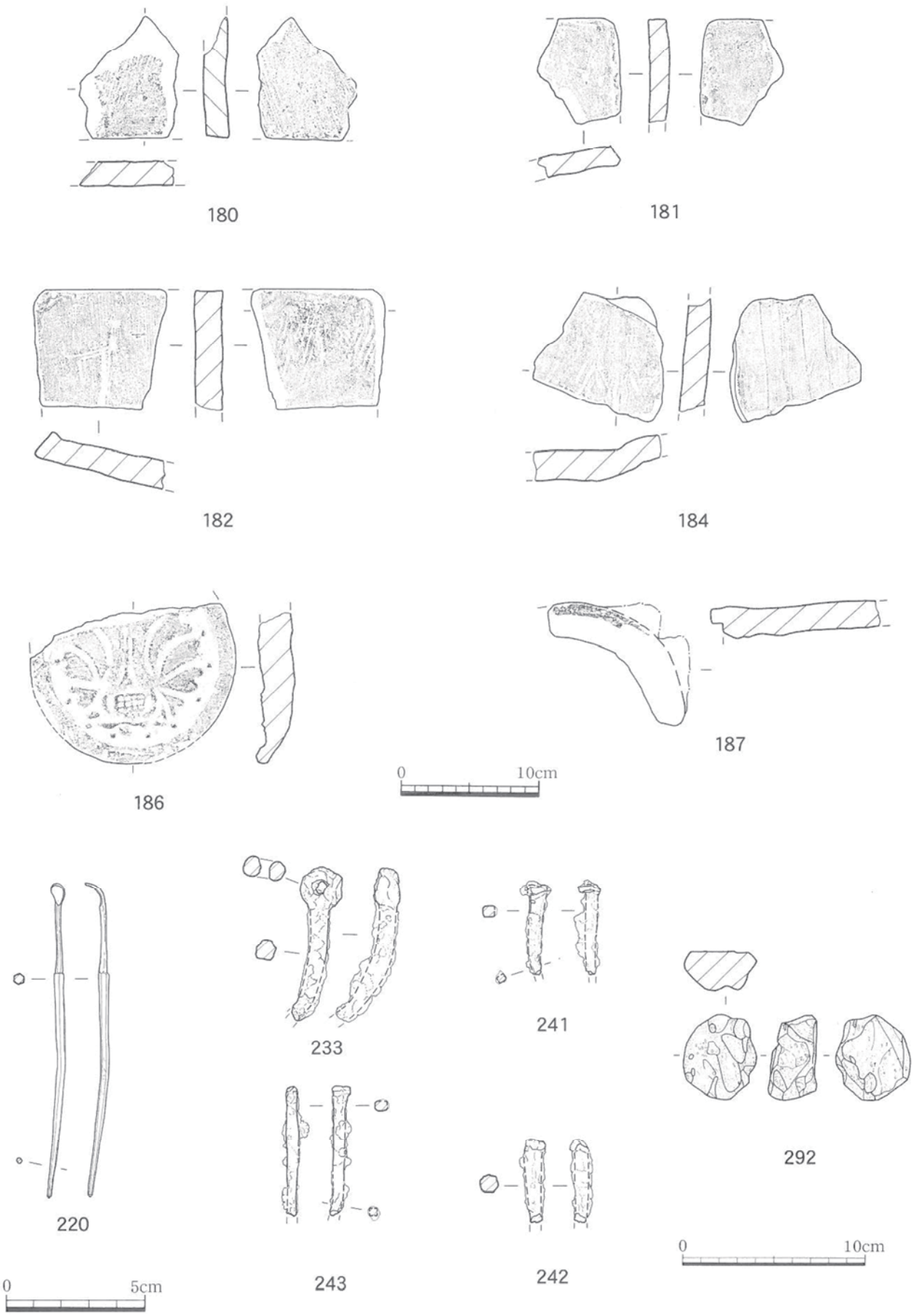
図版 24　石組み 2（東から）

図版 25　石組み 2（西から）

図版 26　石組み 2 南壁（北から）



第 17 図　石組み 2 出土遺物（1）

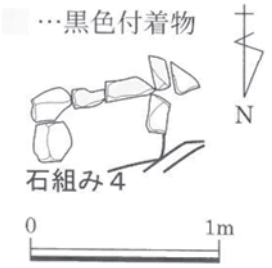


第 18 図　石組み 2 出土遺物（2）

3　石組み４（C－６グリッド　第19図　図版27）

三方を石列で囲った遺構である。北側は後世の撹乱によって破壊されている。他の石組みに比べ規模が小さく、底面に石は敷かれていない。

図版27　石組み４（北東から）



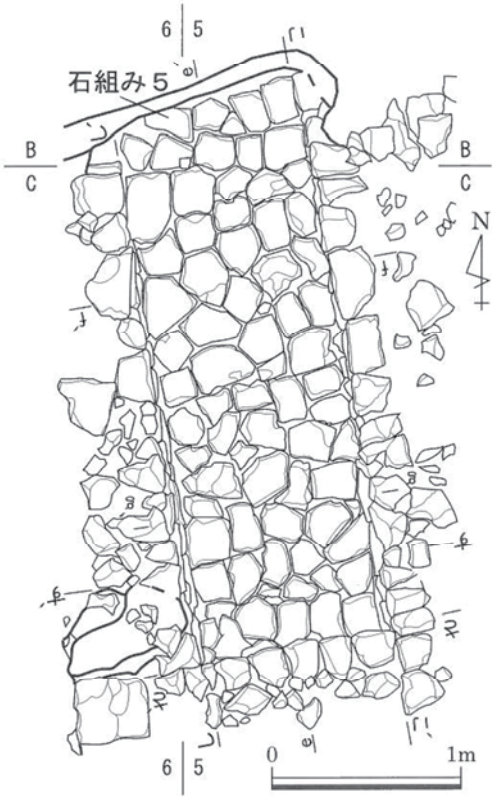
第19図　石組み４平面図

4　石組み５（C－５グリッド　第20～24図　図版28～30・124～126）

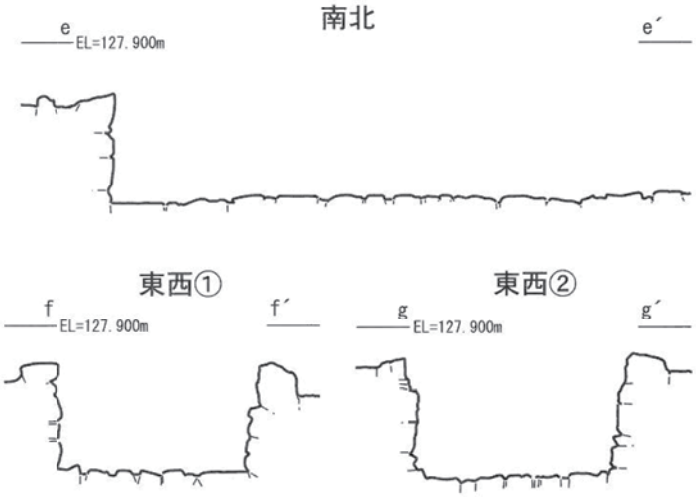
三方を石積みで囲った遺構である。北側は後世の撹乱によって破壊されているため、石積みがあったかは不明である。また底面には石が敷かれている。内側の長さは南北で３m以上、東西で１m、残存高は1.1 mである。

石積みは相方積みで、石組み１・２に比べ石同士の隙間が小さく緻密な印象を受ける。

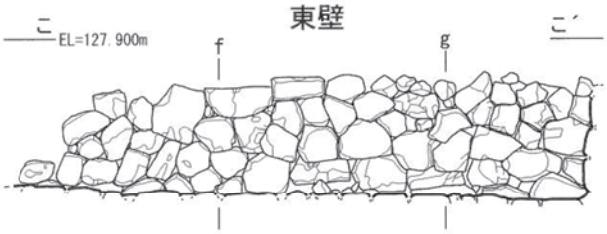
石組み５の西壁に注目すると、南端から北に1.3mの所に、縦目地が通っていることが確認できる。この縦目地の両側で積まれている石を比較すると、北側の石の方がやや大きく、布積み風である。同様に石組５の底面にも西壁と同じように目地が通っており、東壁にもそれらしきものがある。これらのことから、石組み５はある時期に改変された可能性がある。

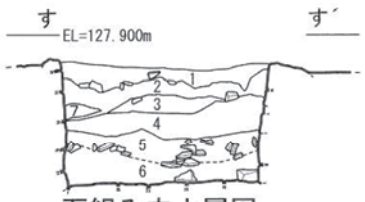


第 20 図　石組み５　平面図

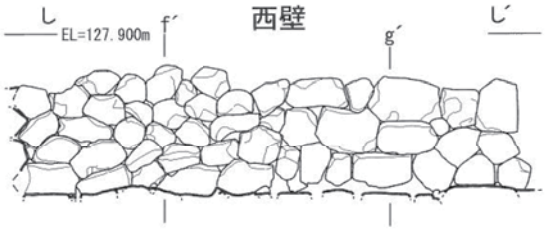


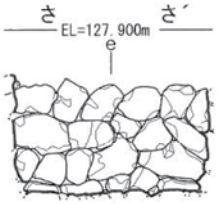
第 21 図　石組み５　断面図





石組み内土層図





南壁

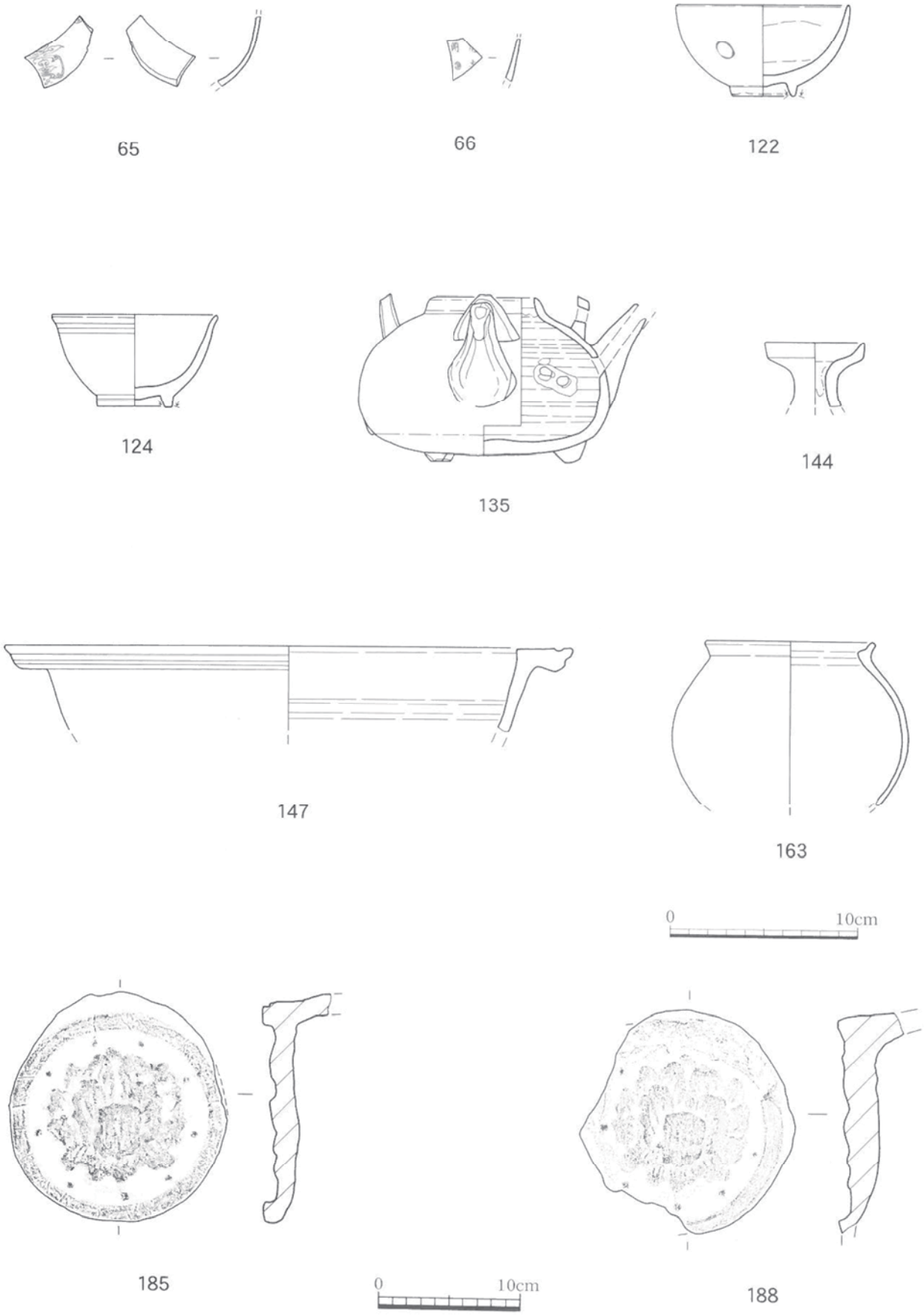
第 22 図　石組み５　立面図・土層図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
22	1	褐色	10YR4/4	6-14	砂質で締まりが弱い。瓦や褐釉陶器を僅かに含むがｶﾞﾗｽも含む。小礫を多く含む。	
	2	黒褐色	10YR3/1	4-14	泥質で瓦、磚、炭が僅かに含まれる。	
	3	鈍い黄褐色	10YR4/3	3-9	砂質で僅かに炭、ｻﾝｺﾞ石を含む。ｶﾞﾗｽも含まれる。	
	4	灰白色	2.5Y8/2	5-18	石灰質でｻﾝｺﾞを多く含む。	
	5	黒褐色	10YR2/2	8-15	泥質で炭、瓦、小さなｻﾝｺﾞ石を多く含む。僅かにｶﾞﾗｽも含む。	
	6	黒褐色	10YR2/2	8-20	炭を多く含む。ｶﾞﾗｽ、ｻﾝｺﾞ石は少量。	
	7	鈍い黄橙色	10YR7/3	2-8	石灰質で締まりが弱い。	

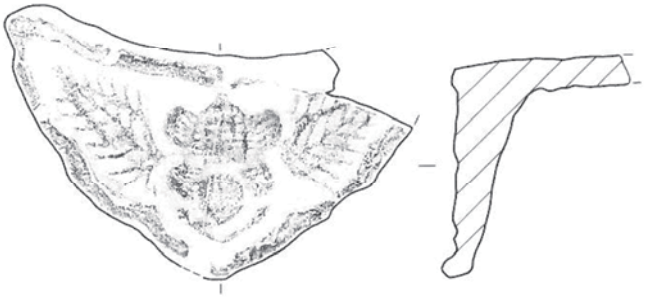
図版 28　石組み 5（東から）

図版 29　石組み 5（北西から）

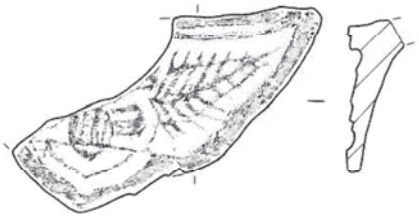
図版 30　石組み 5（北から）



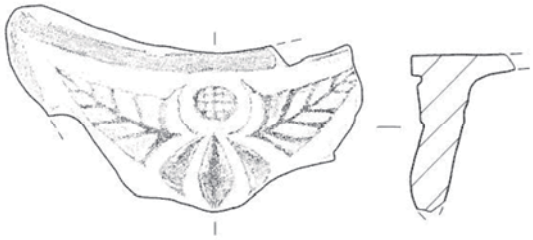
第 23 図　石組み 5 出土遺物（1）



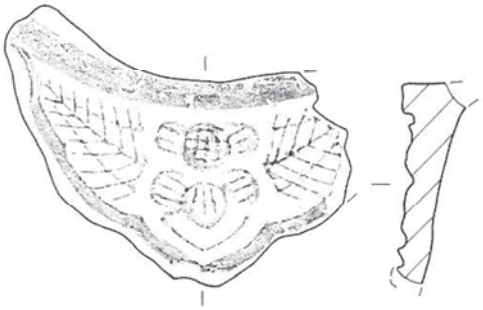
190



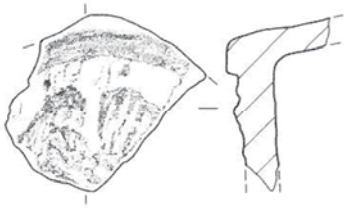
194



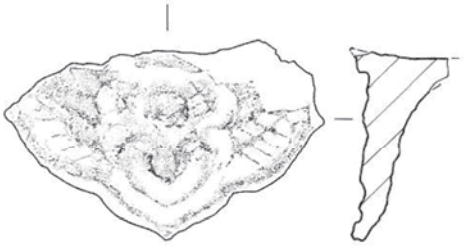
193



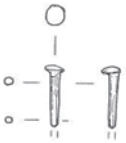
192



189

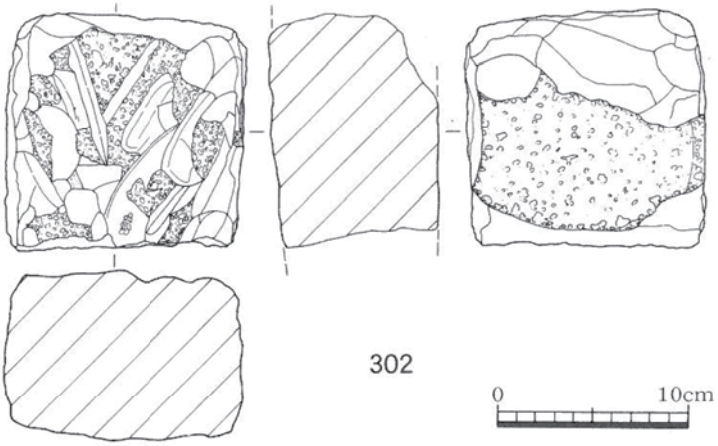


196



232

0 5cm



302

0 10cm

第 24 図　石組み 5 出土遺物（2）

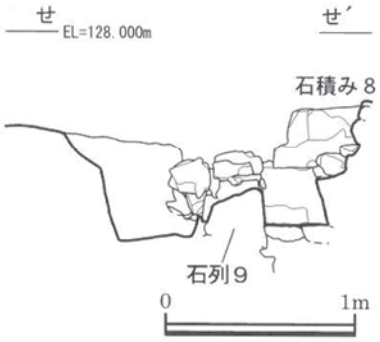
5　**石積み７**（D－７グリッド　第48図　図版32・33・127～129）

東側に面を持ち、南北に走る石積みである。長さ60cm前後の切石を布積みしており、石積み８と面を合わせている。根石は石灰岩の岩盤もしくは赤土の地山の上に積まれている。各石の上面が水平に整形されていることから布積みと考えられる。石列12と同一の遺構である可能性があるが、方向が若干ずれる。

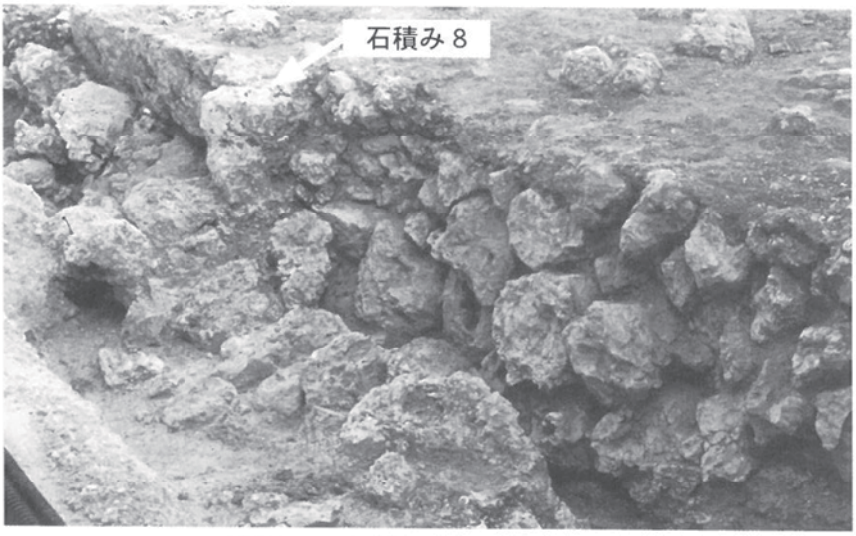
6　**石積み８**（C・D－７グリッド　第25・48図　図版31～32・127～129）

西側に面を持ち、南北方向に走る石積みである。北端は後世の造成工事で破壊されている。南側は溝４の下部を横切り、さらに南へと伸びている。石積みの構造は石積み７と同じである。石列11と同一の遺構である可能性があるが、方向が若干ずれる。

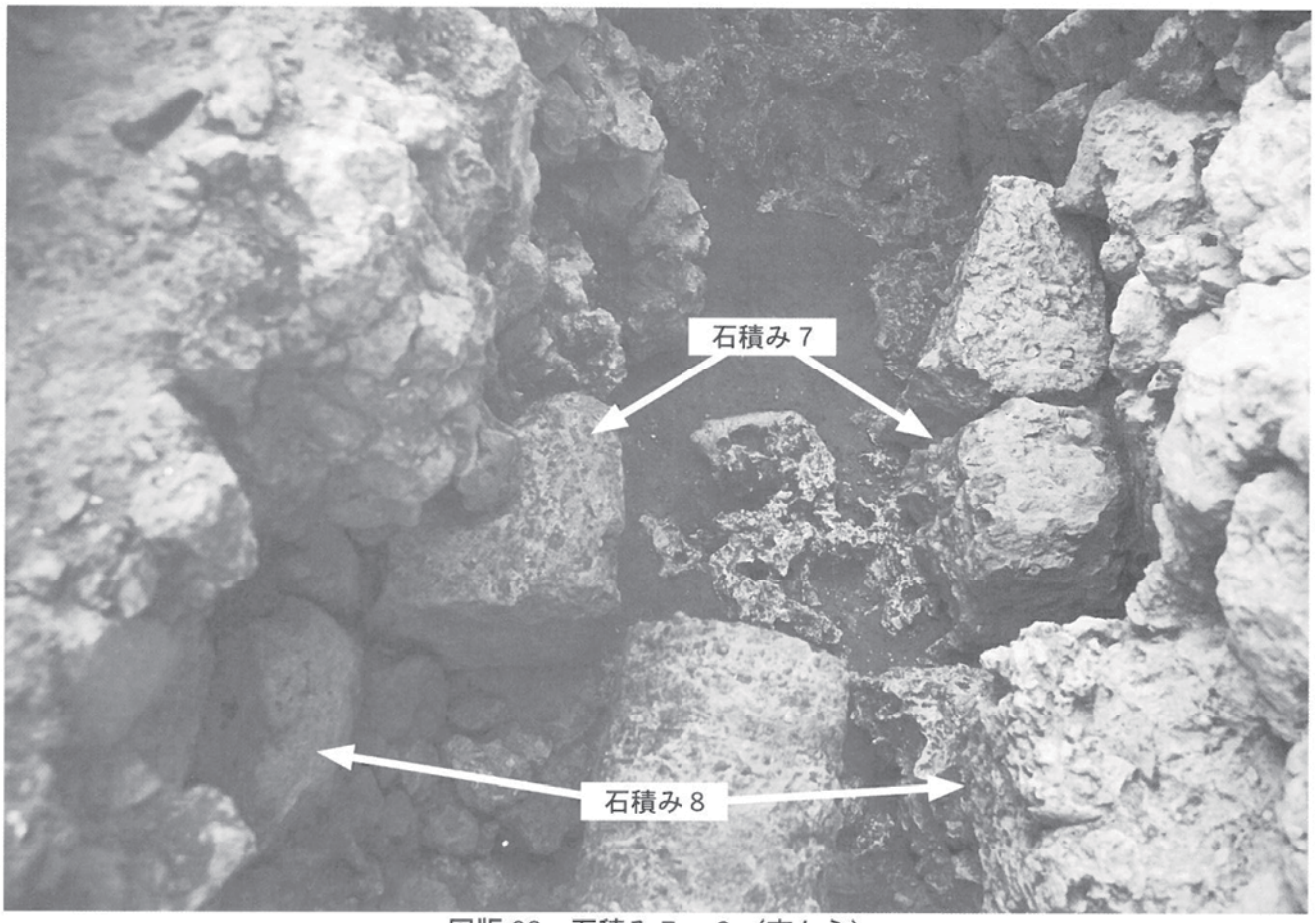
石積み７・８の裏側には、厚さ1m以上の石灰岩礫層が堆積していることが溝１等の壁面で確認できる。この礫層は、地盤をかさ上げするために行われた造成工事の層であり、石積み７・８は礫層を留めるために積まれたと考えられる。しかしこのような石積みが互いに面を合わせていることについては、工法の一つであるのか、時期差であるのか、さらに別の理由であるのかは不明である。



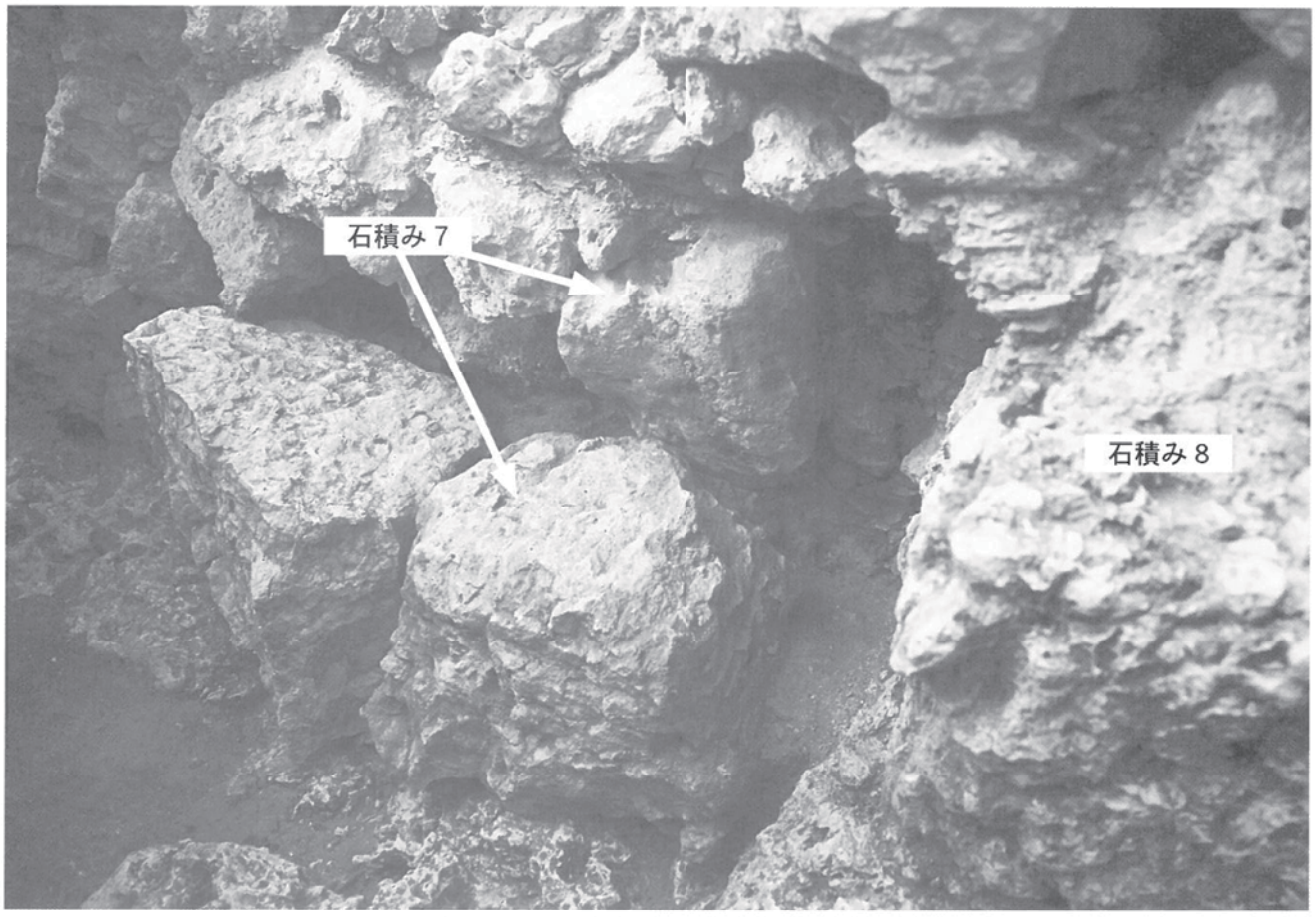
第25図　石積み８　東壁立面図



図版31　石積み８　（北西から）



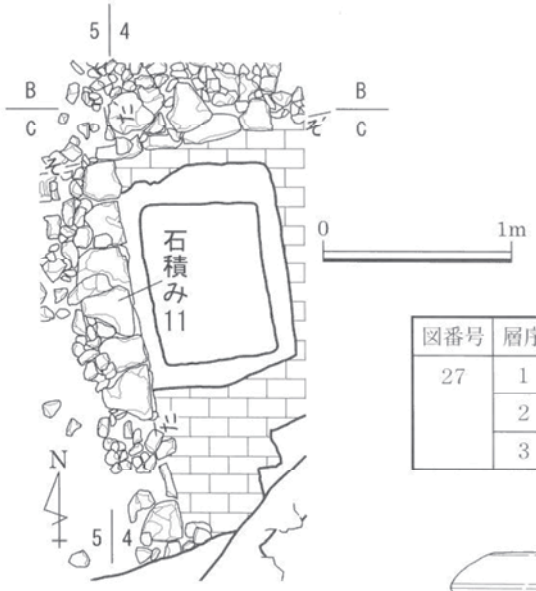
図版 32　石積み７・８（東から）



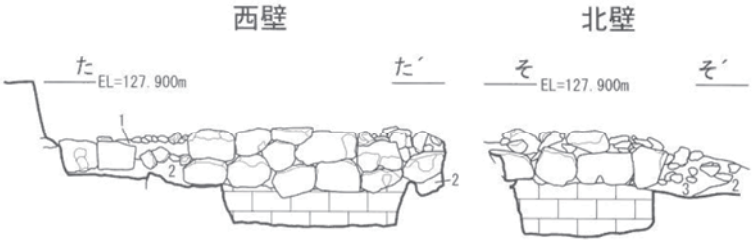
図版 33　石積み７・８（南西から）

7　石積み１１（C－４グリッド　第26～28図　図版34・130）

南・東側に面を持つＬ字形の石積みである。相方積みで２段分が残っている。

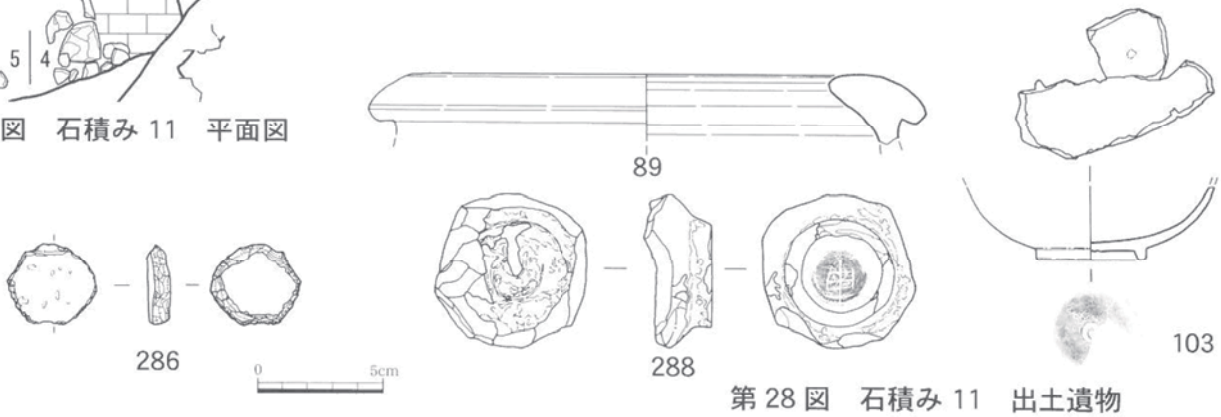


第26図　石積み11　平面図



第27図　石積み11　立面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物
27	1	黒褐色？	－	2-9	－
	2	褐色	－	2-13	粘質土。
	3	暗褐色	－	12-22	粘質で赤土・炭を含む。

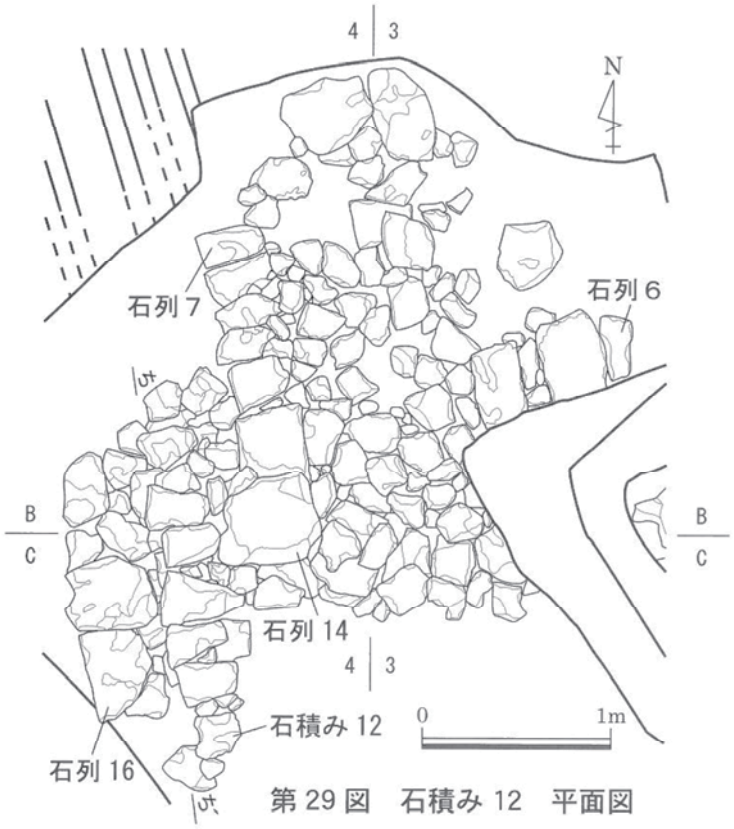


第28図　石積み11　出土遺物

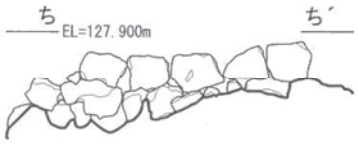
図版34　石積み11（東から）

8　石積み１２（B・C－４グリッド　第29・30図　図版35）

西側に面を持ち、南北に走る石積みである。岩盤の上に積まれており、２～３段分が残っている。



第29図　石積み 12　平面図



第30図　石積み 12　東壁立面図

図版35　石積み 12（北西から）

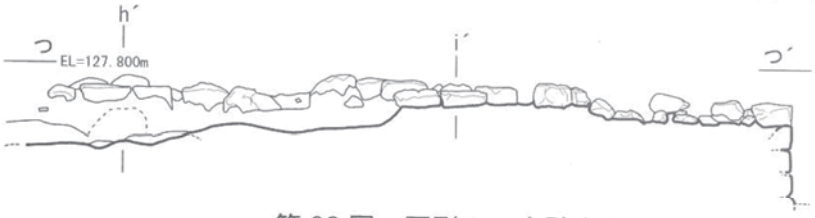
9　石列２（D－５グリッド　第46図）

南側に面を持ち、東西に走る石積みである。切石２点のみの検出のため、不明な点が多い。

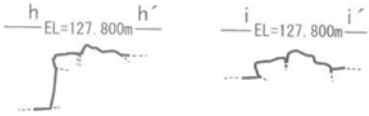
10　石列３（B－４・５グリッド　第31～34図　図版36・132）

北側に面を持ち、東西に走る石積みである。西端は石組み５に取り付き、石は最下段しか残っていない。

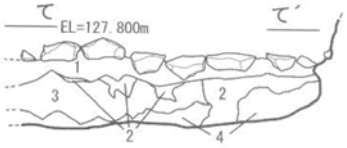
第31図　石列３　平面図



第32図　石列３　南壁立面図



第33図　石列３　断面図



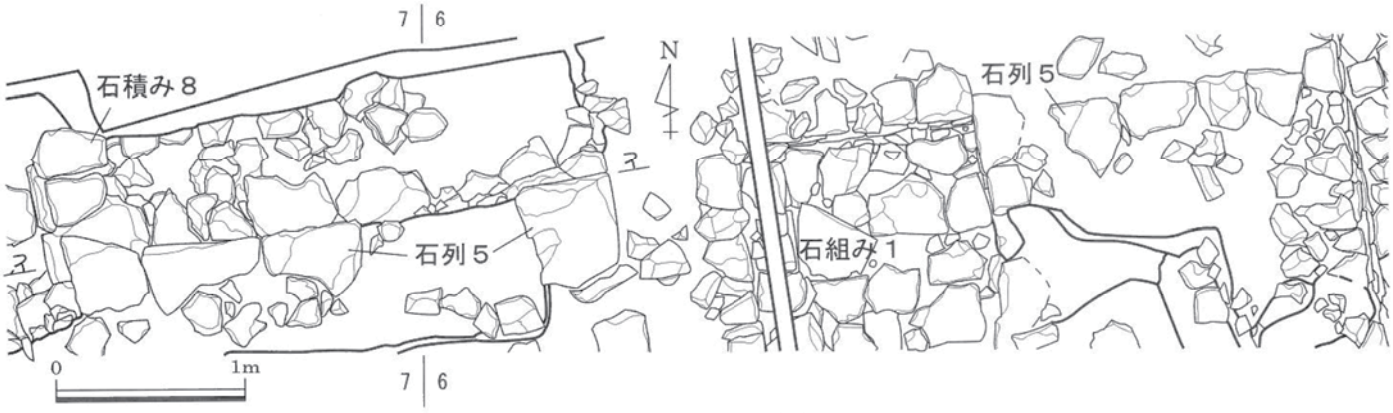
図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
34	1	鈍い黄褐色	10YR4/3	5-16	砂質で遺物なし。炭を少し、小礫を多く含む。	
	2	暗褐色	10YR3/4	4-24	泥質で遺物などは含まない。	
	3	褐色	7.5YR4/6	10-22	泥質で混入物はなし。所々２層の暗褐色が混ざる。	
	4	－	－	2-18	－	最下部。岩盤の一部。

第34図　石列３　南壁下部土層図（南側）

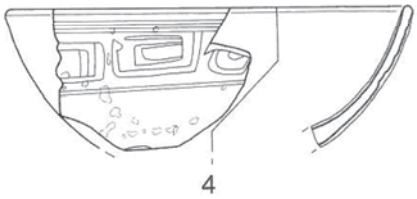
図版36　石列３　石敷き３（北西から）

11　石列５（Ｂ－４・５グリッド　第35～37図　図版37～39・133）

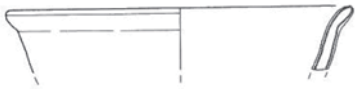
北側に面を持ち、石組み１をはさんで東西に走る石積みである。東端は石組み５に取り付き、西端は石積み８に取り付く。石組みの東側と西側とでは、使われている石の大きさに差異があることから、個別の遺構として取り扱う必要があるが、ここではまとめて報告した。



第35図　石列５　平面図

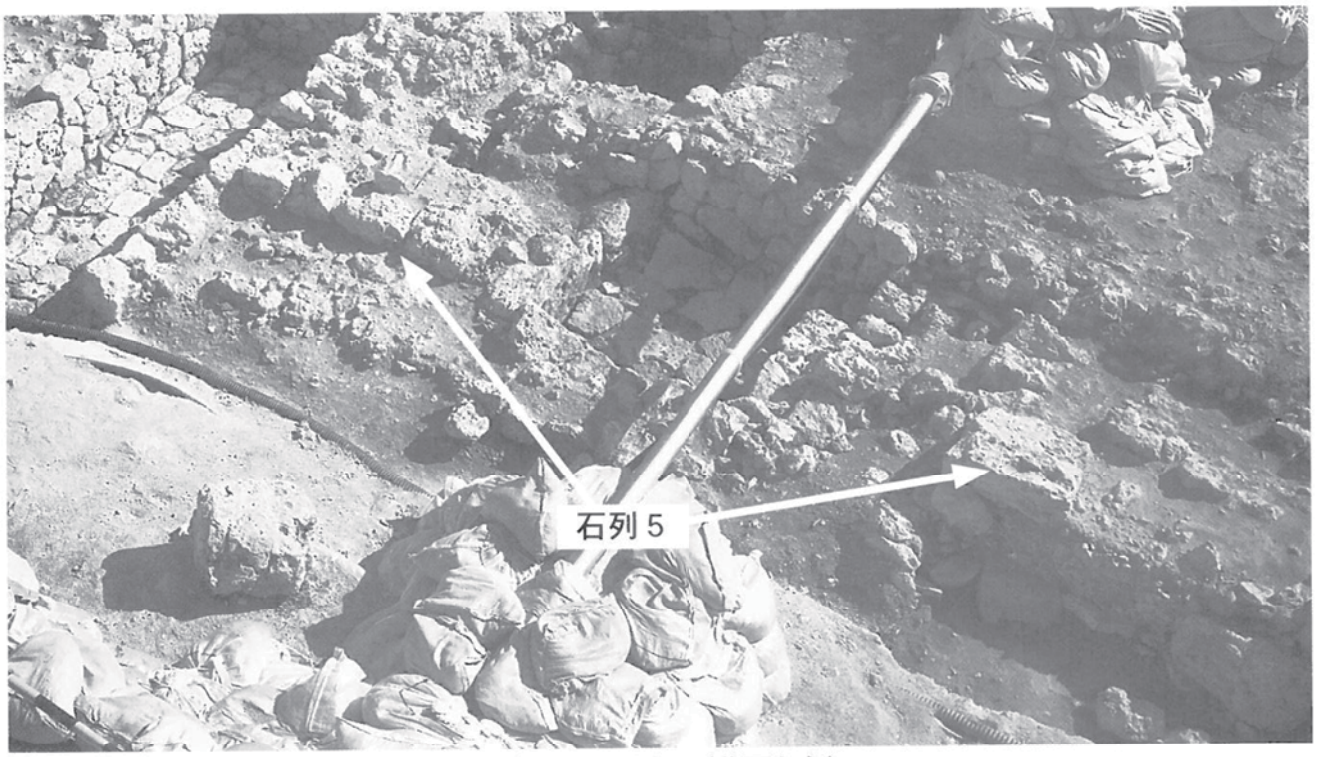


第36図　石列５　南壁立面図



第37図　石列５　出土遺物

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物
36	1	暗褐色	7.5YR3/3	6-11	粘質で炭、赤瓦、被熱した石灰岩礫、焼土を含む。
	2	鈍い黄褐色	10YR5/4	8-40	砂質で5mm前後の石灰岩礫、褐釉陶器、二枚貝、ヤコウ貝を含む。1mm以下の砂粒を多く含む。



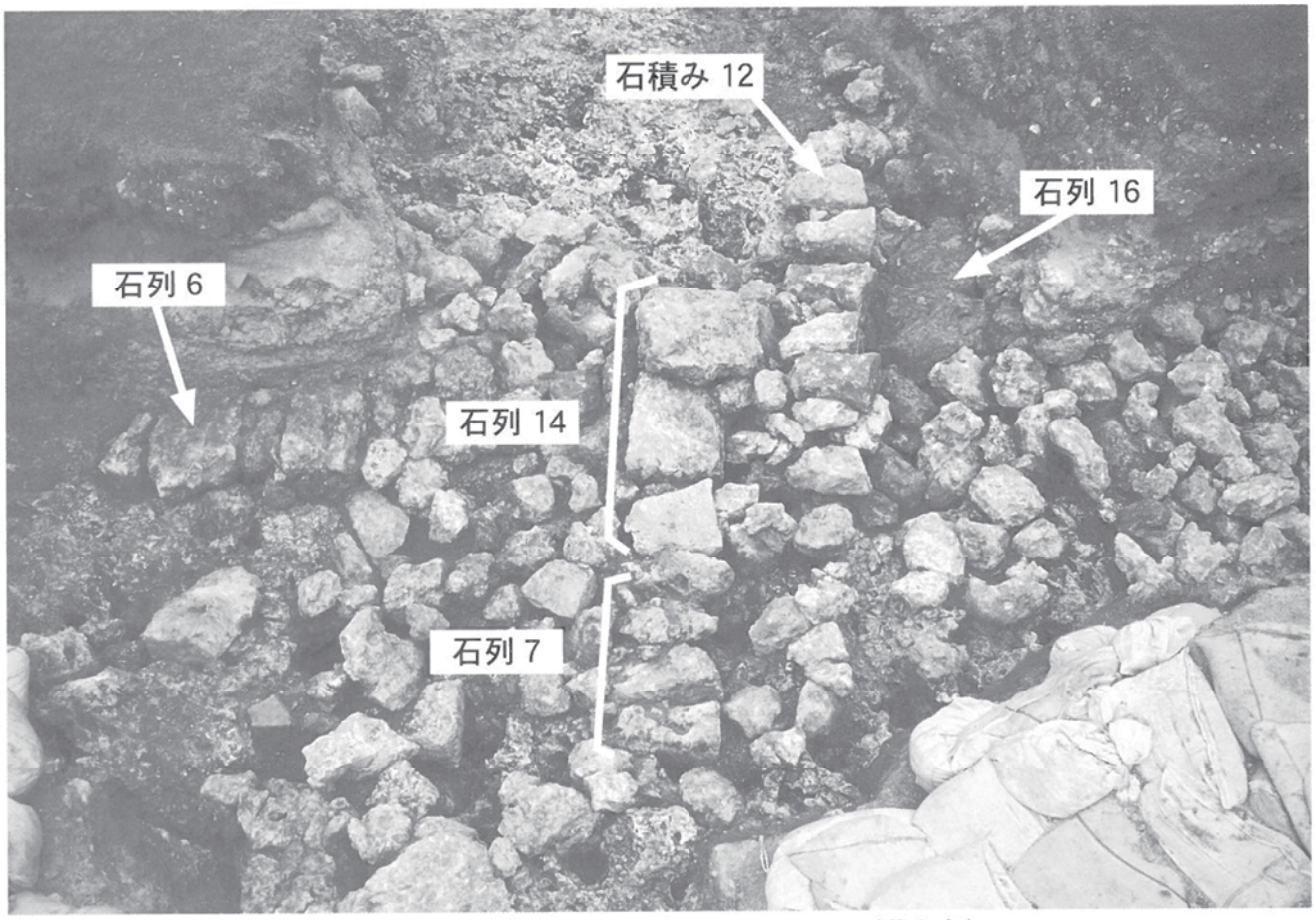
図版37　石列５（北西から）

図版 38　石列 5（北東から）

図版 39　石列 5（北から）

12　**石列6**（B－3グリッド　第29図　図版40・131）
東西に走る石列で、面ははっきりしない。

13　**石列7**（B－3グリッド　第29図　図版40・131）
南北に走る石列で、直上に石列14がある。

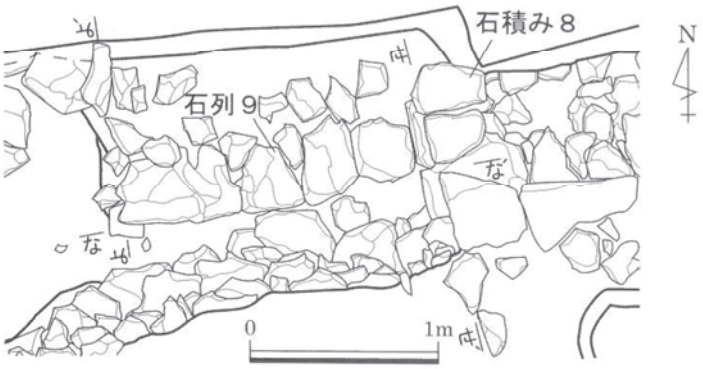


図版40　石積み12、石列6・7・14・16（北から）

14　**石列8**（D－7グリッド　第42・43図　図版43・44・134・135）
西側に面を持ち、南北に走る石積みである。黄金御殿建物の西端に相当すると考えられ、溝4の上を横切り、階段1に接して造られている。石は丁寧に加工され、熱を受けたためか橙色に変色している部分がある。

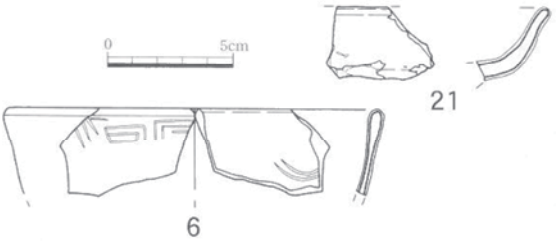
15　石列９（Ｃ４－グリッド　第38～40図　図版67）

南側に面を持ち、東西に走る石積みである。東側は石積み８にぶつかり、西側は破壊されている。最下段部分だけが残っている。



第38図　石列９　平面図

第39図　石列９　北壁立面図



第40図　石列９　出土遺物

16　石列11（Ｅ－７グリッド　第６図　図版41）

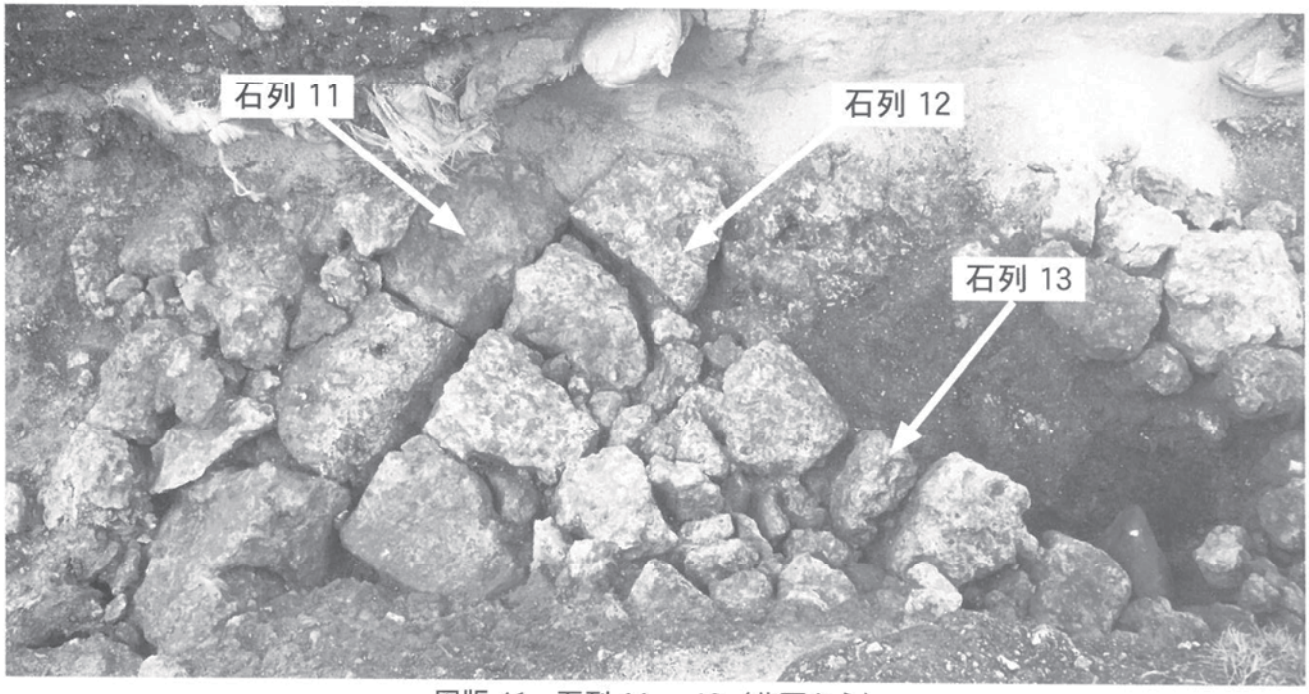
西側に面を持ち、南北に走る石積みである。石列12と面を合わせて並んでいる。石の大きさや構造から、石積み８と同一遺構である可能性がある。

17　石列12（Ｅ－７グリッド　第６図　図版41）

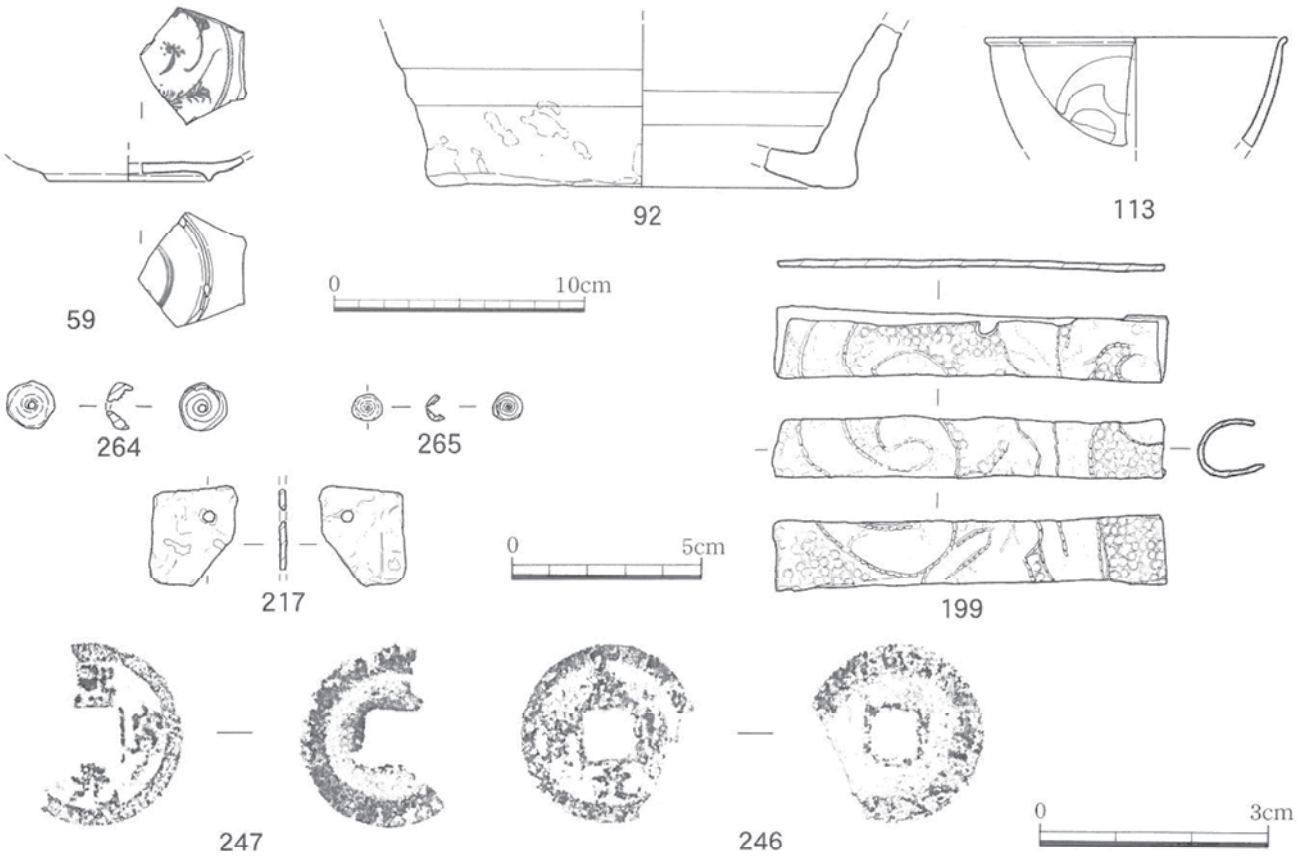
東側側に面を持ち、南北に走る石積みである。石列11と面を合わせて並んでいる。石の大きさや構造から、石積み７と同一遺構である可能性がある。

18　石列13（Ｅ－７グリッド　第６図　図版41）

南側に面を持ち、東西に走る石積みである。



図版41　石列11～13（北西から）



第41図　石列11～13周辺　出土遺物

19　石列14（B・C－4グリッド　第29図　図版40・131）
石列7の上にあり、南北に走る石積みである。面ははっきりしない。

20　石列15（D－6グリッド　第6図　図版42）
南北に走る石列で、面ははっきりしない。

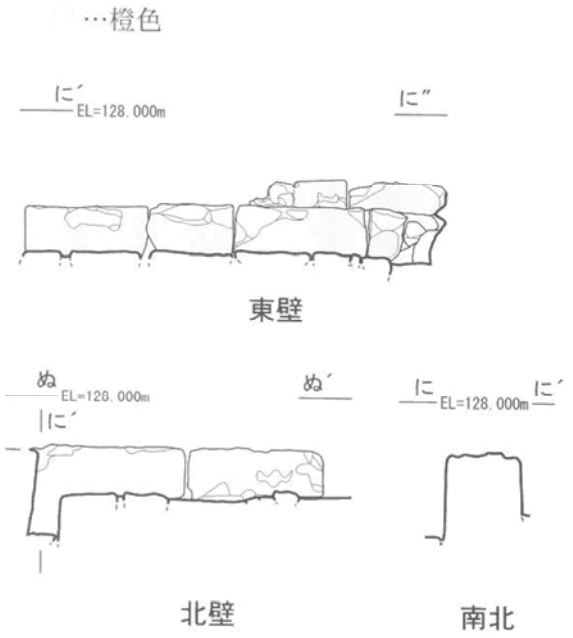
21　石列16（C－4グリッド　第29図　図版40）
南北に走る石列で、面ははっきりしない。

図版42　石列15（南東から）

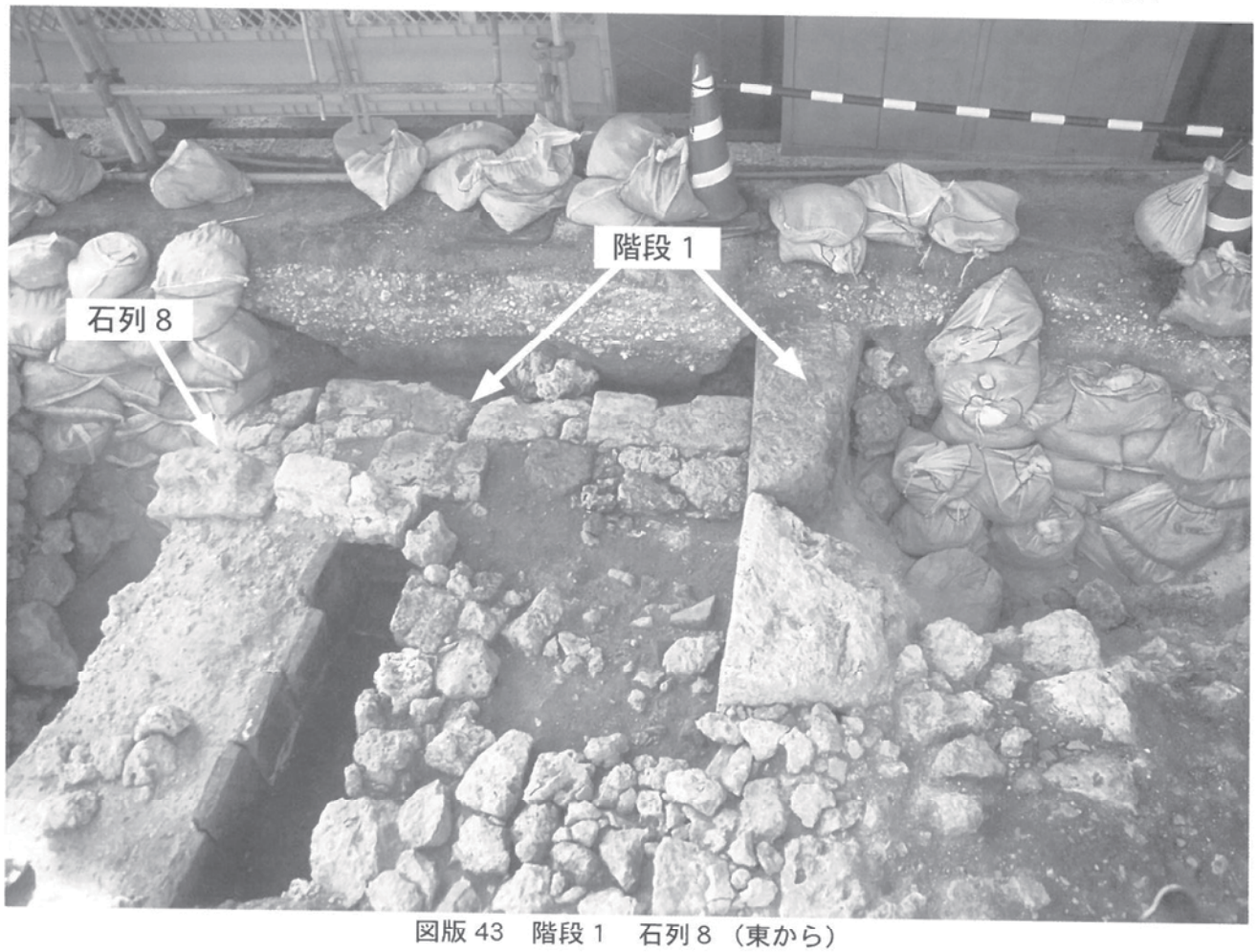
22　階段１（D－７・８グリッド　第42・43図　図版43・44・134・135）

御庭から黄金御殿へと上る階段である。この階段を上りきったところは「暗シン御門」・「左掖門」と呼ばれる。切石を用いており、南壁は残っていない。東端には石列８が接している。

第42図　階段１　平面図



第43図　階段１　立面・断面図

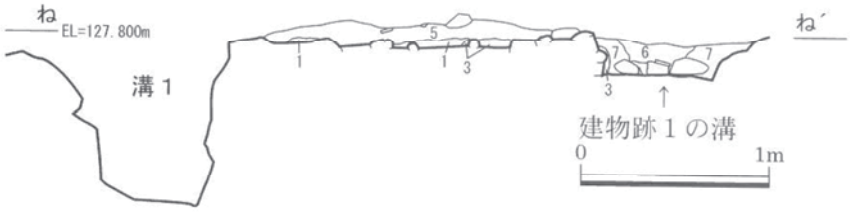


図版43　階段１　石列８（東から）

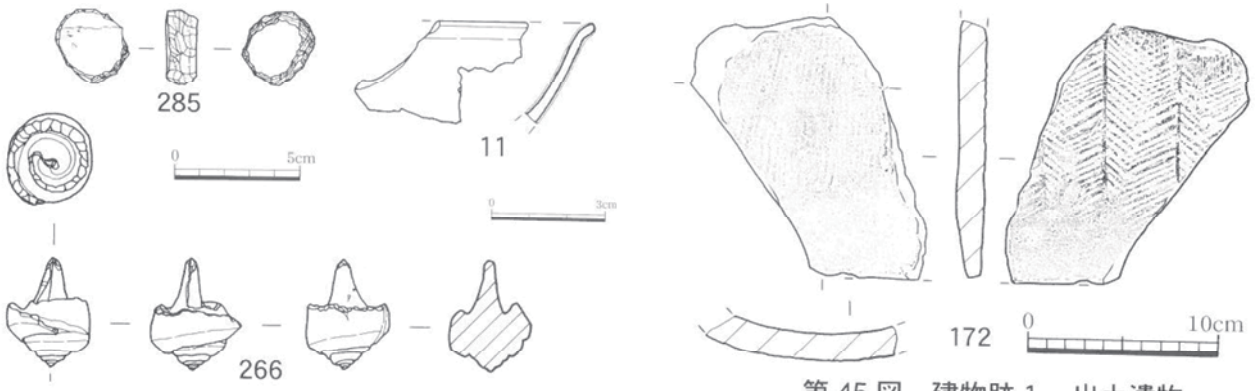
図版 44　階段 1　石列 8（西から）

23　建物跡１（C～E－4～6グリッド　第6・44～47図　図版4・45～50・136～141）

幅60㎝程の溝を掘り、そこに拳大ほどの石灰岩礫を敷き、コンクリートを流し込んで建物基礎が造られた建物で、沖縄戦後のものと考えられる。建物跡の壁面を観察した結果、C～E－4～6グリッドにおいて褐釉陶器や青磁などの遺物を多く含む黒褐色土が堆積していることがわかった。

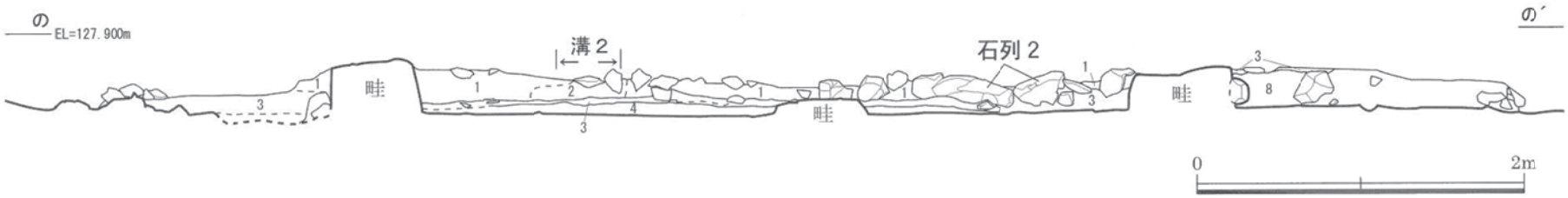


第44図　建物跡１　西壁土層図



第45図　建物跡１　出土遺物

図版45　建物跡１　土層推積状況（西から）



第46図　建物跡1　北壁土層図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
44・46	1	鈍い黄橙色	10YR6/3	4-23	砂質で3mm前後の石灰岩礫を多く含む。褐釉陶器を少し含む。	
	2	鈍い黄褐色	10YR4/3	10	粘質で3mm前後の木炭を含む。	
	3	暗褐色	10YR3/3	2-5	砂質で褐釉陶器を多く、木炭、青磁を少し含む。被熱した石灰岩礫を含む。	
	4	黄褐色	2.5Y5/4	4-8	砂質で石灰岩礫を少し含む。	
	5	暗褐色	10YR3/3	3-14	砂質で褐釉および黒釉陶器、二枚貝を含む。	第48図南壁①の1層。
	6	褐色	7.5YR4/3	10	砂質土。	建物跡1の造成土。
	7	鈍い黄褐色	10YR4/3	18	砂質で瓦、ｺﾝｸﾘｰﾄ、石灰岩礫を含む。	〃
	8	灰黄褐色	10YR4/2	20	砂質で二枚貝、ﾔｺｳ貝、褐釉陶器、高麗瓦、灰色瓦、赤瓦、木炭を含む。	

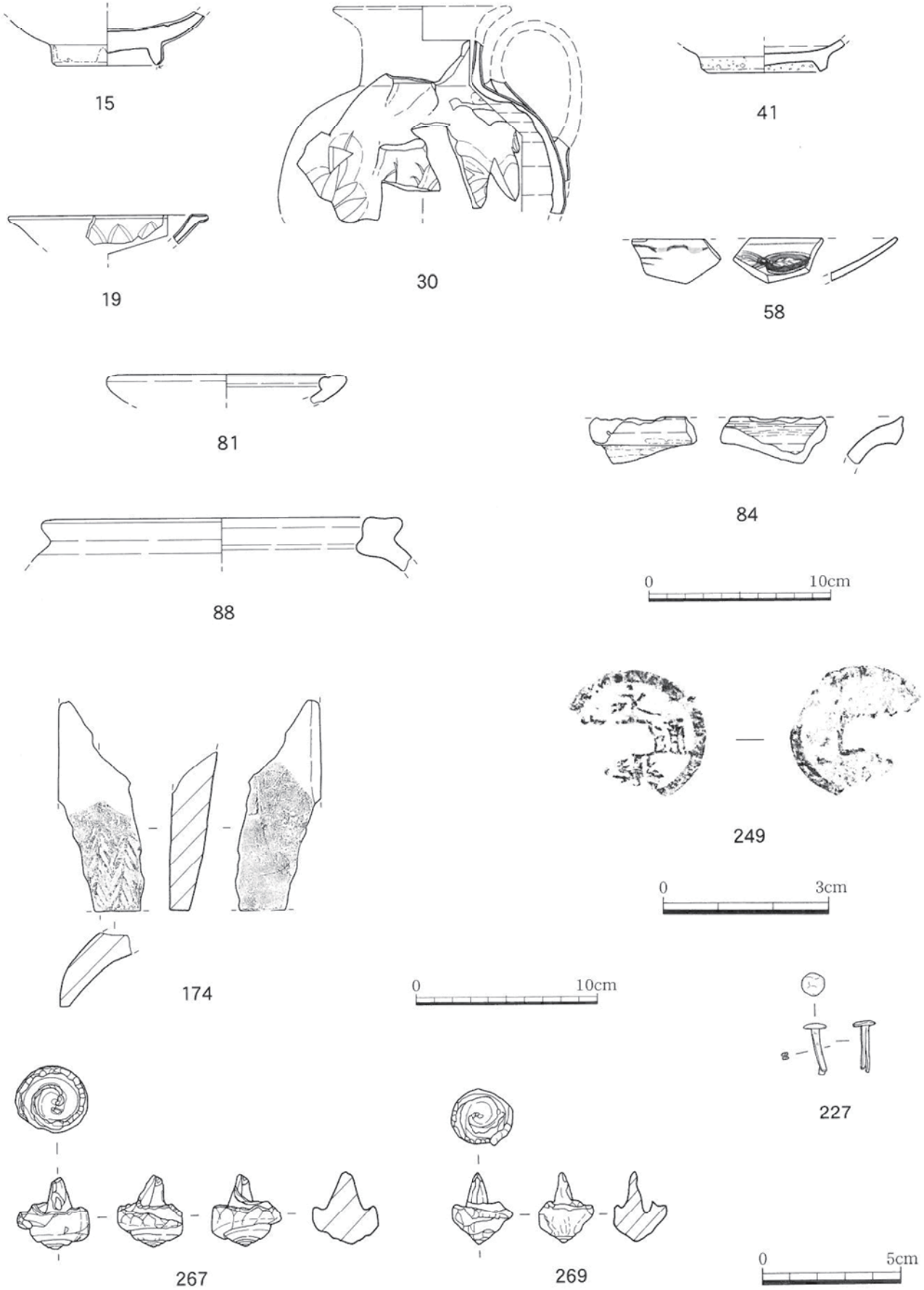
図版 46　建物跡 1　（北東から）

図版 47　建物跡 1　（北から）

図版 48　建物跡 1　（南西から）

図版 49　建物跡 1　（北西から）

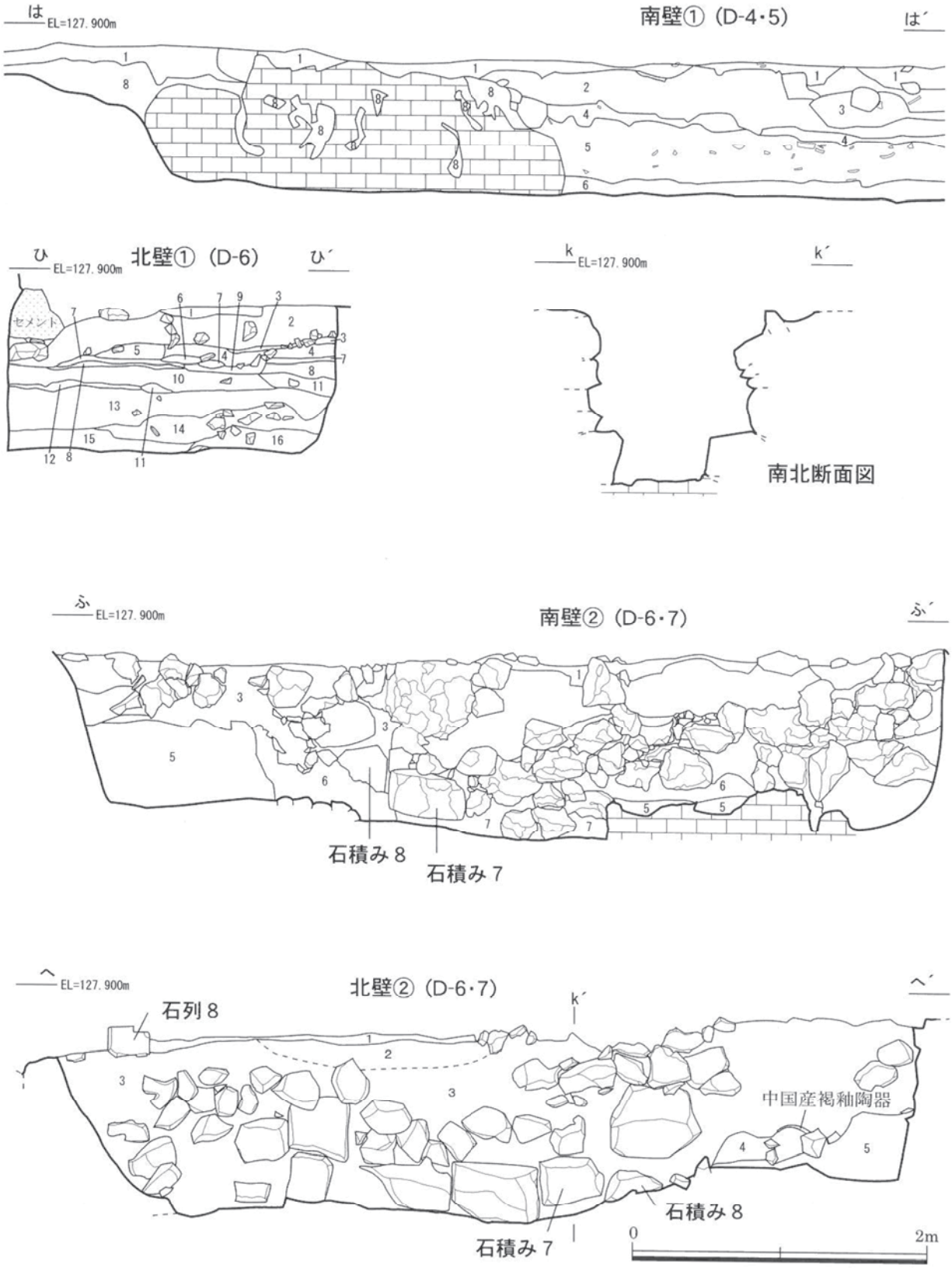
図版 50　建物跡 1　（南西から）



第47図　C～E－4～6グリッド　黒褐色土　出土遺物

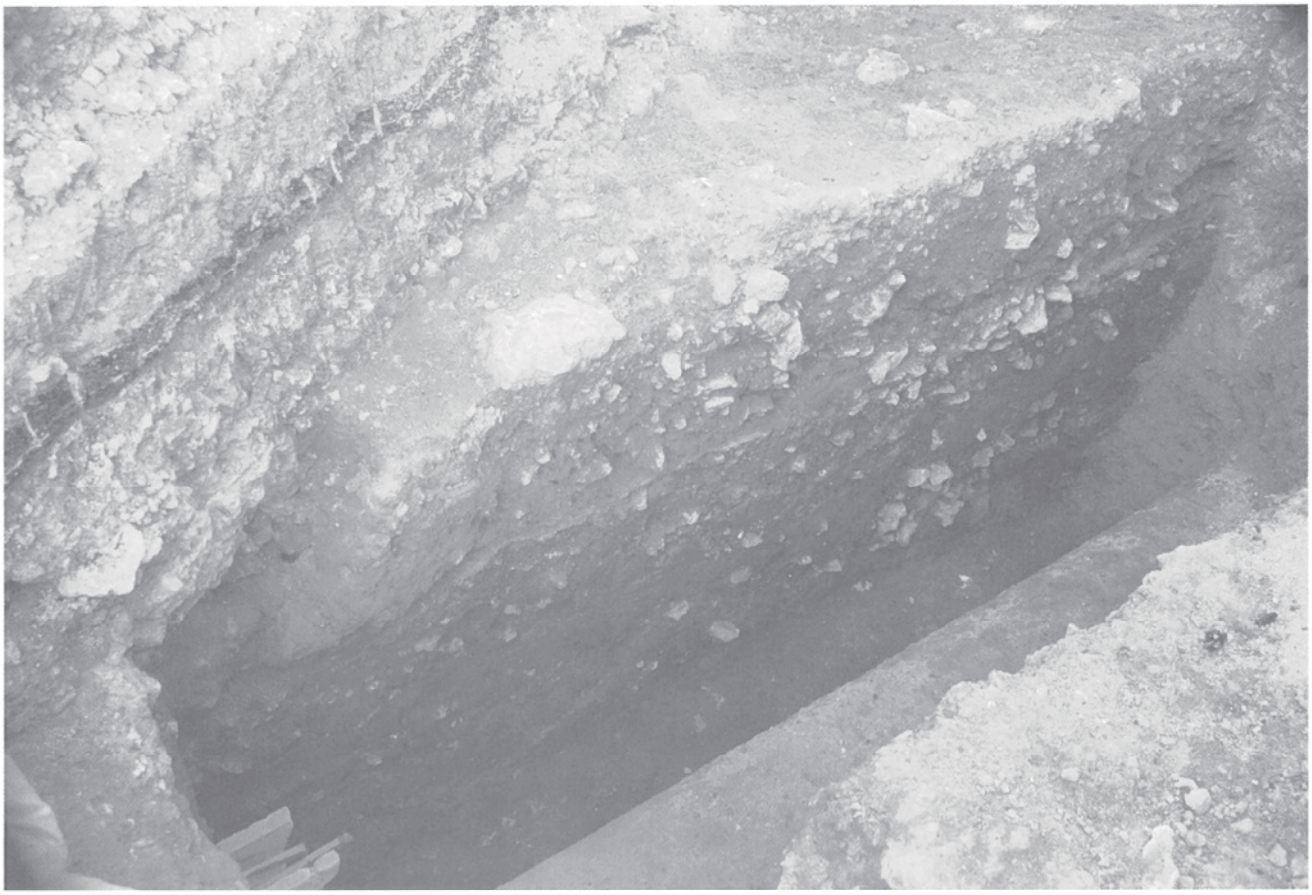
24　溝１（D－３～７グリッド　第６・48図・49図　図版5・51～54・142～144）

旧琉球大学時代の水道管埋設溝である。溝は岩盤まで達しておりその壁面を観察した結果、首里城の長い歴史を物語る幾層もの土層を確認した。

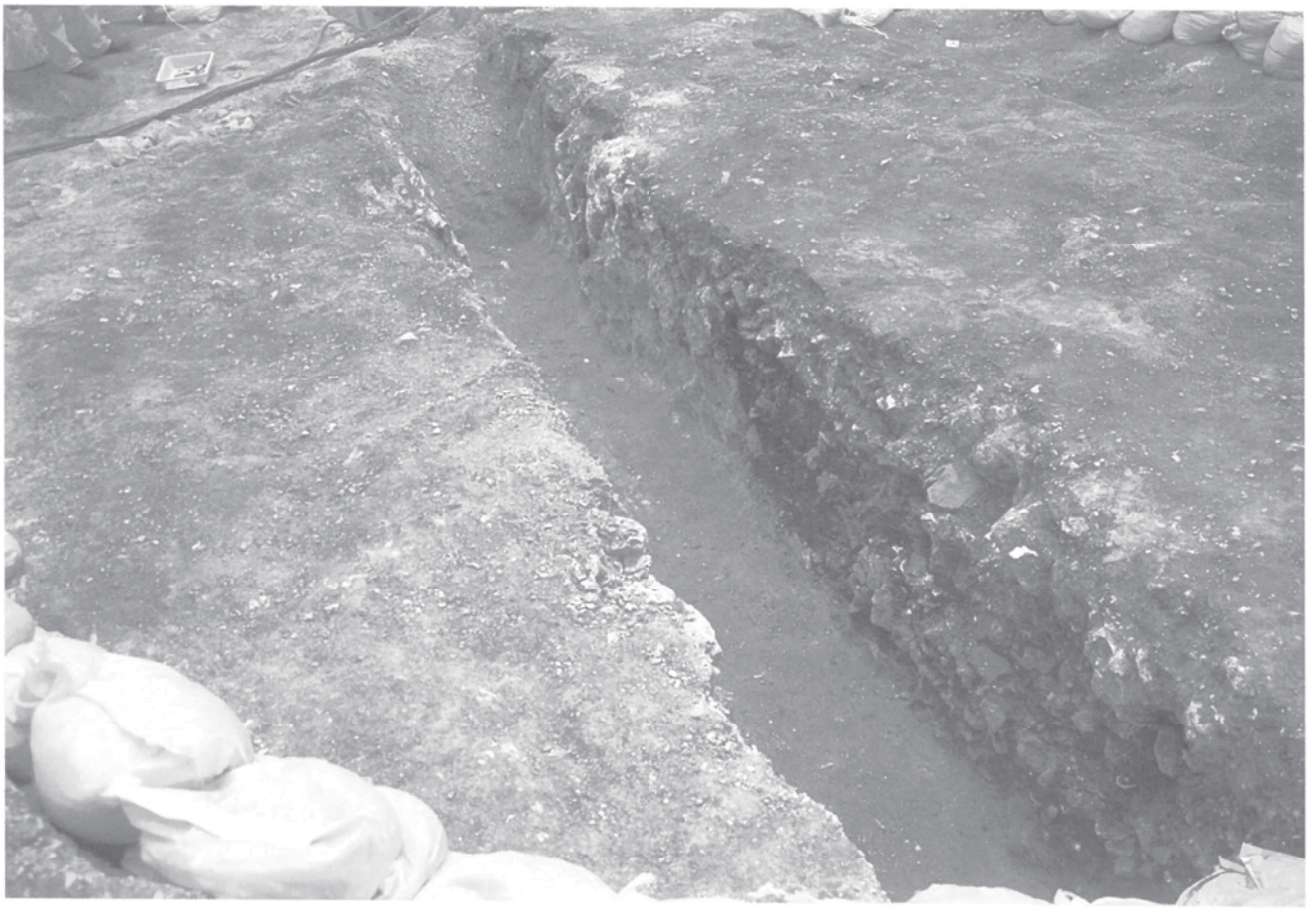


第48図　溝１　土層図・断面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
48-南壁①	1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色	5Y3/2	2-27	粘質土で赤色瓦、貝類を含む。 石灰岩礫を多く含む。	
	2	淡黄色	2.5Y8/3	2-14	遺物なし。礫間に黒色土が入る。	石灰岩礫層。
	3	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	5Y4/2	6-25	粘質でよく締まる。遺物はなく、石灰岩の小片、特に赤色の石灰岩礫が含まれる。	
	4	赤褐色 ＋ 黒色	5YR4/8 ＋ 5YR1.7/1	2-16	粘質でよく締まる。赤・黒の二色が混じり赤主体。貝類、炭を含む。	
	5	黒色	5YR1.7/1	24-44	粘質でよく締まる。西側に大きめの石灰岩礫を多く含む。多くの貝類の他、青磁、褐釉陶器、赤色土器を含む。	
	6	赤褐色 ＋ 黒色	5YR4/8 ＋ 5YR1.7/1	8-15	粘質でよく締まる。4層と同質。貝は見られない。	
	8	赤褐色	5YR4/8	5-35	粘質でよく締まる。遺物なし。 微量に黒色土を含む。島尻マージ。	地山。
48-北壁①	1	鈍い黄褐色	10YR5/3	6-9	砂質土。	
	2	褐色	10YR4/4	16-28	砂質土。	
	3	黒褐色	10YR3/1	2-5	砂質。	炭層。
	4	鈍い黄褐色	10YR4/3	4-11	砂質土。	
	5	鈍い黄橙色	10YR6/4	4-10	砂質土。	
	6	褐色	10YR4/4	5	粘質土。	
	7	鈍い黄橙色	10YR7/4	2-5	砂質土。	コーラル層。
	8	赤褐色	7.5YR4/4	2-11	粘質で炭を含む。	
	9	褐色	10YR4/4	3-10	粘質で砂粒を含む。	
	10	鈍い黄褐色	10YR4/3	7-13	粘質で砂粒を含む。	
	11	灰黄褐色	10YR4/2	2-12	粘質で砂粒、炭を含む。	
	12	黒褐色	10YR3/2	2-6	粘質で砂粒を含む。	炭層。
	13	赤褐色	5YR4/6	10-30	粘質で炭を含む。	
	14	褐色	7.5YR4/4	3-19	粘質で砂粒、石灰礫を含む。	
	15	鈍い赤褐色	5YR4/4	5-15	粘質で砂粒、炭を含む。	
	16	褐灰色	5YR4/1	3-16	粘質で赤土、炭を含む。	
48-北壁②	1	鈍い黄褐色	10YR5/4	2-8	砂質	
	2	黄褐色	10YR5/6	12-18	砂質	第48図南壁①の2層か。
48-南壁②	3	－	－	65-125	すき間にやや黒っぽい2層が入っている。	石灰岩礫層 第48図南壁①の2層か。
	4	赤褐色	2.5Y4/6	22	粘質で褐釉陶器、木炭、礫を少し含む。	主に5層から成る造成土。 第48図南壁①の6層か。
	5	赤褐色	2.5Y4/6	4-46	粘質土	地山。第48図南壁①の8層。
	6	暗褐色	10YR3/3	20-28	粘質で石灰岩小礫を多く含む。 褐釉陶器を含む。	
	7	赤褐色	5YR4/6	6-24	粘質で拳大の石灰岩礫、鈍い黄褐色粘質土(10YR4/3)を多く含む。	



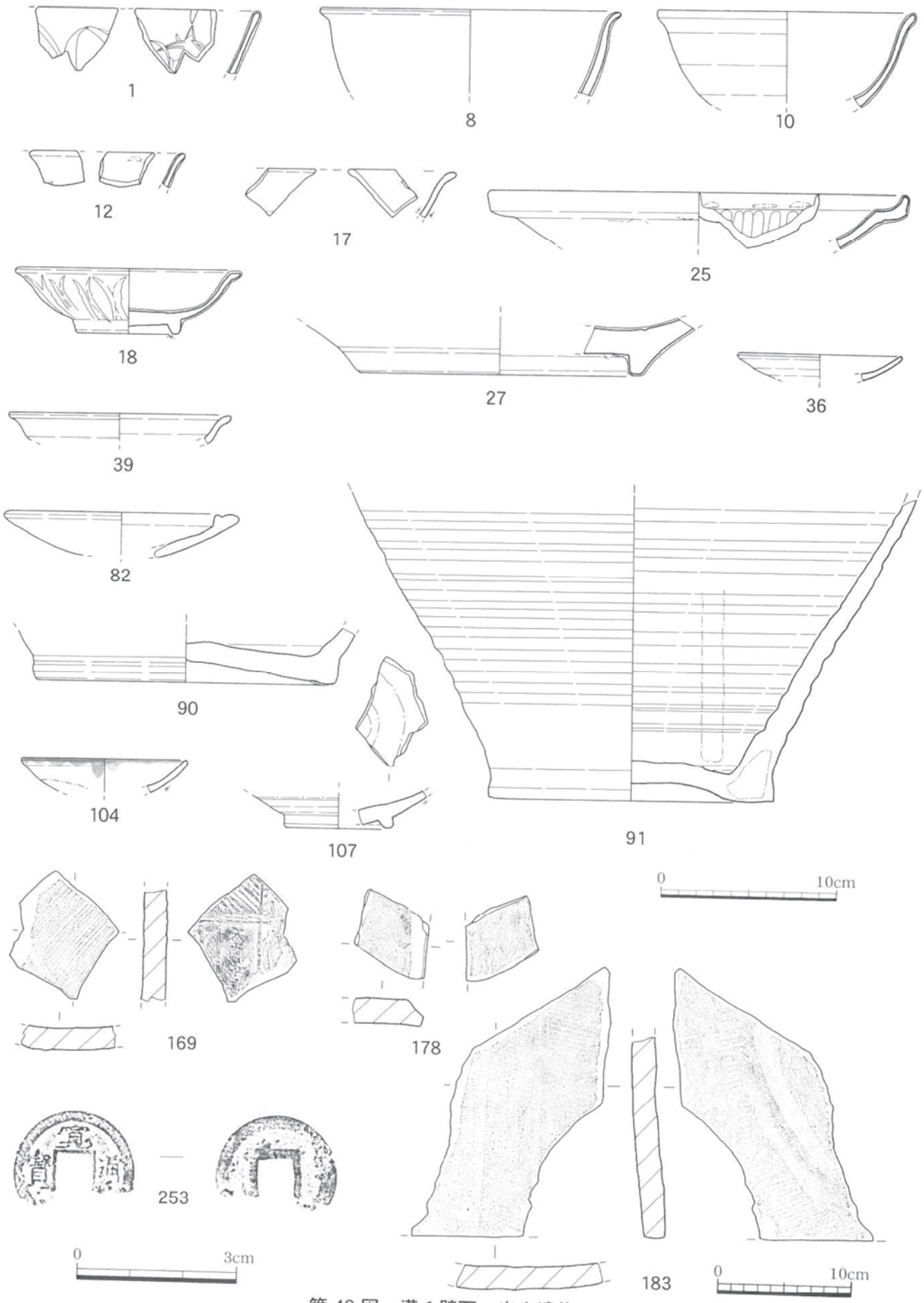
図版 51　溝 1　北壁（南西から）



図版 52　溝 1　南壁（北西から）

図版 53　溝 1　北壁（南から）

図版 54　溝 1　（西から）



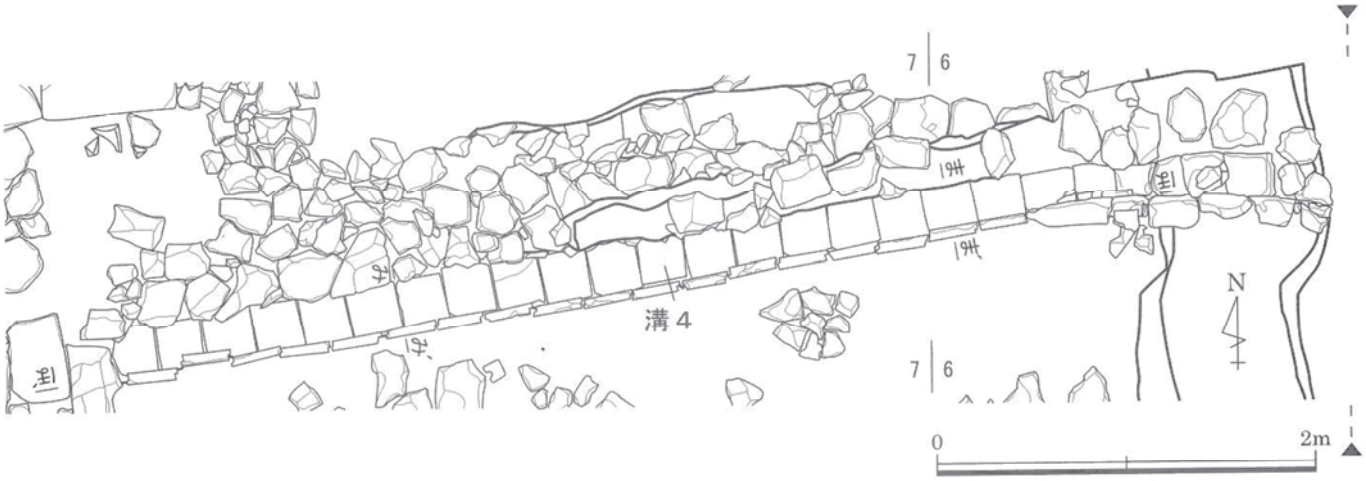
第 49 図　溝 1 壁面　出土遺物

25　溝２・溝４（D－５～７グリッド　第50～55図　図版55～61・145～149）

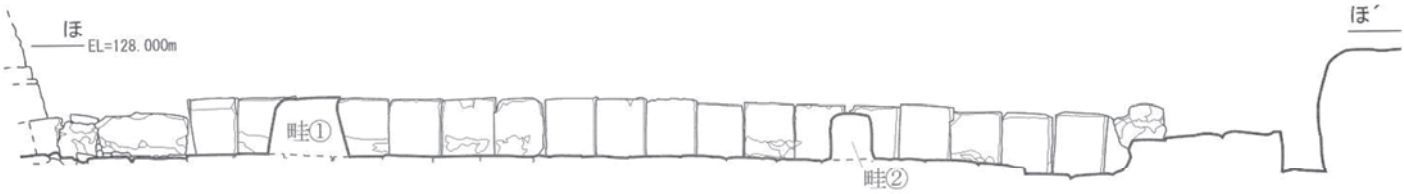
溝２は石灰岩を使っており、溝４は塼を使っている。当初は別々の遺構と考え遺構名も別としたが、平成17年度の調査においてD－６グリッド部分で両者がつながり、一連の遺構であることが判明した。

溝４については底部と南壁は残っているが、北側については破壊されている。南壁に使われている塼には、隣り合う塼との噛みあわせを良くするためのＬ字形の段が付けられている。

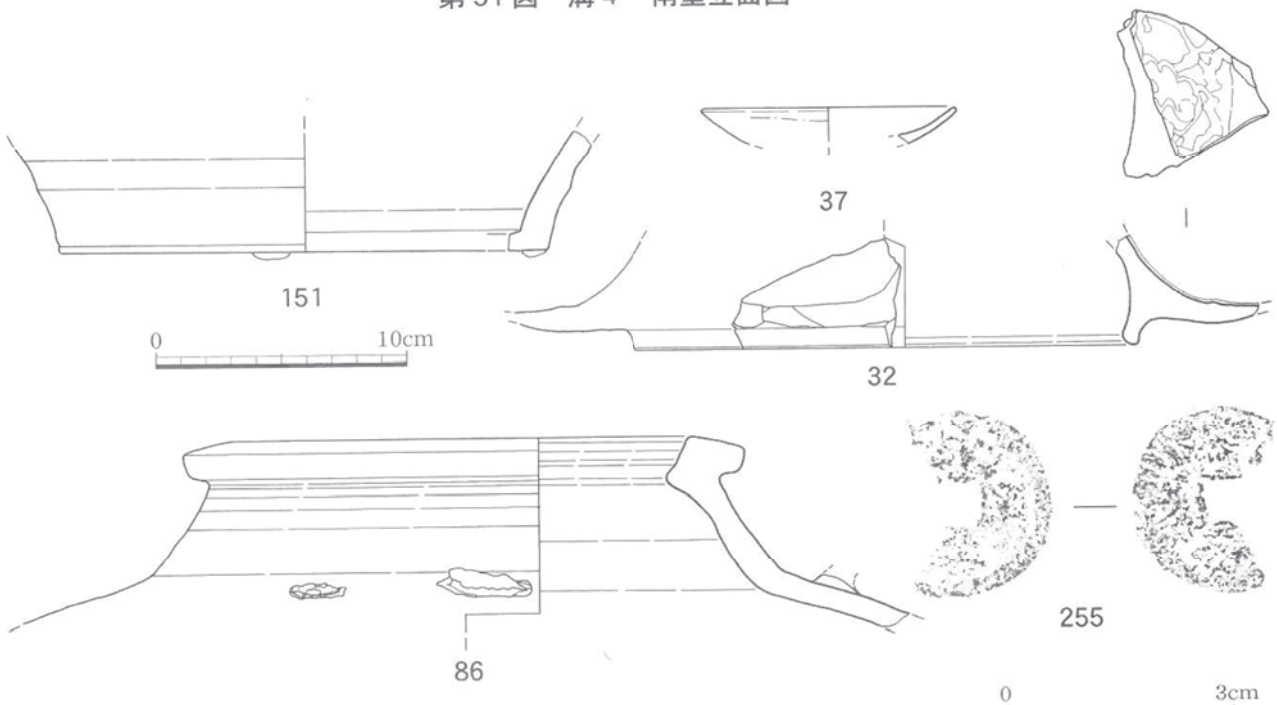
聞き取り調査によると、戦前溝４については見ることが出来ず、石が敷かれた通路であったとのことであった。この通路とは暗シン御門から黄金御殿の中を通り抜けて黄金御殿の南側に出る通路であったと考えられる。そして当時溝４は、この通路の下に暗渠として存在していたと考えられる。



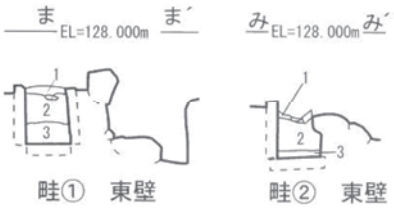
第50図　溝２・溝４　平面図



第51図　溝４　南壁立面図

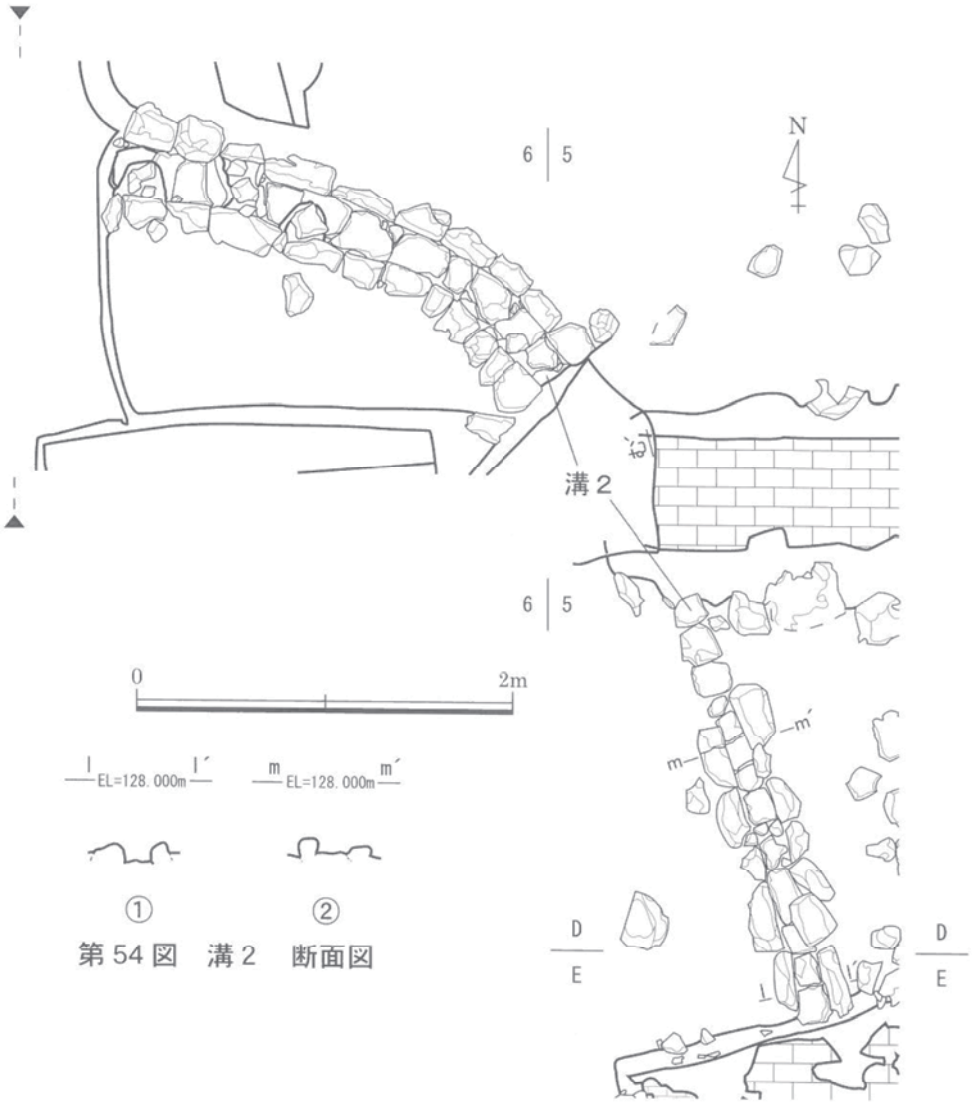


第52図　溝２　出土遺物



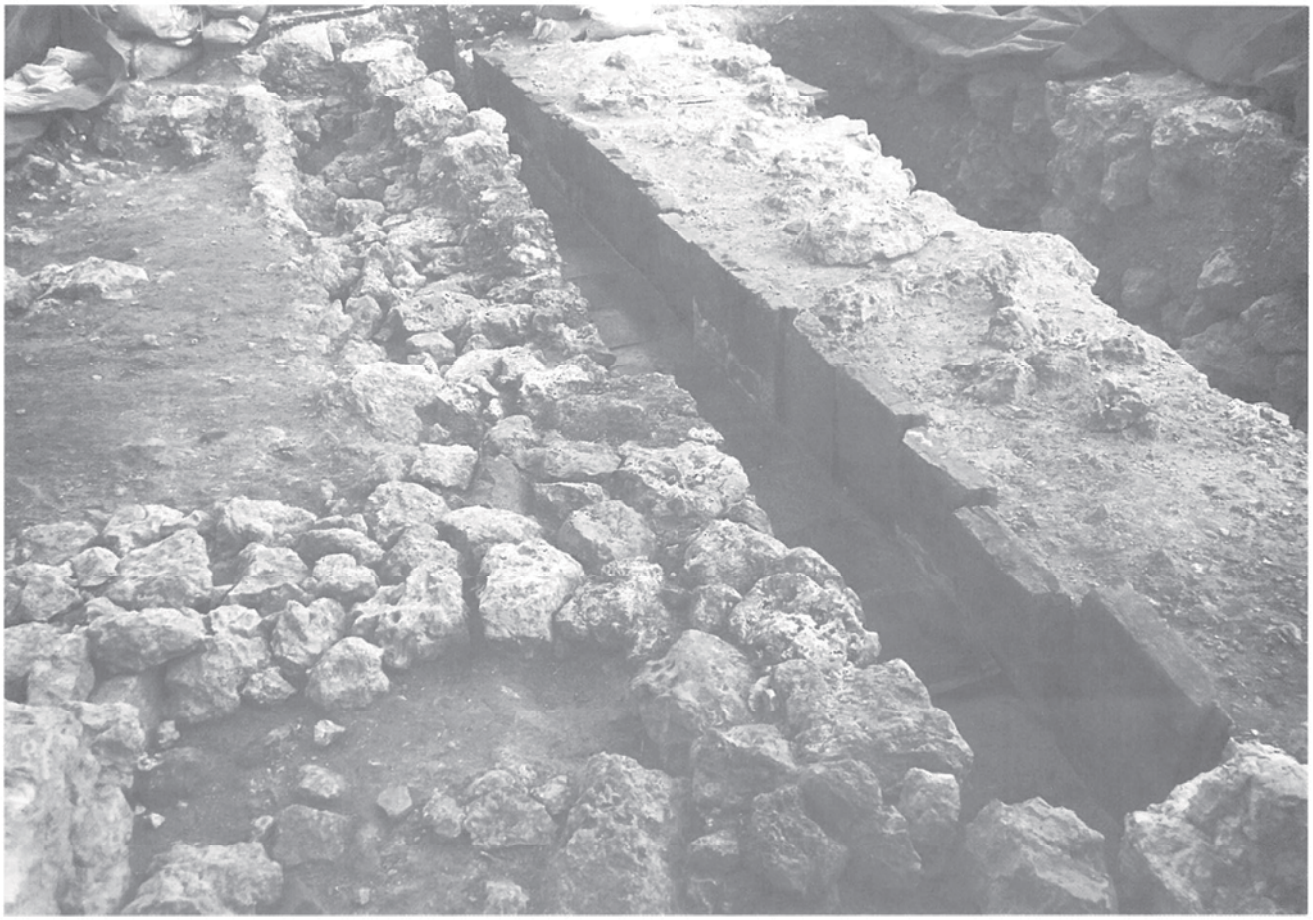
第53図　溝4　土層図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物
53-畦①・②	1	鈍い黄褐色	10YR4/3	2-4	粘質で瓦・石灰岩礫を含む。
	2	灰黄褐色	10YR5/2	6-17	砂質で3mm前後の木炭、1mm以下の砂粒を多く含む。
	3	鈍い黄褐色	10YR5/4	3-12	砂質で3mm前後の木炭、2cm前後の石灰岩礫を多く含む。



第54図　溝2　断面図

第55図　溝2　西壁立面図



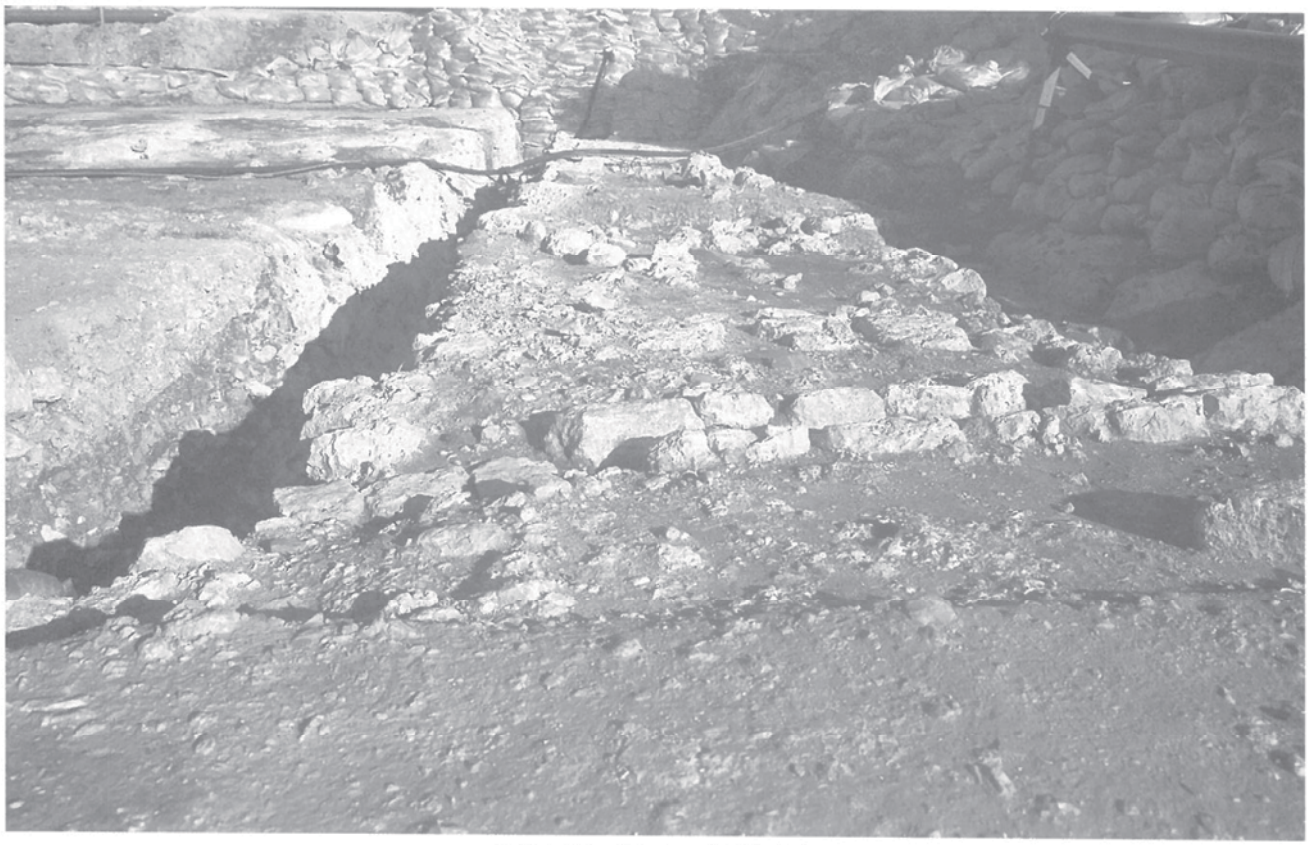
図版 55　溝 4　（北西から）

図版 56　溝 4　（北東から）

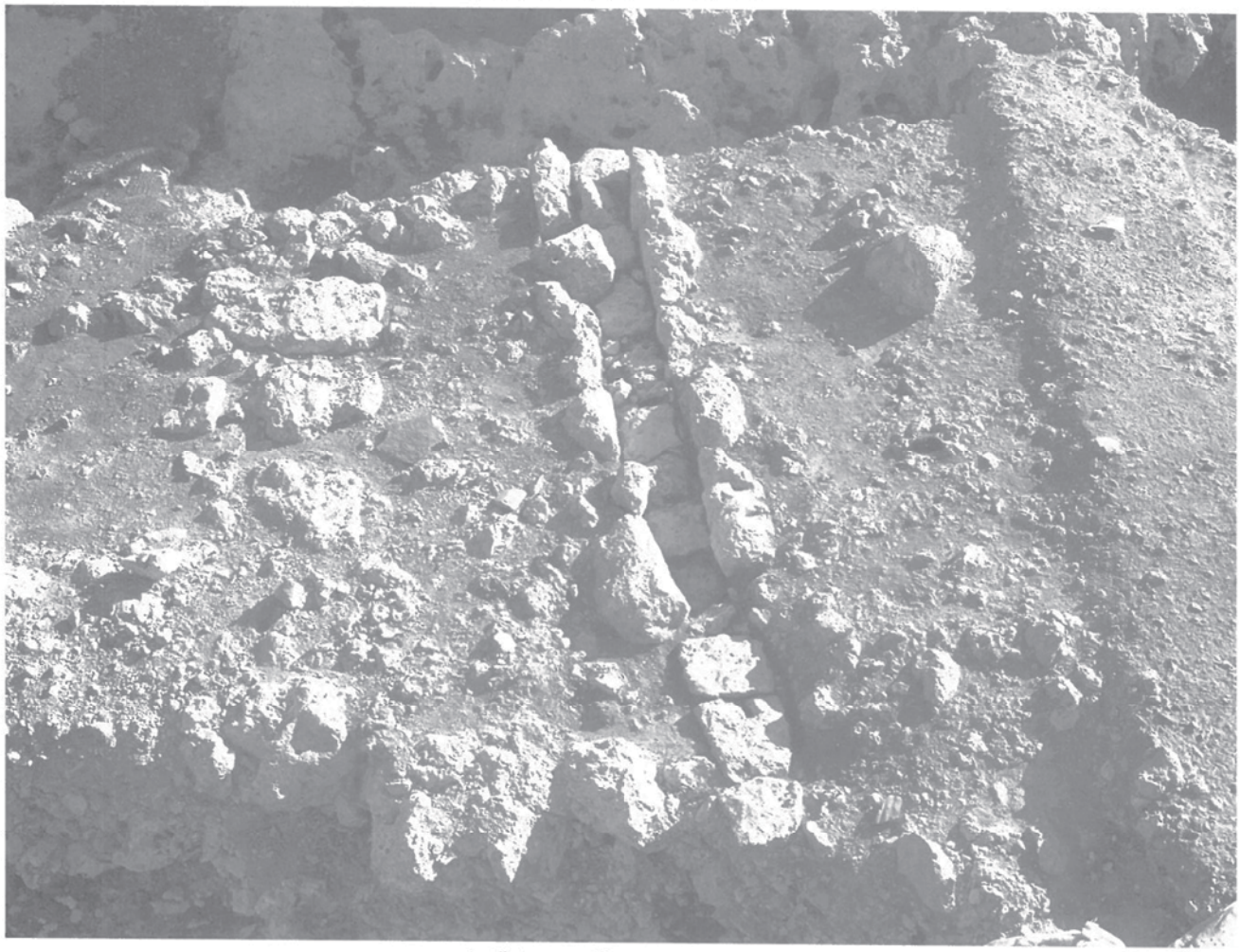
図版 57　溝 4　（南西から）

図版 58　溝 2　（北東から）

図版 59　溝 4　（東から）



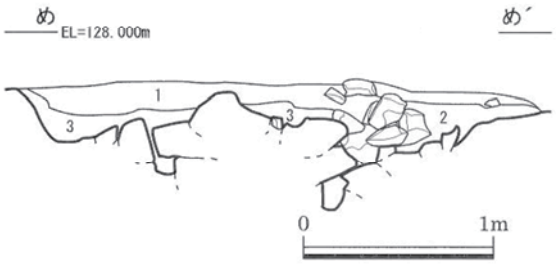
図版 60　溝 2　（西から）



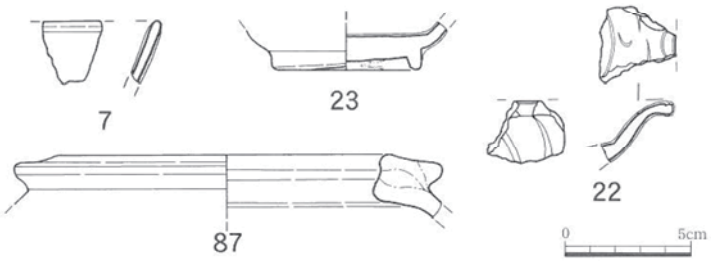
図版 61　溝 2　（北から）

26　トレンチ１（D・E－７グリッド　第６・56・57図　図版62）

D・Eグリッドの下層を確認するために設定した。堀り下げを開始して間もなく石灰岩の礫が大量に出土した。これらの石灰岩は黄金御殿地区で行われた造成工事の跡と考えられる。このような造成の跡は、トレンチ８や溝１でも確認されており、広範囲に及んでいることがわかる。



第56図　トレンチ１　東壁土層図



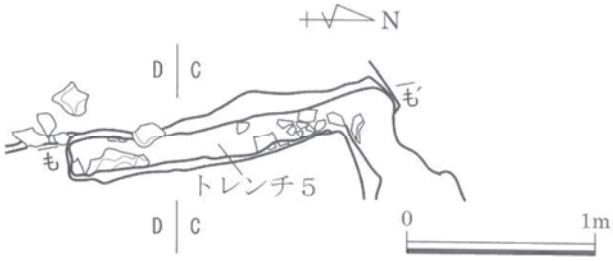
第57図　トレンチ１　出土遺物

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
56	1	灰黄褐色	10YR4/2	4-16	粘質土。	
	2	褐色	10YR4/4	4-20	－	第48図北壁②の２層。
	3	－	－	4-30?	石灰岩大礫、ヤコウ貝を含む。	すき間に２層が入る。石灰岩礫層。第48図北壁②の３層。

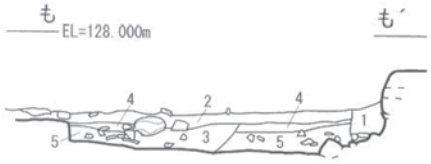
図版62　トレンチ１東壁（北西から）

27　トレンチ５（C・D－５グリッド　第58～60図　図版63・64・150・151）

C・D－５グリッドの下層を確認するために設定した。

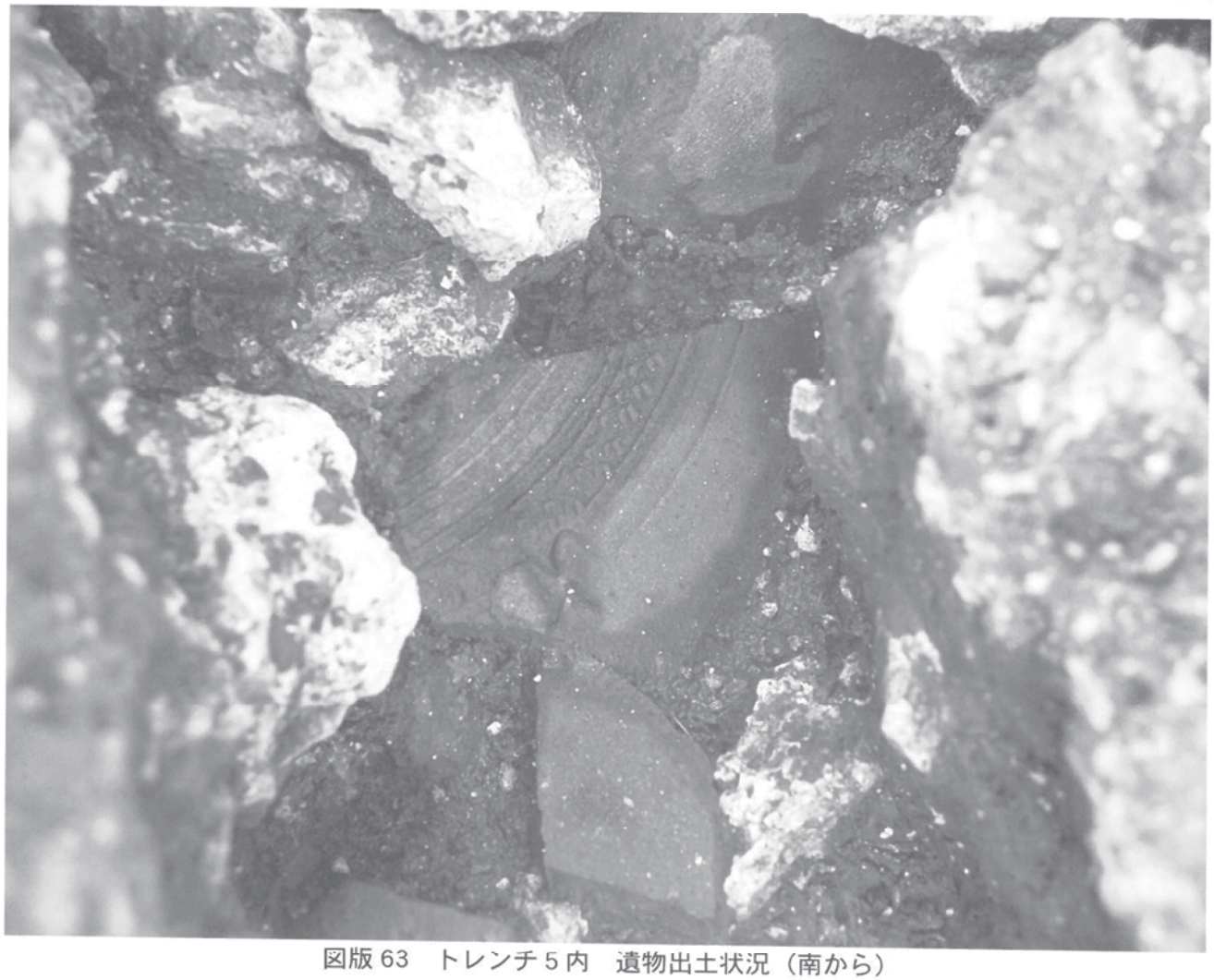


第58図　トレンチ５　平面図



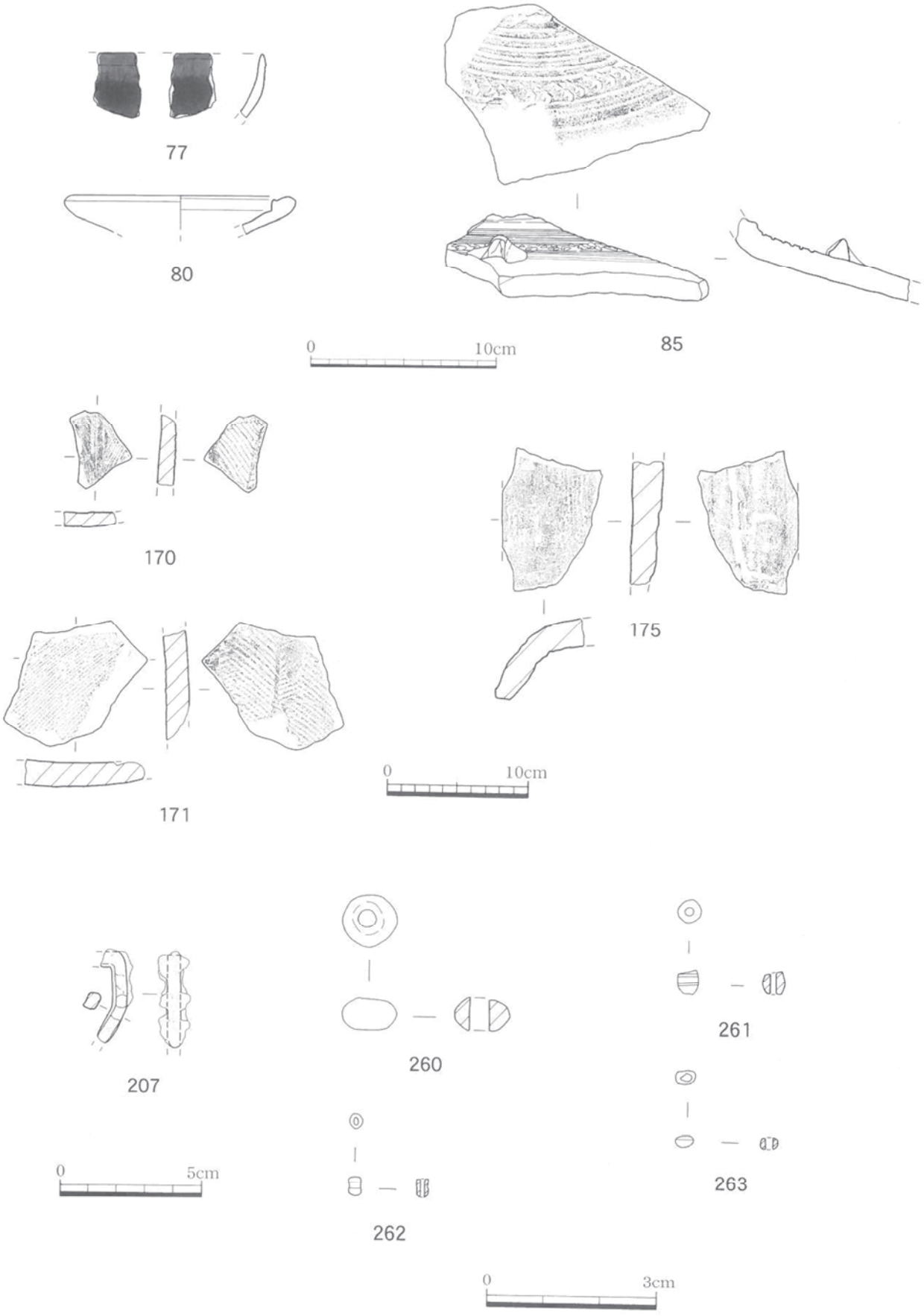
第59図　トレンチ５　西壁土層図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
59	1	黒褐色	10YR3/2	12	粘質土。	建物跡１の造成土。
	2	暗褐色	10YR3/3	5-7	粘質で染付、赤瓦を含む。	「暗褐色土」で遺物を取り上げた層。第48図南壁①の１層。
	3	褐灰色	10YR4/1	8-14	砂質で炭を多量に含む。赤褐色粘質土を少し含む。	
	4	褐色	10YR4/6	2-5	粘質で石灰岩小礫をやや多く含む。	
	5	黒褐色	10YR3/2	8-14	粘質で高麗系瓦、褐釉陶器を含む。石灰岩小礫、赤褐色粘土(地山)を少量含む。	第48図南壁①の5層。



図版63　トレンチ５内　遺物出土状況（南から）

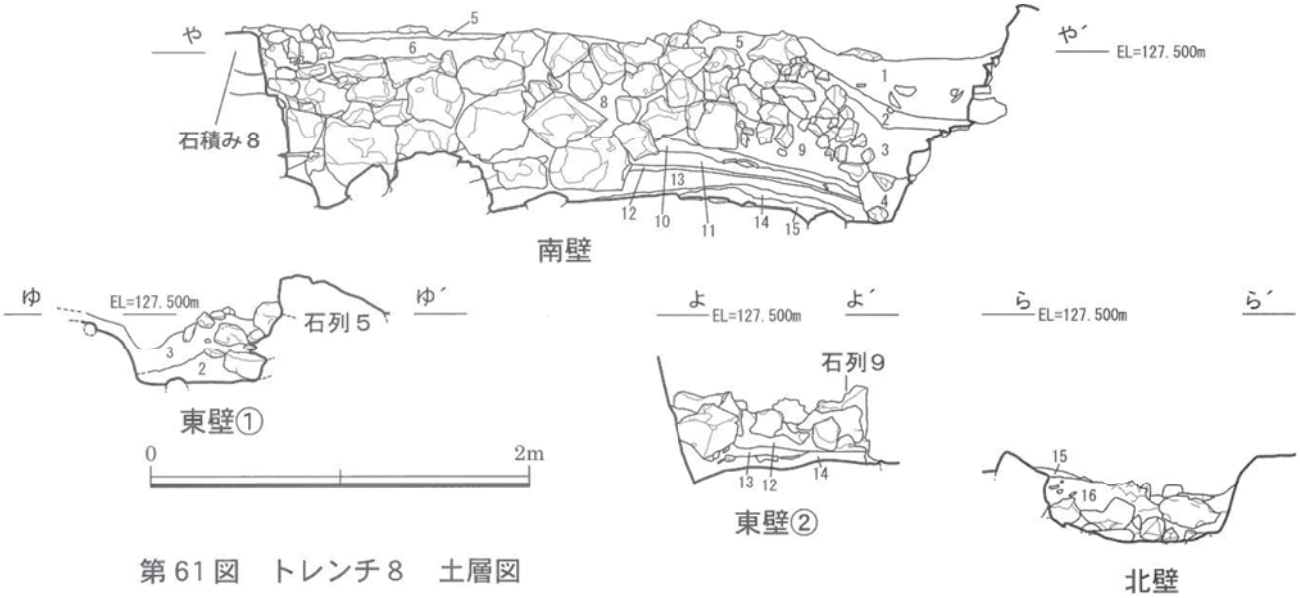
図版 64　トレンチ 5（南から）



第 60 図　トレンチ 5　出土遺物

28　トレンチ８（Ｃ－６・７グリッド　第６・61・62図　図版65～68・152～155）

旧琉球大学時代の溝の壁面等を清掃し、土層堆積状況等の観察を行った。その結果、黄金御殿地区で行われた造成工事の跡や、石列などの遺構を確認した。また、14・15 世紀頃の土層と考えられる 15 層からは、多量の炭とともに青銅滓と考えられる資料や、熔着した銭貨が出土していることから、城内で金属製品を生産していたことがうかがえる。



第 61 図　トレンチ８　土層図

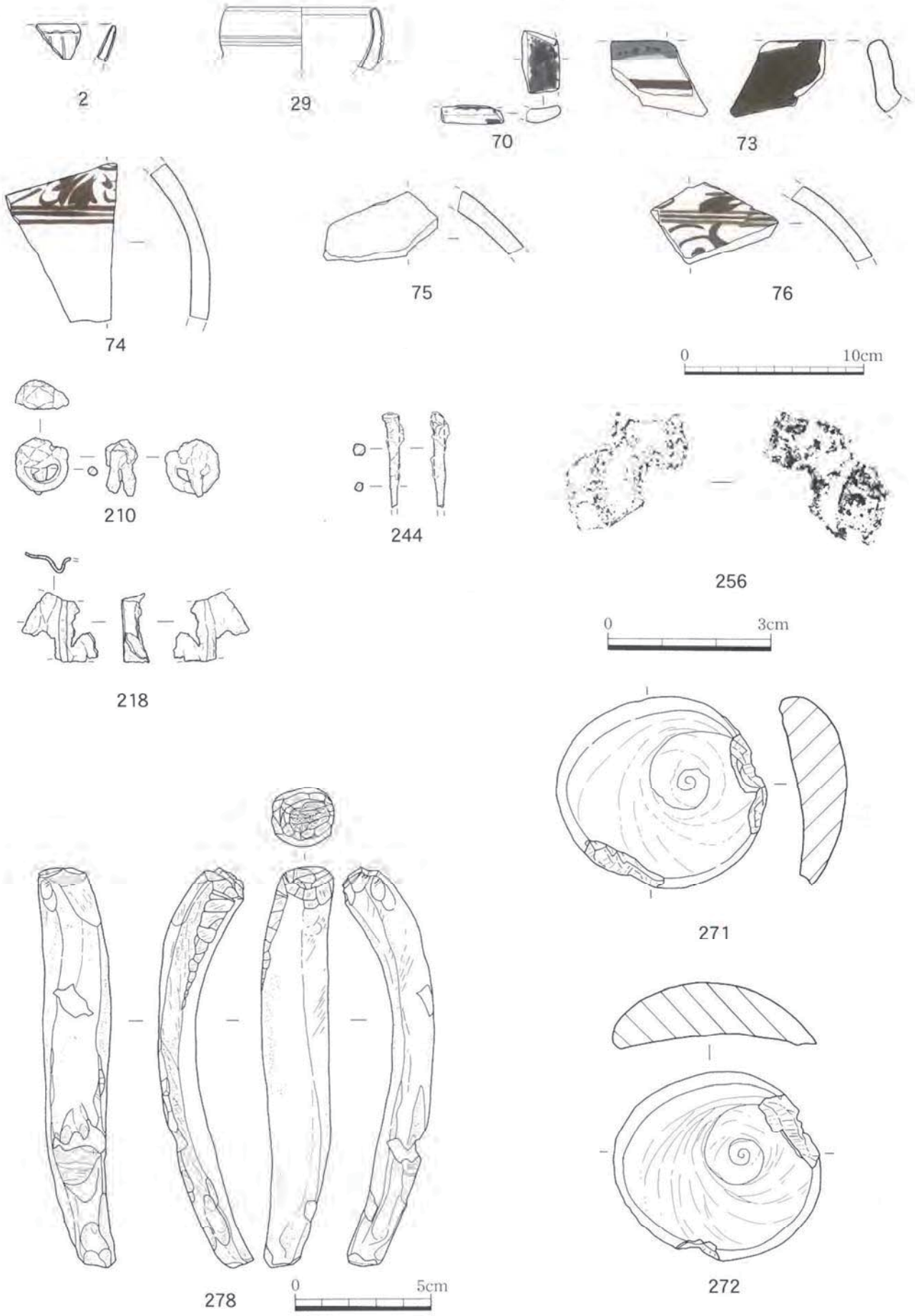
図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
61-南壁・東壁②・北壁	1	鈍い黄褐色	10YR4/3	12-22	砂質で赤瓦、木炭を含む。	
	2	灰黄褐色	10YR6/2	6-10	砂質で石灰岩礫を含む。	
	3	黒褐色	10YR3/2	10-28	粘質で赤褐色粘土、炭を含む。	
	4	明黄褐色	10YR7/6	20	－	砂礫層。
	5	褐色	7.5YR4/3	4	砂質土。	第48図北壁②の1層。
	6	黄褐色	－	10-16	砂質土。	
	7	－	－	2	－	炭層。
	8	－	－	30	30cm前後の石灰岩を含む。	石灰岩礫層 第48図北壁②の3層。
	9	－	－	6-21	－	8・10・11層の互層。
	10	鈍い黄褐色	10YR5/3	2-7	砂質で炭を多く含む。 貝類、褐釉陶器を含む。	
	11	黄橙色	10YR7/8	4-6	－	砂礫土。
	12	灰白色	10YR8/2	2	－	13層と互層を成す。 石粉・礫層。
	13	黄褐色	2.5Y5/3	4-12	砂質土。	
	14	鈍い黄褐色	10YR4/3	2-6	砂質土。	
	15	黒褐色	2.5Y3/2	4-8	砂質で炭を多量に含む。青銅滓片、褐釉陶器、青磁、石灰岩礫(被熱したものあり)を含む。	
	16	明黄褐色	10YR7/6	?	－	砂礫層。
61-東壁①	2	鈍い黄褐色	10YR5/4	6-16	砂質で5mm前後の石灰岩礫、褐釉陶器、二枚貝、ﾔｺｳ貝を含む。1mm以下の砂粒を多く含む。	第36図の2層。
	3	明赤褐色	5YR5/6	6-18	粘質で炭、被熱した石灰岩礫を含む。下位に1mm以下の砂粒を含んだ灰黄褐色土(10YR5/2)を含む。	第36図の1層と同一か？

図版 65　トレンチ 8（北から）

図版 66　トレンチ 8（北西から）

図版 67　トレンチ 8　南壁（北から）

図版 68　トレンチ 8　南壁（北から）



第62図　トレンチ8　出土遺物

29 石敷き１（Ｄ－３グリッド　第６図）

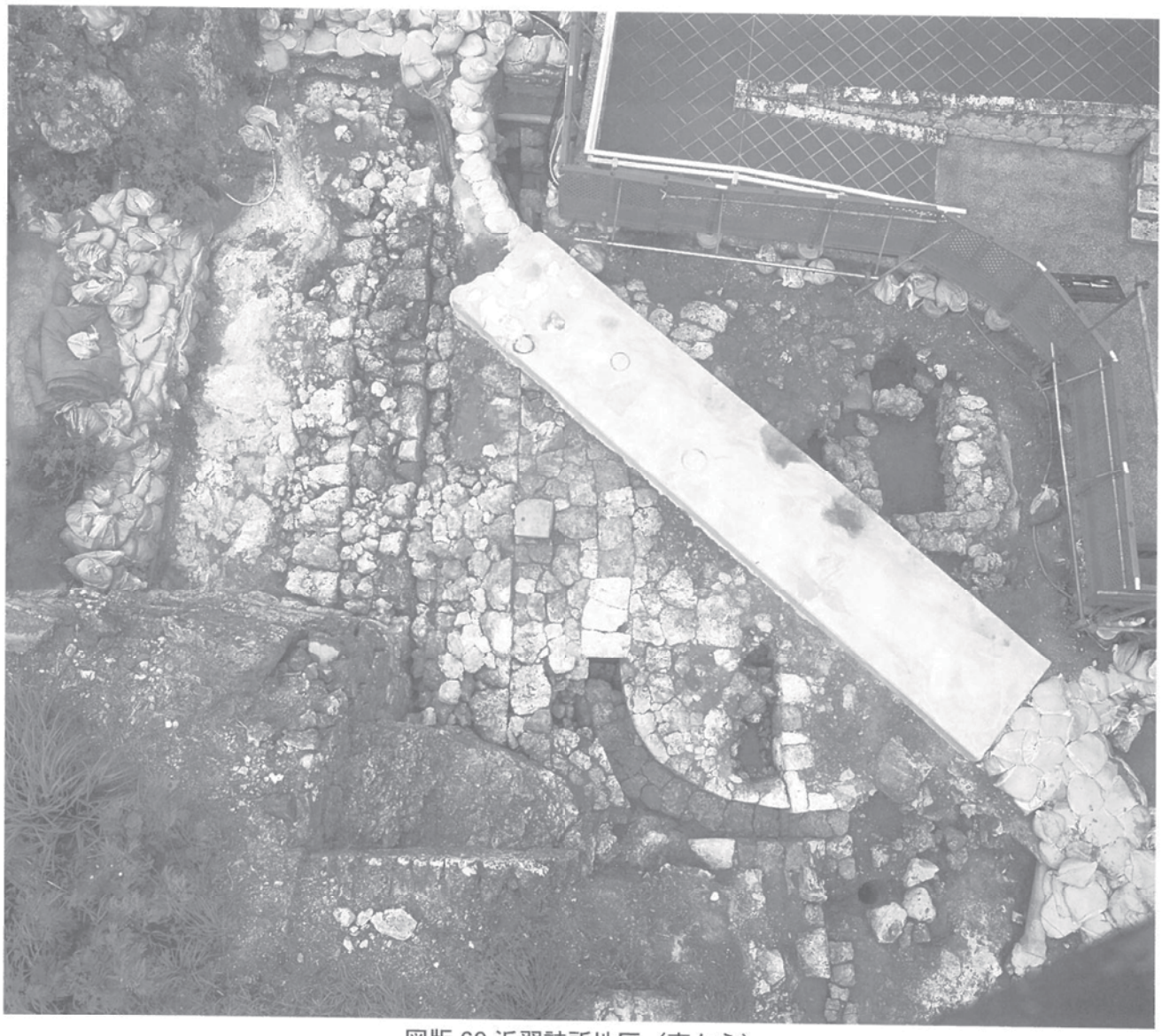
黄金御殿と二階殿との間にあった、石敷きの道路である。石敷きの下には陶磁器を大量に含んだ造成土が確認できた。この石敷き１は、平成９年度の二階殿地区発掘調査で検出された「西ＳＢ１」と同一の遺構である。

第３節　近習詰所地区の遺構と遺物

調査区南西部、Ｆ・Ｇ－７・８グリッドにあたる。重機で造成土を除去すると、間もなく礎石跡や石敷きなどの遺構が現れた。平成15年度の段階では電気ケーブルとそれを保護するコンクリートが設置されたままであったが、平成17年度でこれらを撤去し遺構のつながりを確認した。

他の地区と同様に石灰岩の岩盤は北西に向けて低くなっており、その高低差をなくすための造成工事が行われたと考えられる。そうしてできた平坦面に礎石を置き、周りに石を敷いている状況が確認できた。

出土遺物によると18世紀後半頃に石敷き２とこれに伴う礎石が置かれたと考えられる。



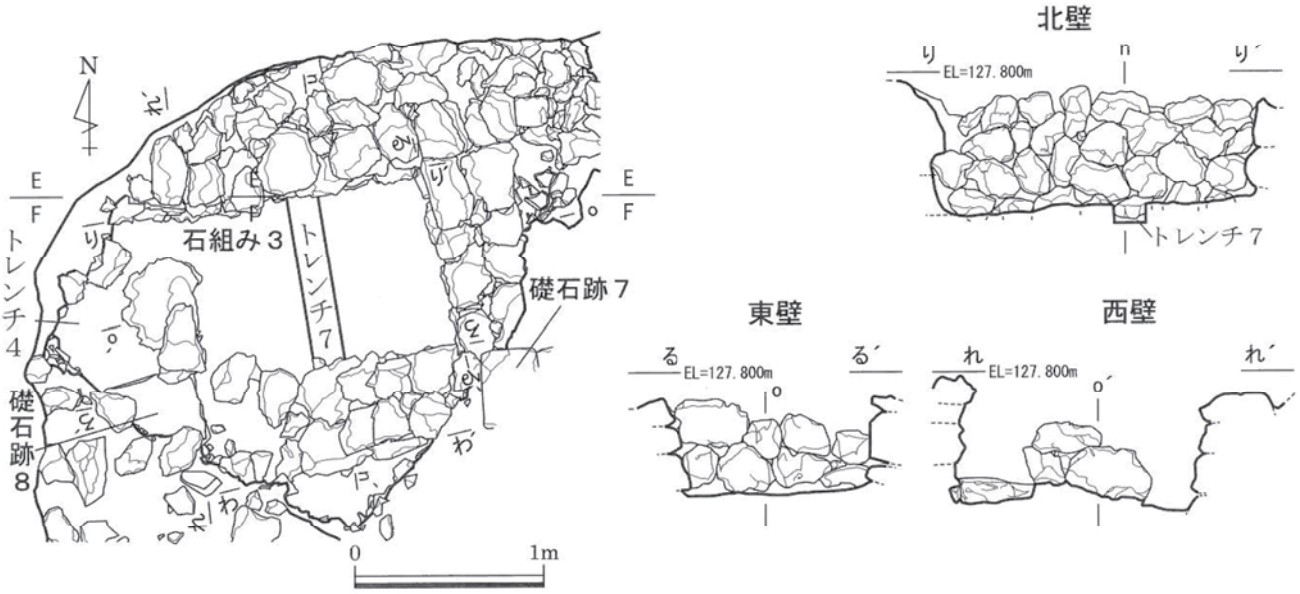
図版69 近習詰所地区（東から）

1　石組み３（E・F－８グリッド　第 63 ～ 67 図　図版 70 ～ 73・157 ～ 159）

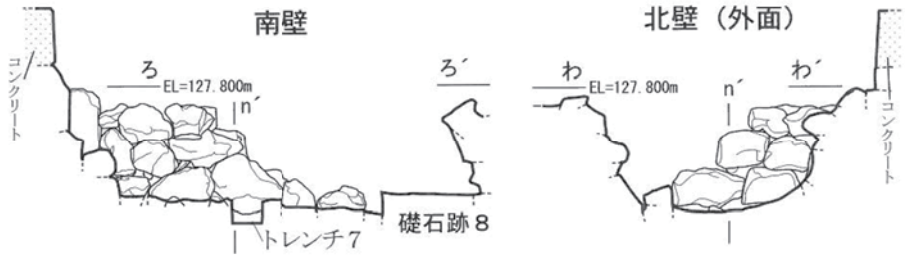
四方を石積みで囲んだ遺構である。平面形態は長方形で内側の長さは東西で 1.5 m、南北で 0.9 mである。石積みは高さ 60cm が残っている。石積みは野面風の相方積みで、二重構造のような形態である。南西部は破壊されており、砂岩製の礎石が検出された。

石組みの北側半分については、遺構検出時に保護砂や写真測量のターゲットが確認されたことから、過去に調査されていたことが分かった。

石組みの底部に対しトレンチ７を設定し掘り下げを行ったが、石敷き等は検出されなかった。



第 63 図　石組み３　平面図



第 64 図　石組み３　立面図

第 65 図　石組み３　断面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物
65	1	黒褐色	7.5YR3/2	2-12	－
	2	鈍い黄褐色	10YR4/3	4	粘質で石灰岩小礫を含む。
	3	黒褐色	7.5YR3/2	3	粘質で炭を多量に含む。焼土？を少量含む。

34

0　5cm

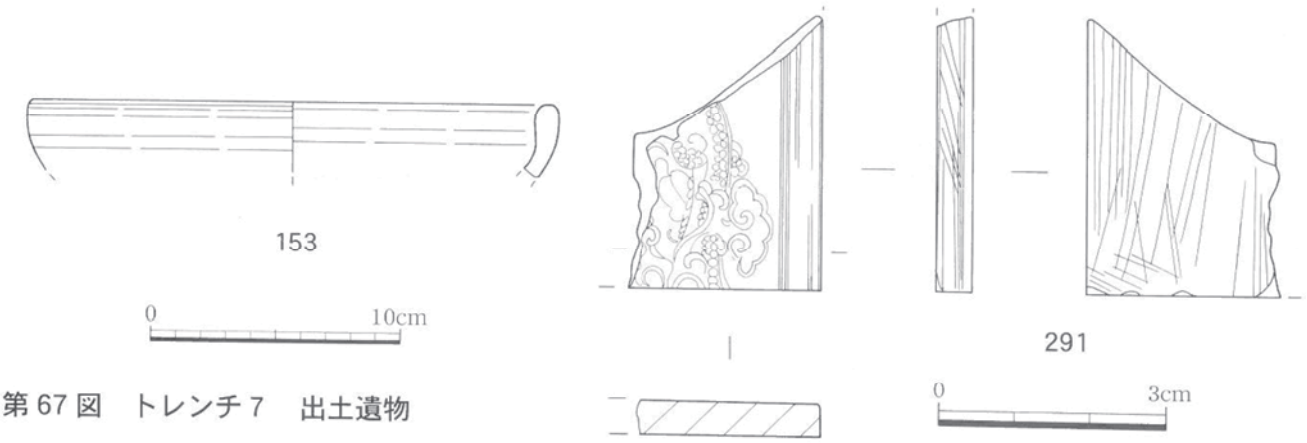
第 66 図　石組み３　出土遺物

図版 70　石組み 3　検出途中状況（東から）

図版 71　石組み 3 内　土層堆積状況（北東から）

図版 72　石組み 3　（南西から）

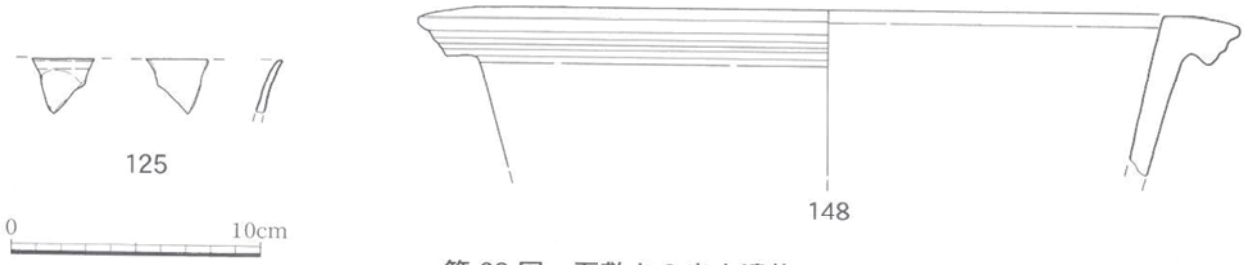
図版 73　石組み 3（南から）



第67図　トレンチ7　出土遺物

2　石敷き2（F－7・8グリッド　第68・69図　図版74・75）

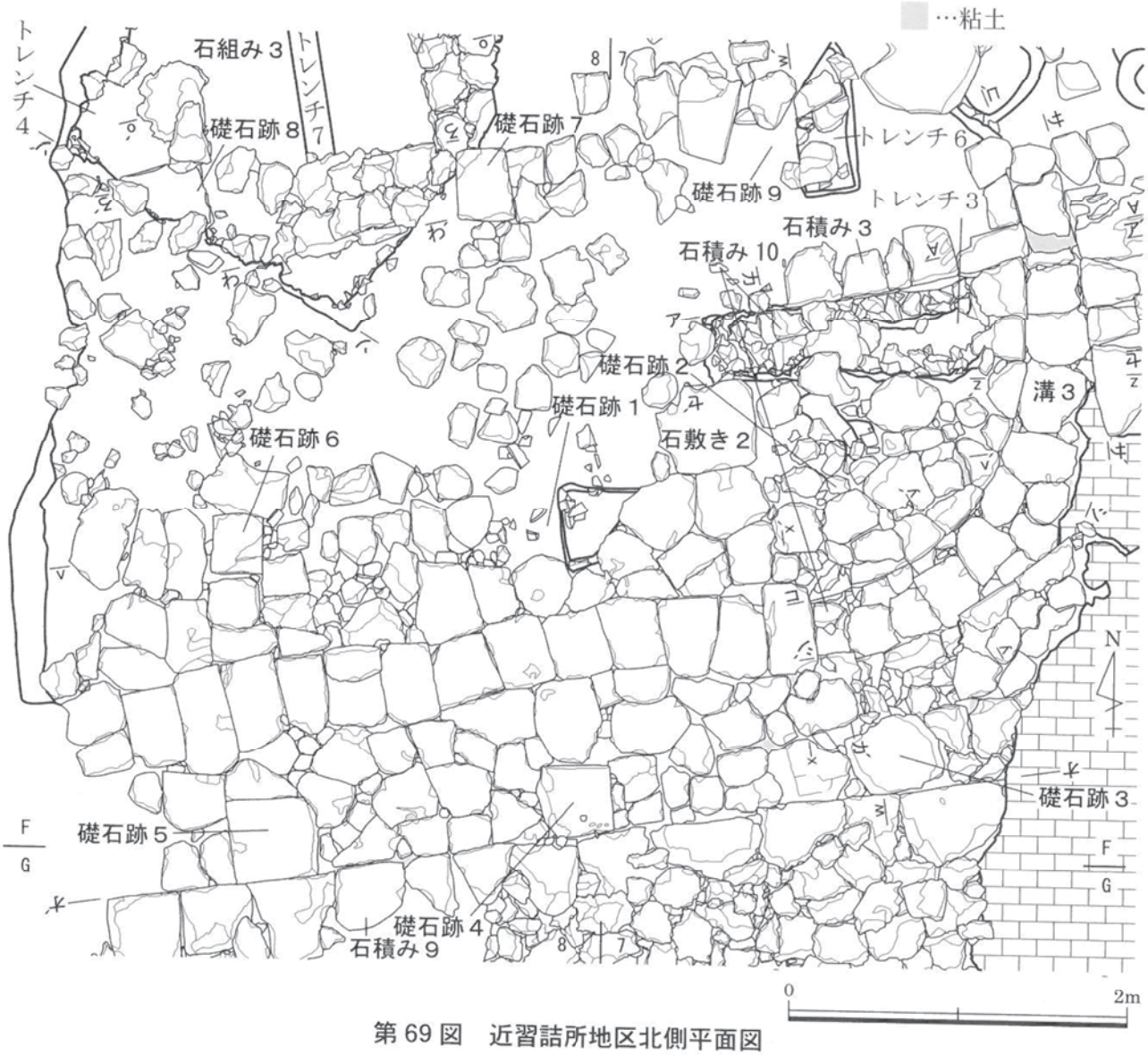
北端を石積み3、南端を石積み9、東端を岩盤に囲まれた範囲にある石敷きである。使われている板状の石灰岩は大小様々で、溝3が通る部分は溝の蓋を兼ねている。



第68図　石敷き2出土遺物

図版74　石敷き2と礎石（北東から）

図版 75　石敷き 2（東から）

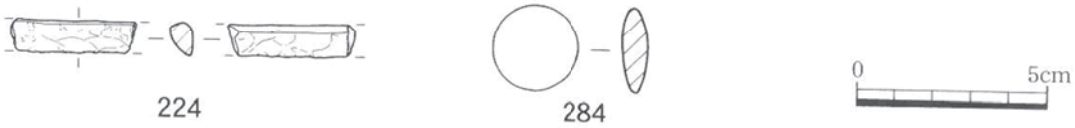


第69図　近習詰所地区北側平面図

3　石積み1（G－7・8グリッド　第70・71・74図　図版76～78・161・163・164）

北側に面を持ち、東西方向に走る石積みである。東側は石積み6にぶつかり、西側は階段2付近まで延びている。天端は残っておらず、根石は確認していない。すぐ後方には石灰岩の岩盤が確認できる。

第70図　石積み1　南壁立面図

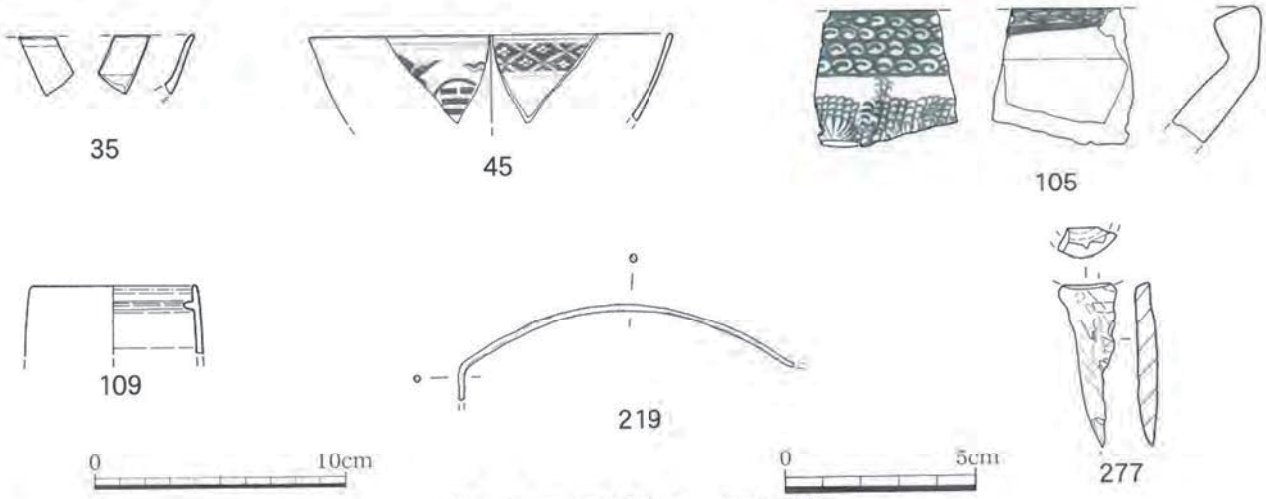


第71図　石積み1　出土遺物

4　石積み２（G－７・８グリッド　第72～74図　図版76～78・160～164）

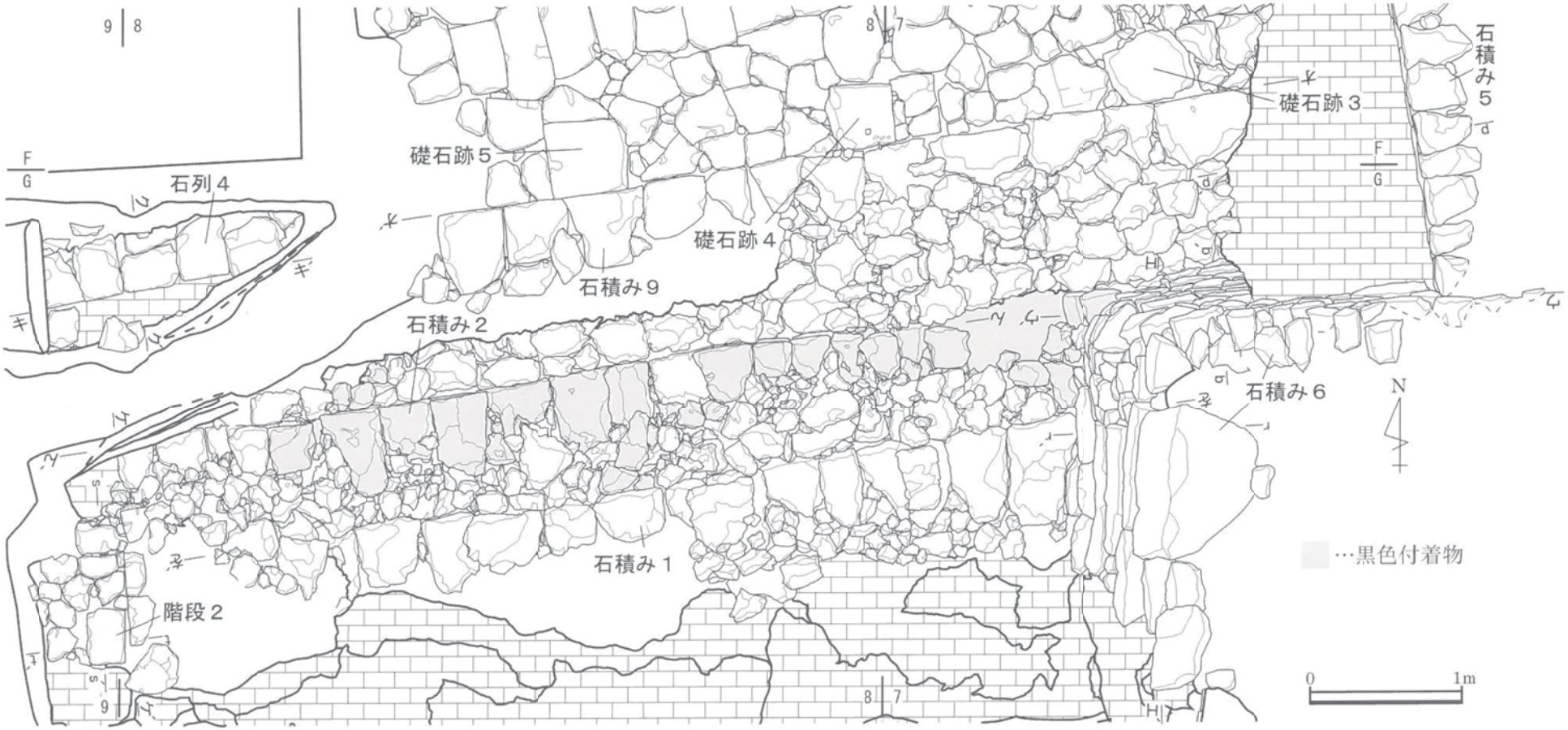
北側に面を持ち、東西方向に走る相方積みの石積みである。東側は石積み６と一体となる。

第72図　石積み２　南壁立面図

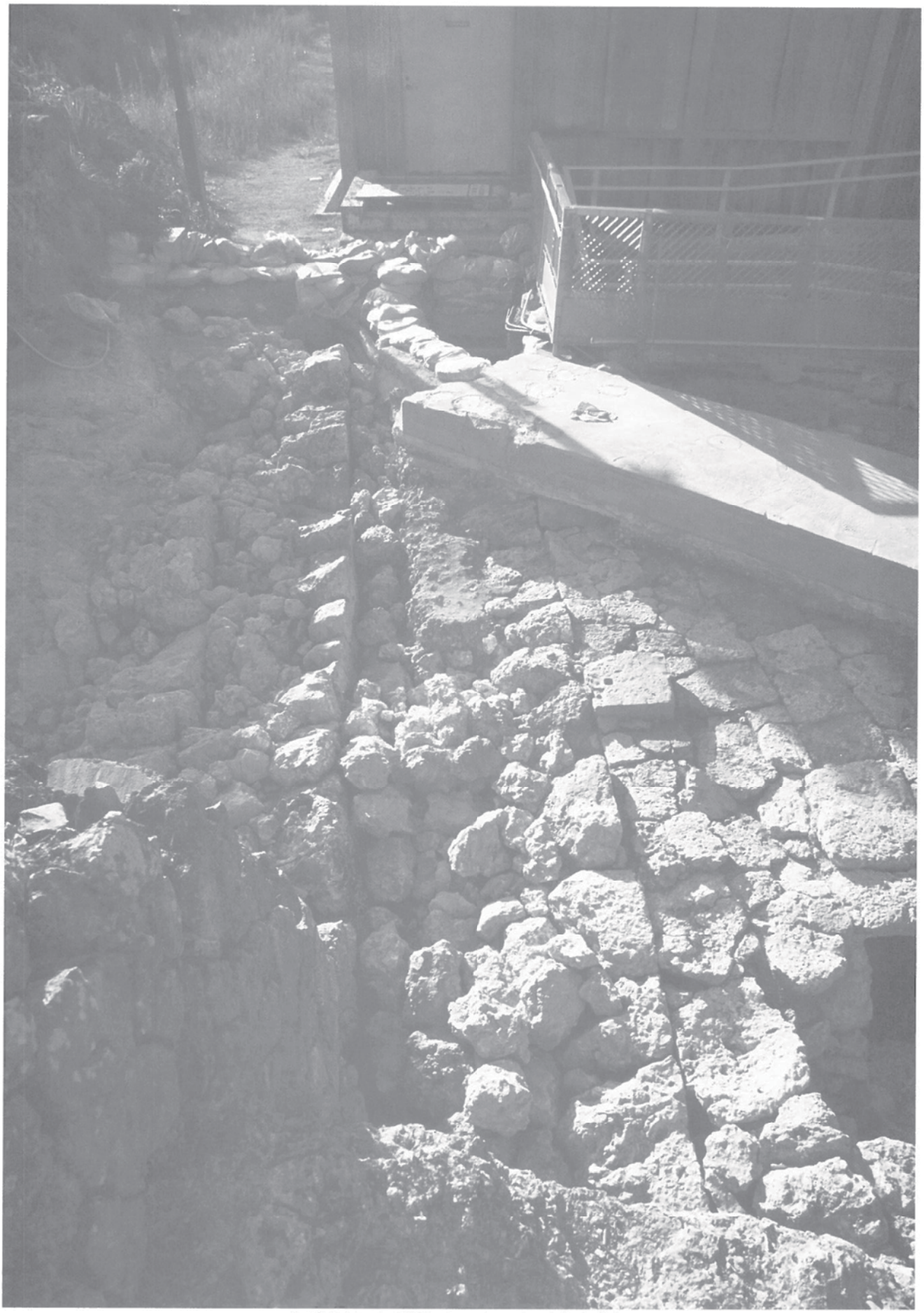


第73図　石積み２　出土遺物

図版76　石積み１・２（西から）



第 74 図　近習詰所地区南側平面図

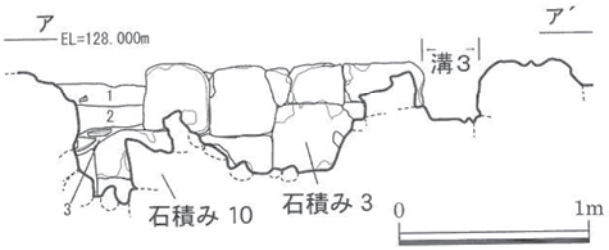


図版 77　石積み 1・2・9（東から）

図版 78　石積み 1・2・5・6 ・9（西から）

5　石積み３（Ｆ－７グリッド　第74・75図　図版79）

南側に面を持ち、東西方向に走る布積みの石積みである。東端は溝３の側壁を成している。検出当初は１段の石列かと思われたが、トレンチ３を設定して掘り下げた結果、複数段の石積みであることが判明した。天端は残っているようであるが、西端は整っていない。また石積み３の前面を覆っている土の上に近習詰所の礎石跡があることから、石積み３が使われなくなったあと、近習詰所の礎石が置かれたという変遷が想定できる。



第75図　石積み３　北壁立面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
75	1	暗褐色	10YR3/3	12	粘質土。	※第97図の1・2・3層と同じ。(2層は砂礫層)
	2	明黄褐色	10YR7/6	12	－	
	3	暗褐色	10YR3/3	4-10	粘質土。	

図版79　石積み３（南から）

6　**石積み4**（F－7グリッド　第6図）

西側に面を持ち、南北に走る石積みである。平成9年度の二階殿地区発掘調査で検出された遺構である。

7　**石積み5**（F・G－7グリッド　第76・79図　図版80）

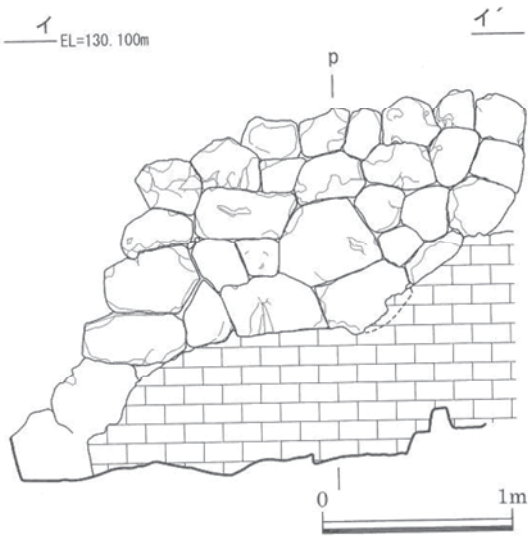
西側に面を持ち、南北方向に走る石積みである。南端は石積み6に接している。露出した岩盤の上に造られている。相方積みで、北側と天端は残っていない。

図版80　石積み5・6（東から）

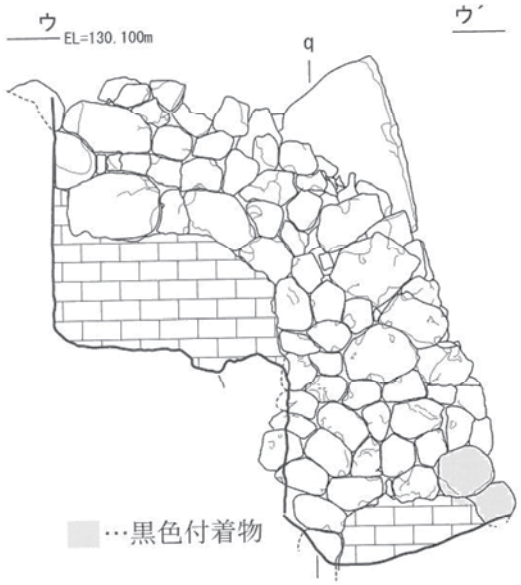
8　石積み６（Ｇ－７グリッド　第74・77・78・80図　図版80・81・163）

北側・西側に面を持つ石積みである。北側の石積みは、一部岩盤を利用しながら積んだ相方積みで、その下部は石積み２と連続している。西側の石積みは相方積みと布積みの部分があり、左右にはっきりと分かれていることから、積み直しをした痕跡といえる。またこの石積みの下部には石積み１が取り付き、同じく南側については近代以降に積まれた相方積みの石積みが接続している。

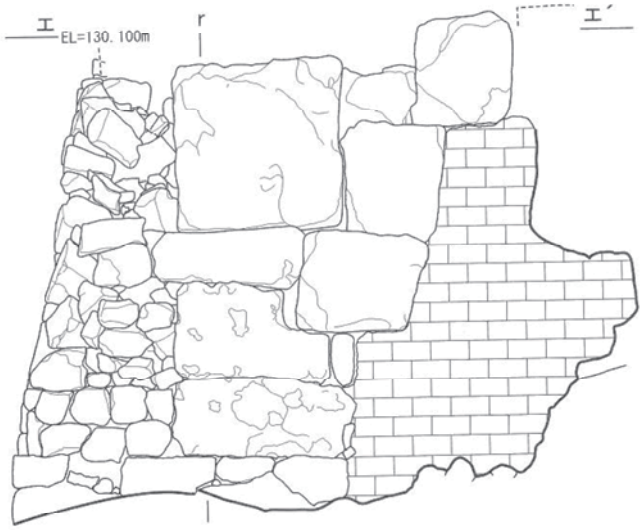
以上のような各遺構の構造からその変遷を推測してみると、石積み２とそれに連続する石積み６（北側部分）があり、石積み２が廃棄され石積み６（西側）が新たに造られ、石積み１が取り付く、という流れになる。



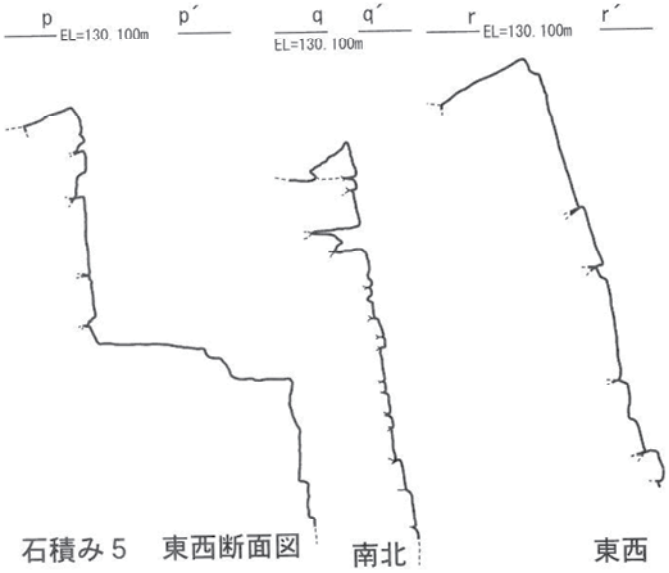
第76図　石積み５　東壁立面図



第77図　石積み６　南壁立面図



第78図　石積み６　東壁立面図



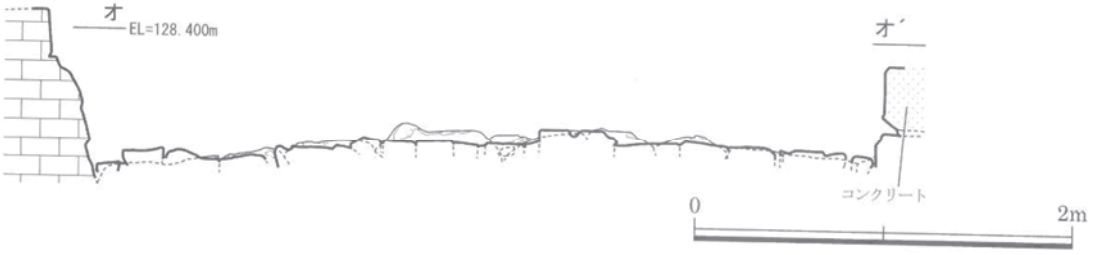
第79図　石積み５　東西断面図

第80図　石積み６　断面図

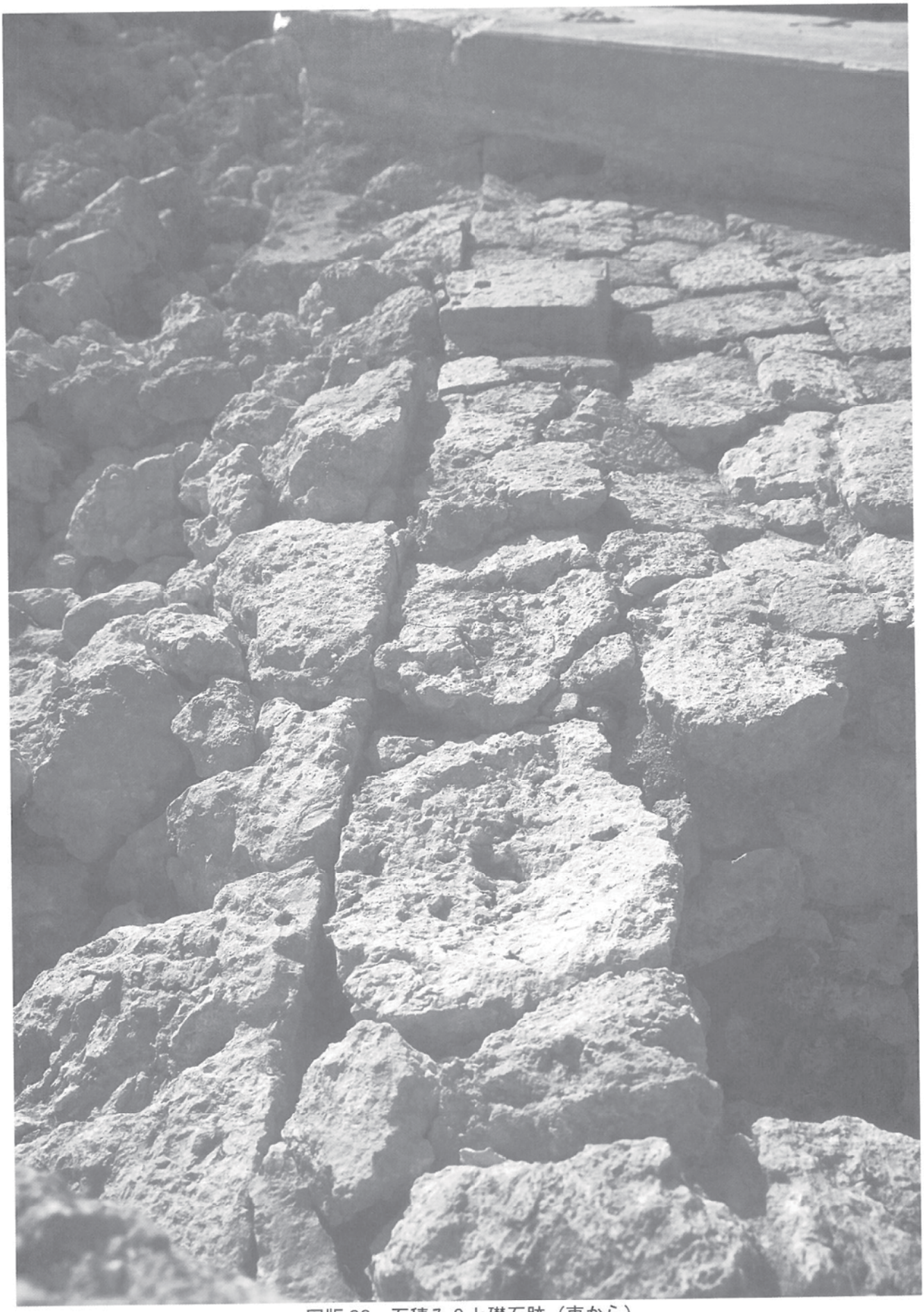
図版81　石積み6（北から）

9　石積み9（F・G－7・8グリッド　第74・81図　図版83・84・164）

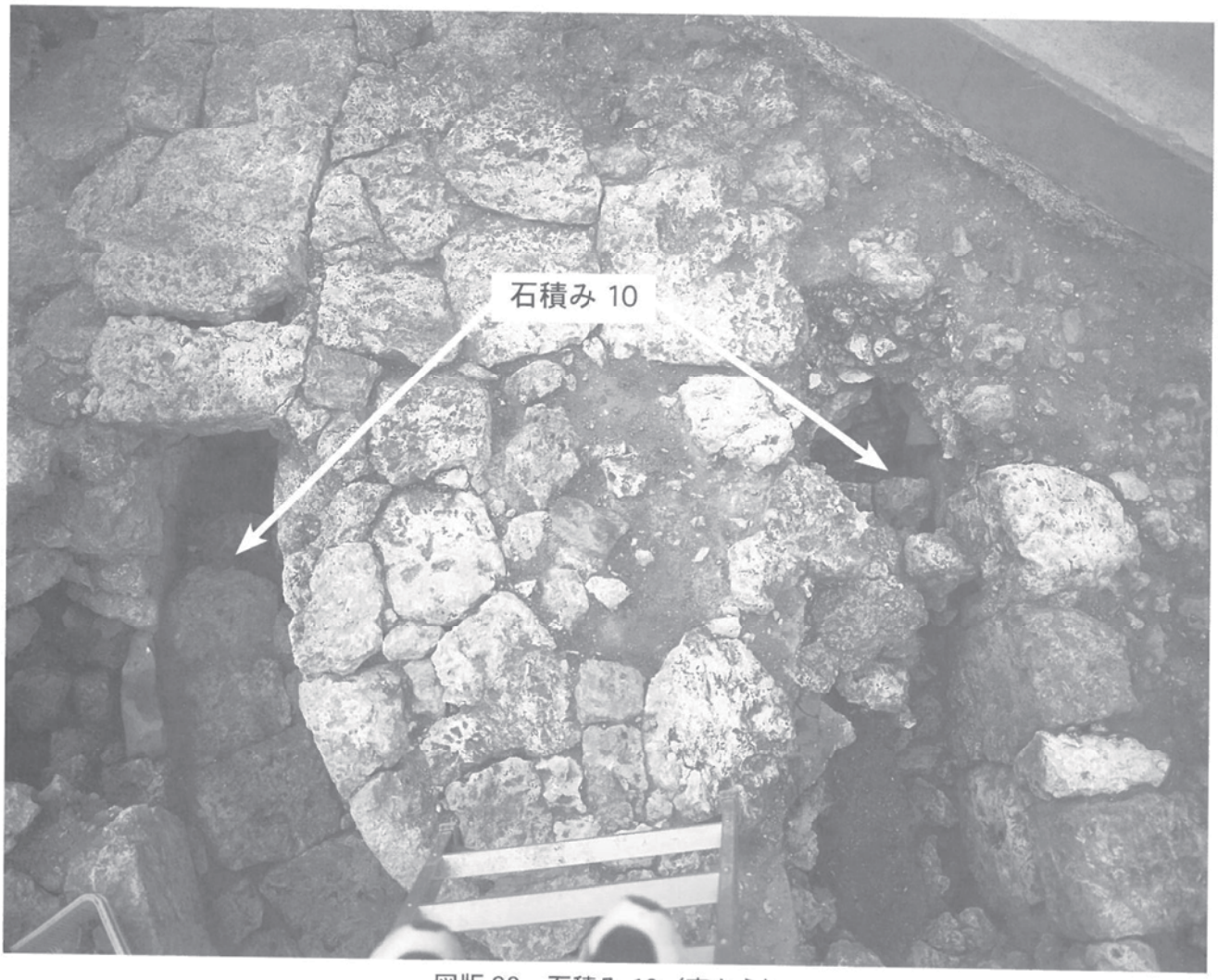
北側に面を持ち、東西に走る石積みである。東端は石灰岩の岩盤に取り付く。この石積みの北側に接するようにして近習詰所の礎石が並んでいることから、礎石を置く際、石積み9を意識して置いたことが考えられる。



第81図　石積み9　南壁立面図



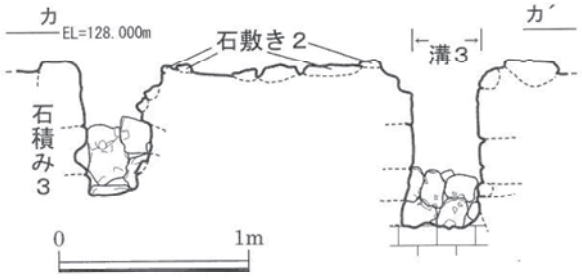
図版 82　石積み 9 と礎石跡（東から）



図版 83　石積み 10（東から）

10 石積み 10（F－7グリッド　第 69・82 図　図版 83・84）

西側に面を持ち、南北に走る石積みである。北端は石積み 3 に取り付く。石敷き 2 に埋め殺されており、南端は溝 3 の南側壁に取り付くようである。

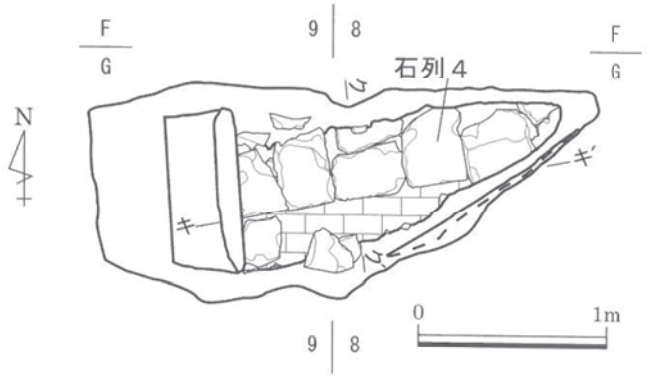


第 82 図　石積み 10　東壁立面図

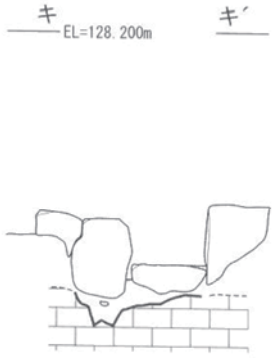
図版 84　石積み 10（西から）

11　石列4（G－8・9グリッド　第74・83～86図　図版85・86・165・166）

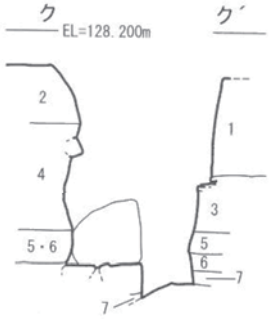
南側に面を持ち、東西に走る石積みである。根石部分のみ残っている。石の形状から布積みによる石積みであったと考えられる。



第83図　石列4　平面図

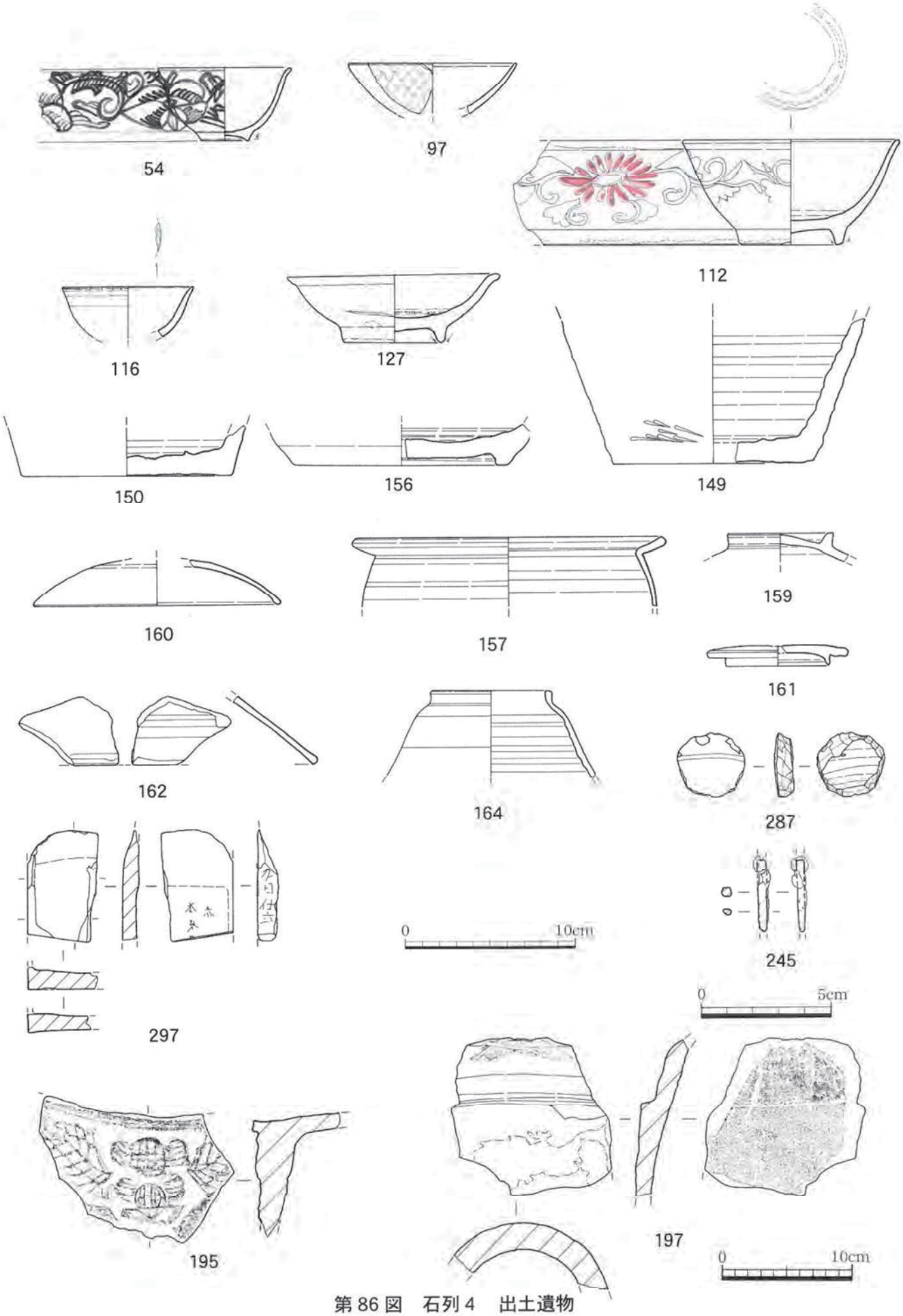


第84図　石列4　北壁立面図



第85図　石列4　南北立面図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
85	1	橙色 (土の部分)	－	50	土と砂から成る。	電気ｹｰﾌﾞﾙ埋設時の客土。
	2	橙色	－	30	－	客土。
	3	明黄褐色	－	30	粘質で瓦を多量に含む。	
	4	黄褐色	－	58	砂質	砂礫土。3層と同一層か？
	5	黒色	－	11	粘質でｶﾞﾗｽ、瓦、炭を含む。	
	6	黒褐色	－	8	粘質土。	
	7	黄褐色	－	6	砂質で石灰岩小礫を含む。	石列4の下にも堆積。



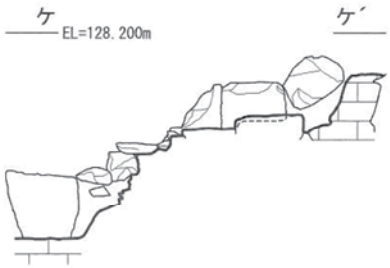
第 86 図　石列 4　出土遺物

図版 85　石列 4 検出途中状況（南から）

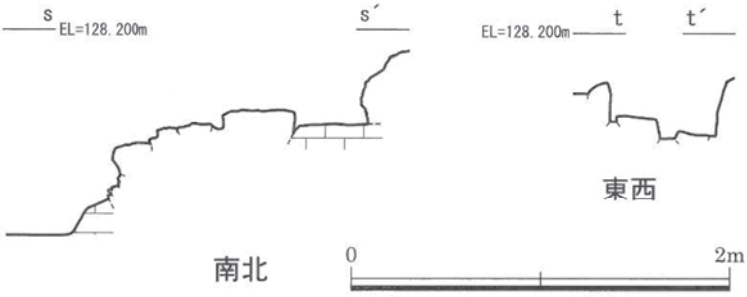
図版 86　石列 4 （南から）

12　階段2（G－8グリッド　第74・87・88図　図版87）

東側に向かってのぼる階段である。上り口には長方形の石を一枚置いてステップとしている。階段は一部岩盤を整形して利用しながら造られている。南殿地区の調査の際に検出されていた遺構で、その際の遺構名称は「STW4」である。



第87図　階段2　東壁立面図



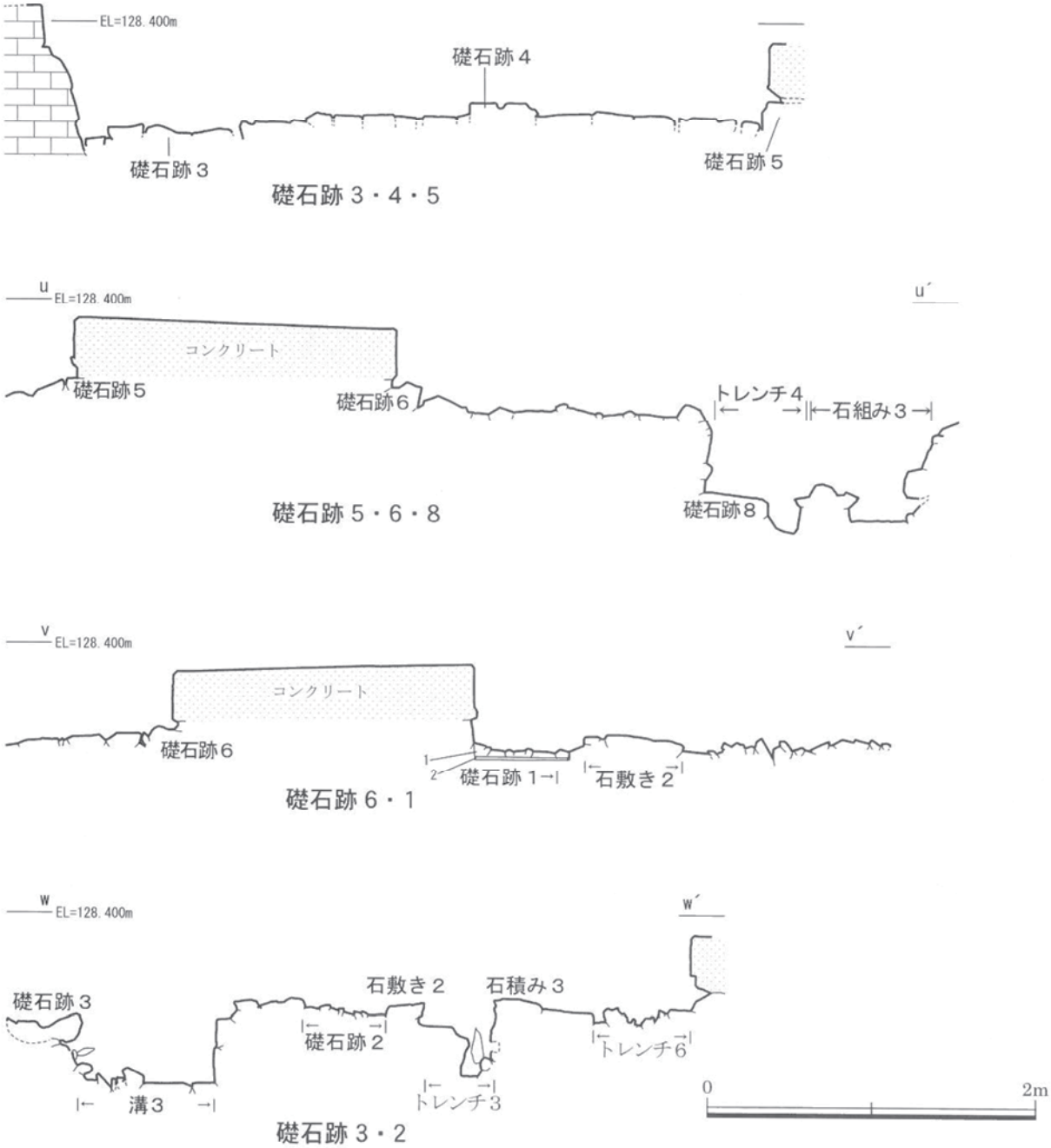
第88図　階段2　断面図

図版87　階段2（北西から）

13　礎石跡１～９（Ｆ－７・８グリッド　第69・89図　図版88～92・167・168）

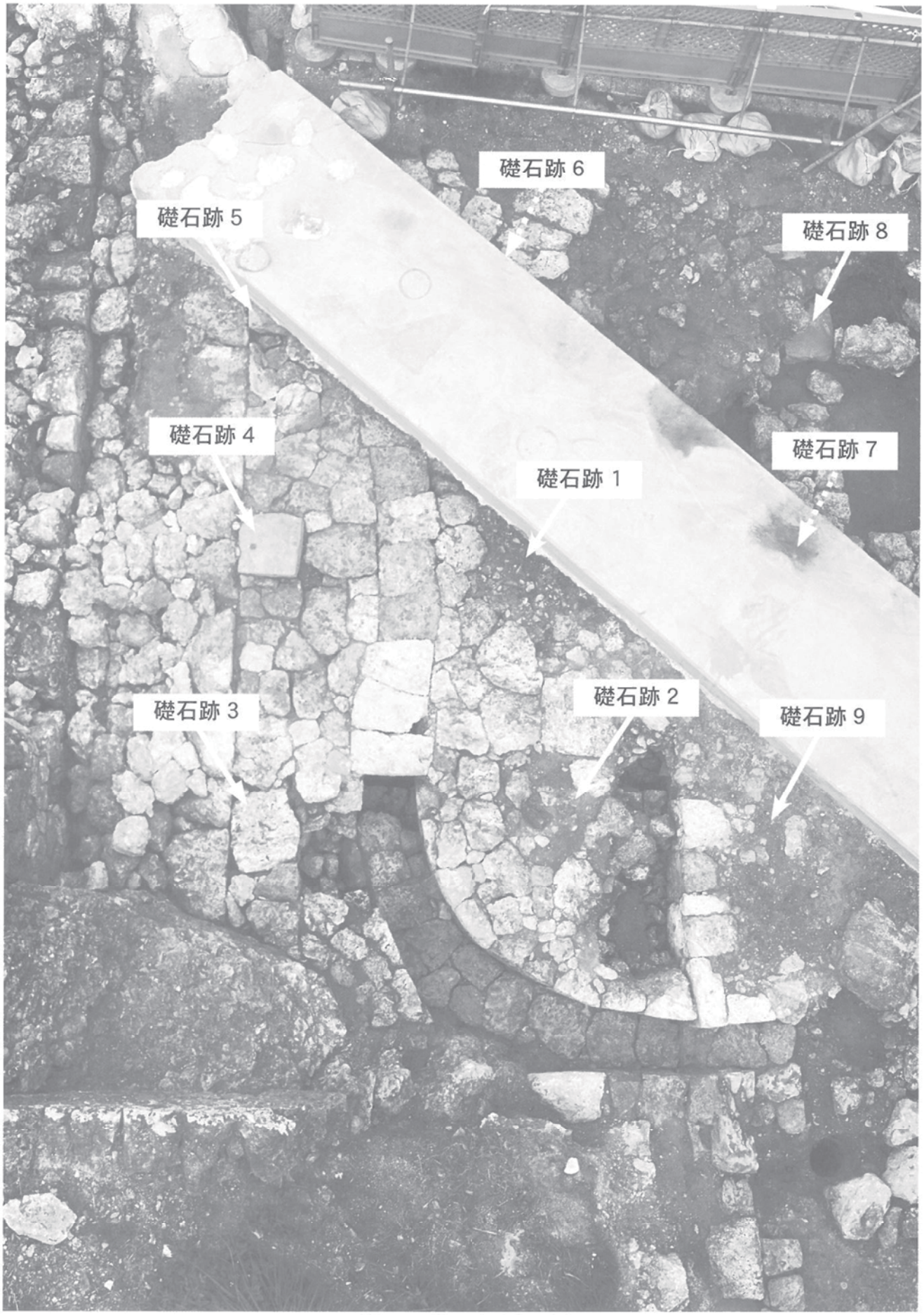
近習詰所のものと考えられる礎石跡である。礎石跡４・５には細粒砂岩、礎石跡６には琉球石灰岩で造られた礎石が残っている。東西２間、南北２間で、１間あたりの間隔は約1.8ｍである。

礎石跡８はトレンチ７を設定して掘り下げた際に検出したが、他の礎石に比べ位置が低く、原位置を保っていない可能性もあり問題が残る。



第89図　礎石跡１～９断面図

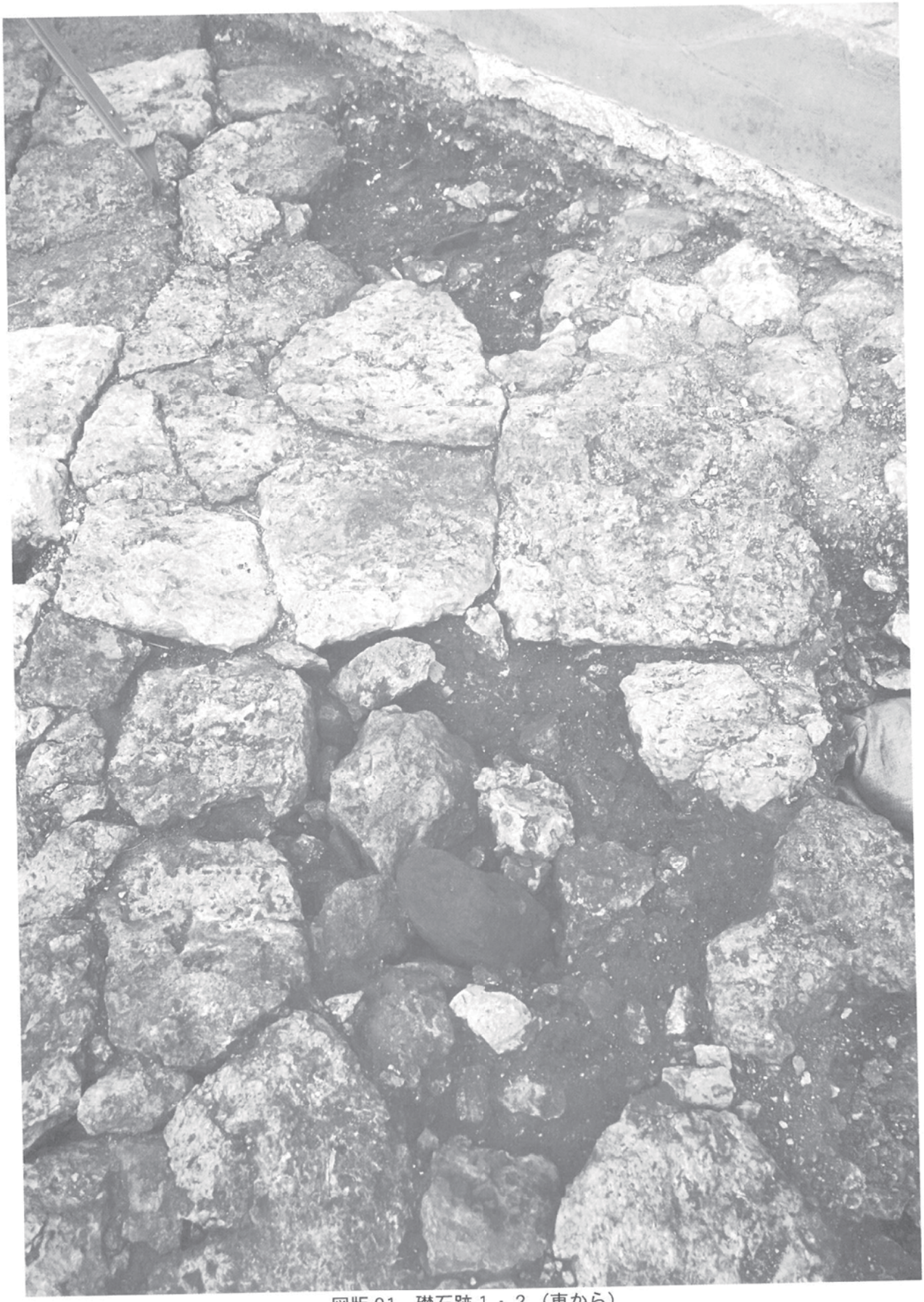
図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
89	1	黒褐色	10YR3/2	2-4	粘質で近現代磁器、ｶﾞﾗｽ、赤瓦、沖施（白化粧＋黒釉の大鉢）、漆喰含む。	礎石抜き取り後の客土と考えられる。
	2	暗褐色	10YR3/3	2	粘質で赤瓦、黒瓦、沖施（按瓶の取っ手）を含む。橙色粘土を少し含む。	



図版 88　礎石跡（東から）

図版 89　礎石跡 4（東から）

図版 90　礎石跡 6（北から）



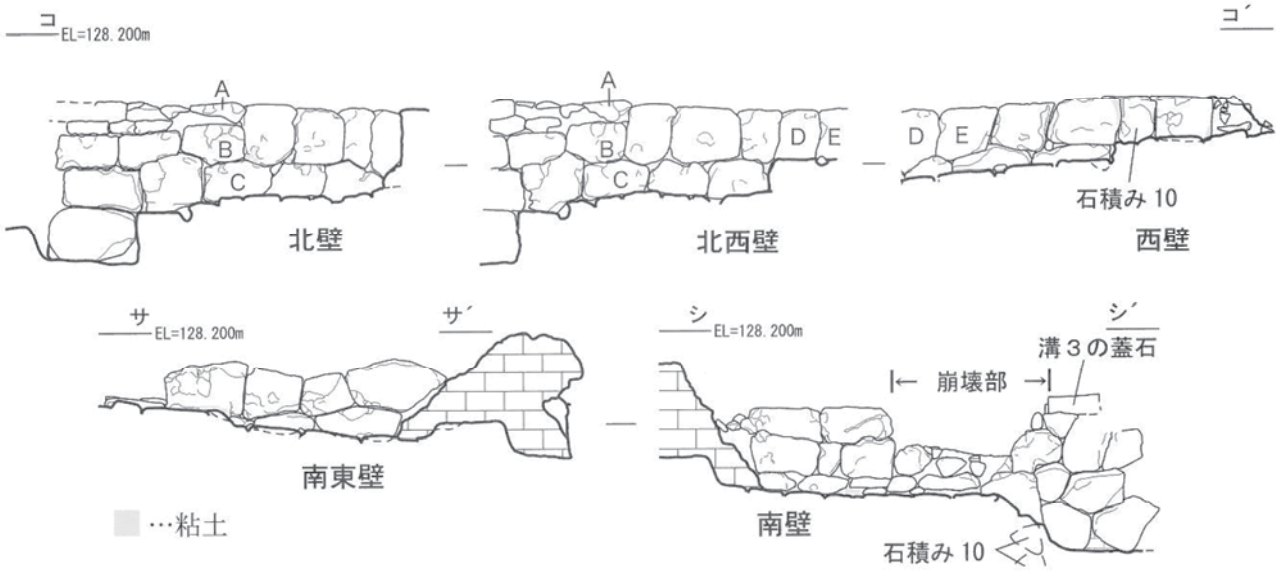
図版 91　礎石跡 1・2（東から）

図版 92　礎石跡４検出作業状況（北から）

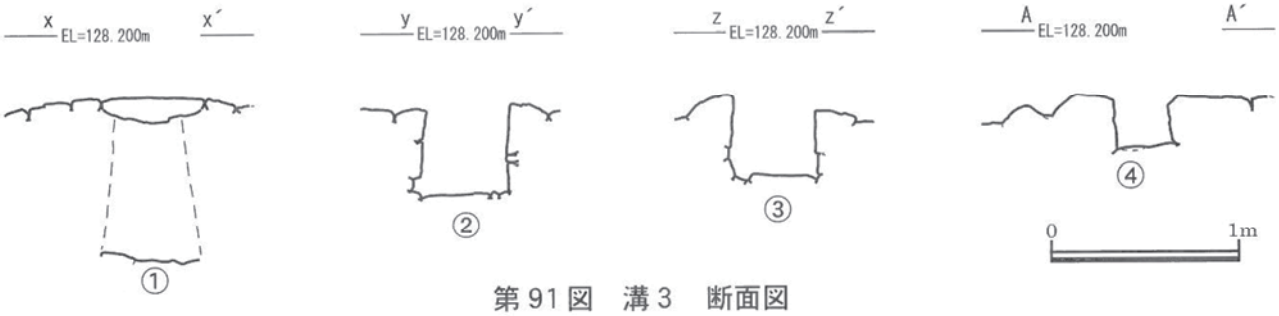
１４　溝３（Ｆ－７・８グリッド　第 69・90 ～93図　図版 93 ～ 97・169 ～ 175）

底部と両側壁を石で囲った溝であり、西側部分は石灰岩の蓋をかぶせている。溝内の石の目地には、橙色でシルト質の土が入り込んでいる部分が数ヶ所で確認できた。この土については一部をサンプリングし、分析を行った。

溝を検出する際、溝の中部から大量の瓦とともに、ガラス片やプラスチック製の三角定規なども出土した。



第 90 図　溝 3　立面図



第 91 図　溝 3　断面図

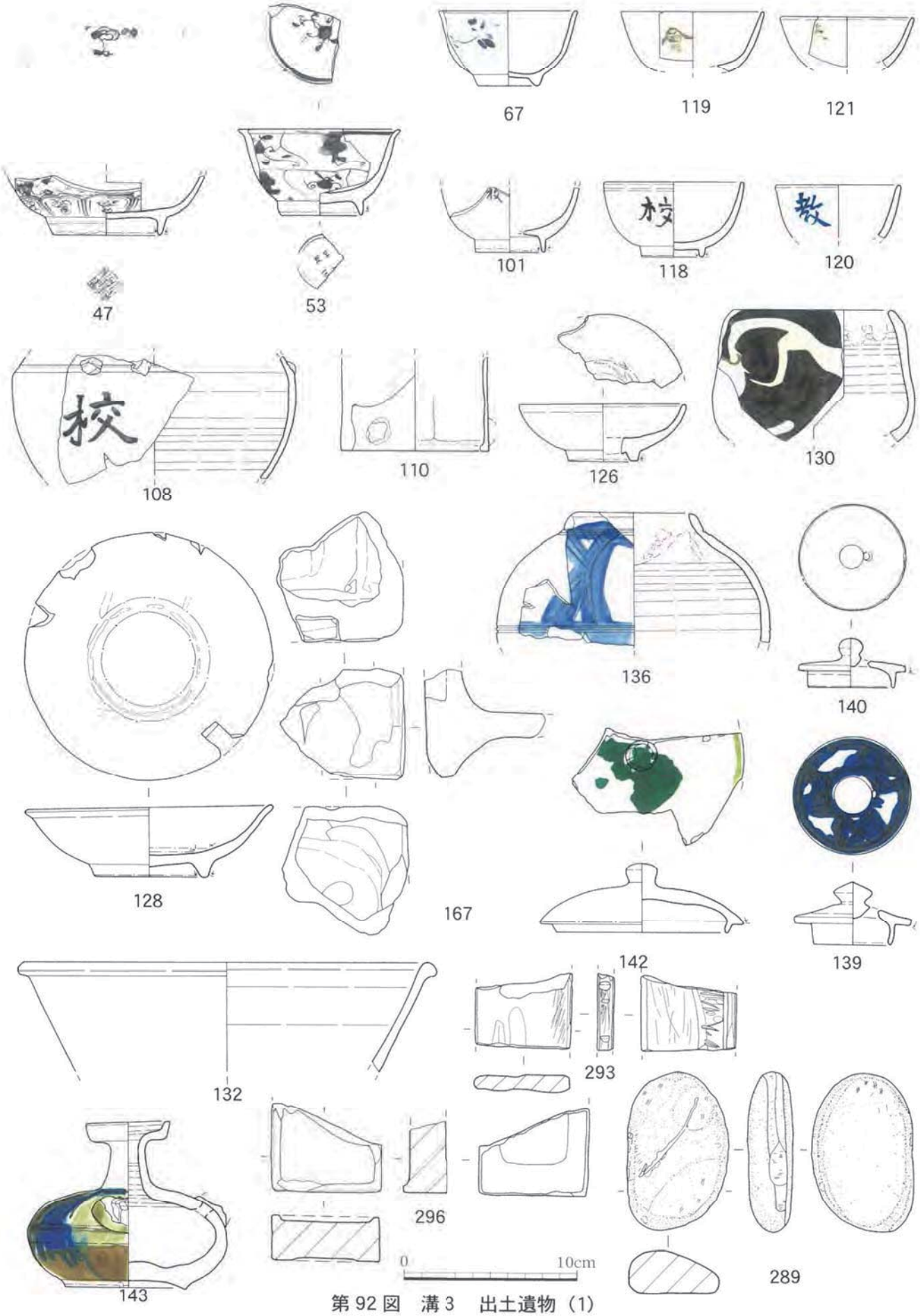
図版 93　溝 3（東から）

図版 94　溝 3 検出途中状況（東から）

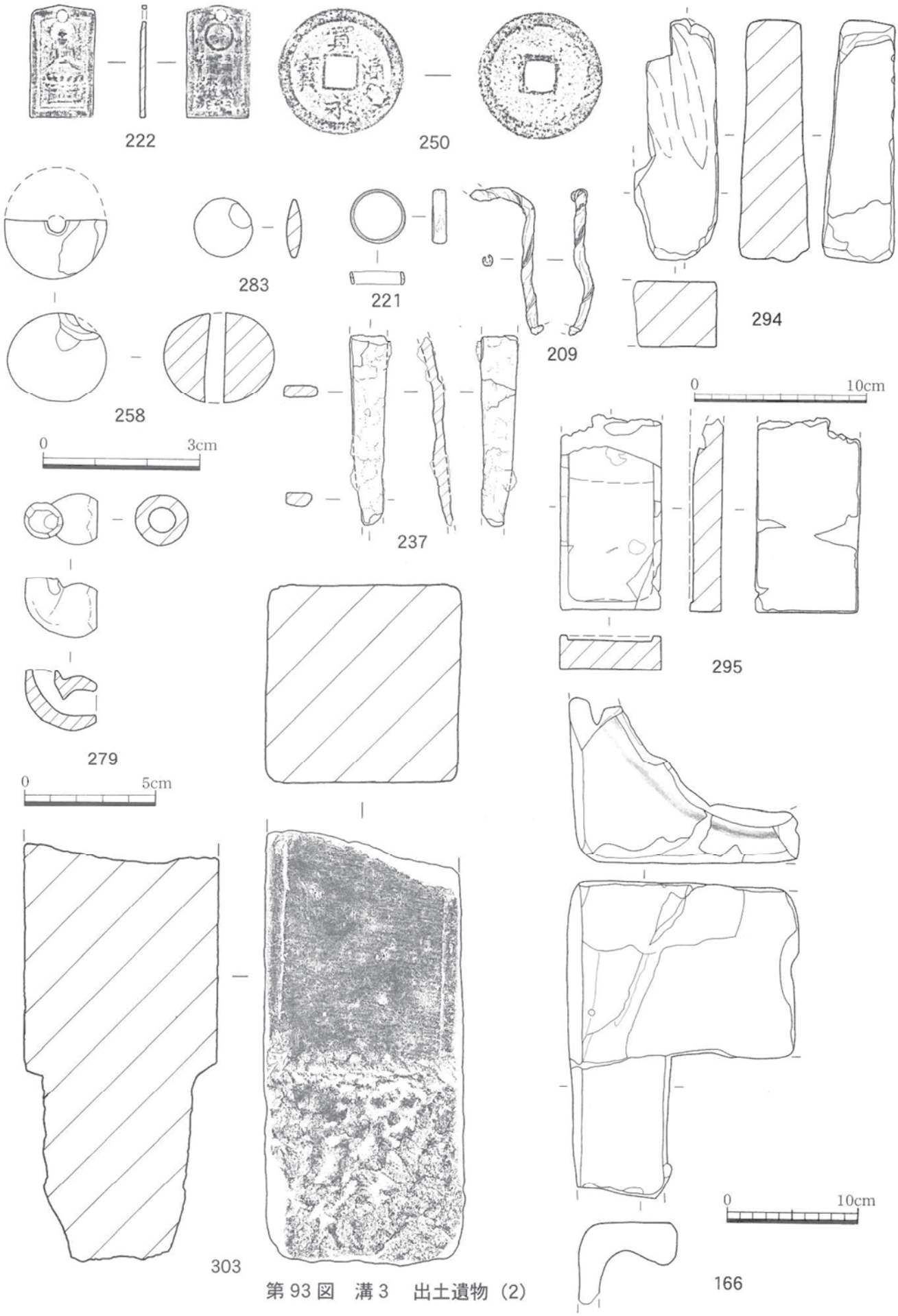
図版 95　溝 3 検出途中状況（北から）

図版 96　溝 3 検出途中状況（東から）

図版 97　溝 3 検出途中状況（北西から）



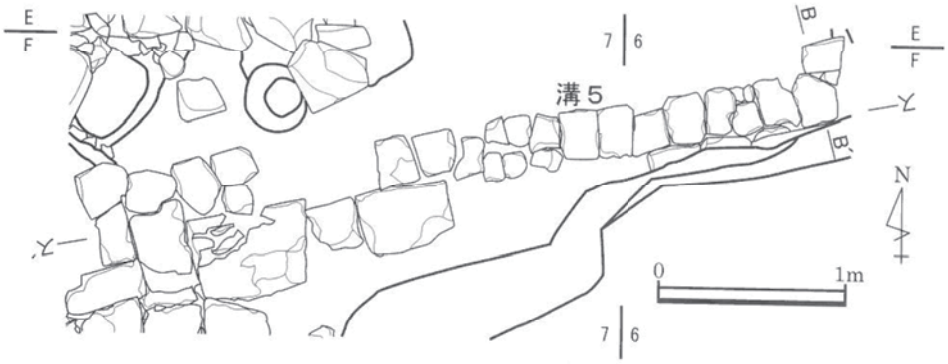
第92図　溝3　出土遺物（1）



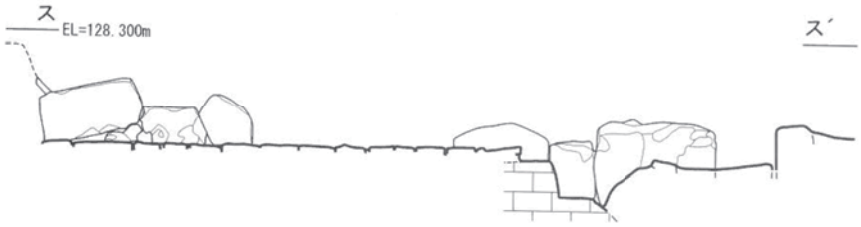
第93図　溝3　出土遺物（2）

15　溝5（F－6・7グリッド　第94～96図　図版98・99）

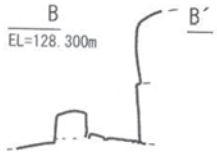
底面と両側壁を石灰岩で造った溝である。西端は溝3に連結する。平成9年度の二階殿地区の調査で検出されていた遺構でそのときの遺構名称は「SD1」である。



第94図　溝5　平面図



第95図　溝5　南壁立面図



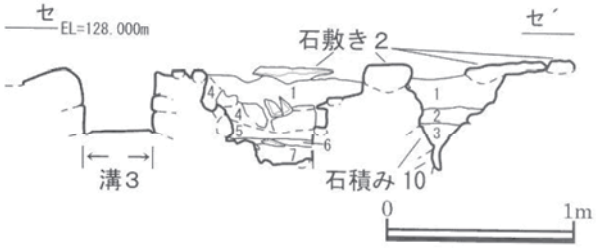
第96図　溝5　南北断面図

図版98　溝5（北から）

図版 99　溝 5（西から）

16　トレンチ３（Ｆ－７グリッド　第97・98図　図版100・101）

石積み３の南側に設定したトレンチである。

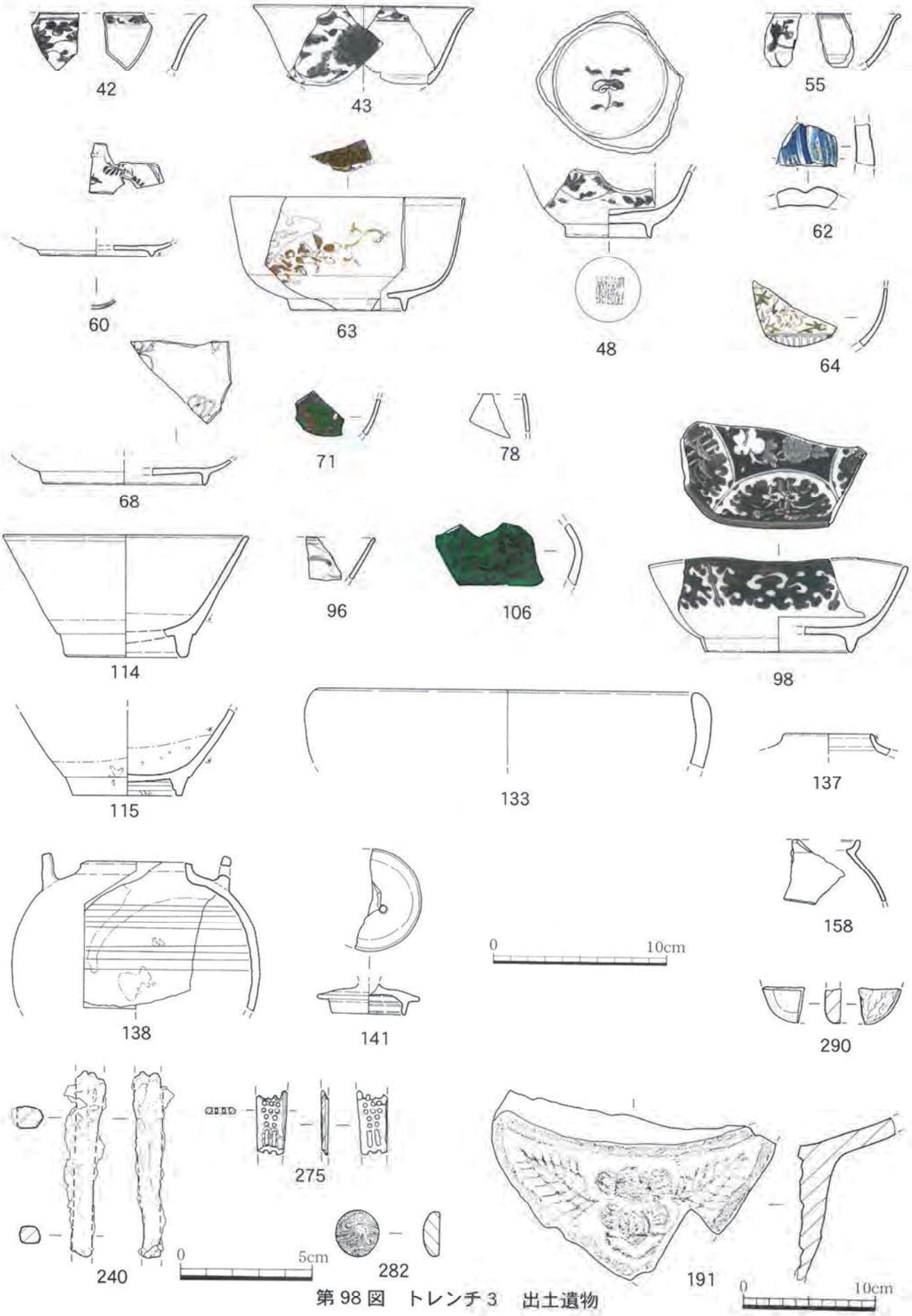


第97図　トレンチ３　南壁土層図

図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
97	1	暗褐色	10YR3/3	6-16	粘質で石灰岩小礫、赤瓦、木炭、焼土、焼石片を含む。	
	2	明黄褐色	10YR7/6	8	－	※砂礫層。
	3	暗褐色	10YR3/3	6-22	粘質で赤瓦、木炭を含む。	
	4	－	－	2-10	20cm前後の石灰岩礫多い。溝3のすぐ後ろでは、2cm前後の礫を多く含む。	※礫層。
	5	黒褐色	2.5Y3/2	4-8	砂質で炭を少量含む。	
	6	黒褐色	2.5Y3/1	3	粘質で炭を多く含む。赤瓦を含む。	石積み10の上面、裏込を覆う。
	7	暗灰黄色	2.5Y4/2	10	粘質で赤瓦、黒瓦、染付を含む。炭を少し含む。	6層よりも粘質が弱い。

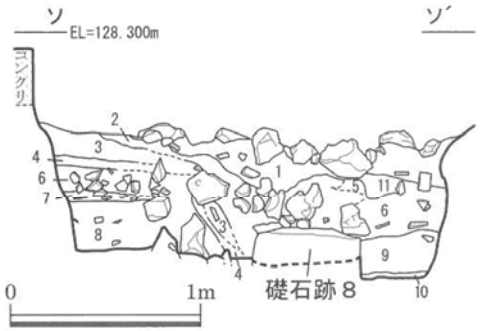
図版100　トレンチ３（北から）

図版 101　トレンチ 3（西から）



第 98 図　トレンチ 3　出土遺物

17 トレンチ4（F－8グリッド　第63・99・100図　図版102～104・176・177）



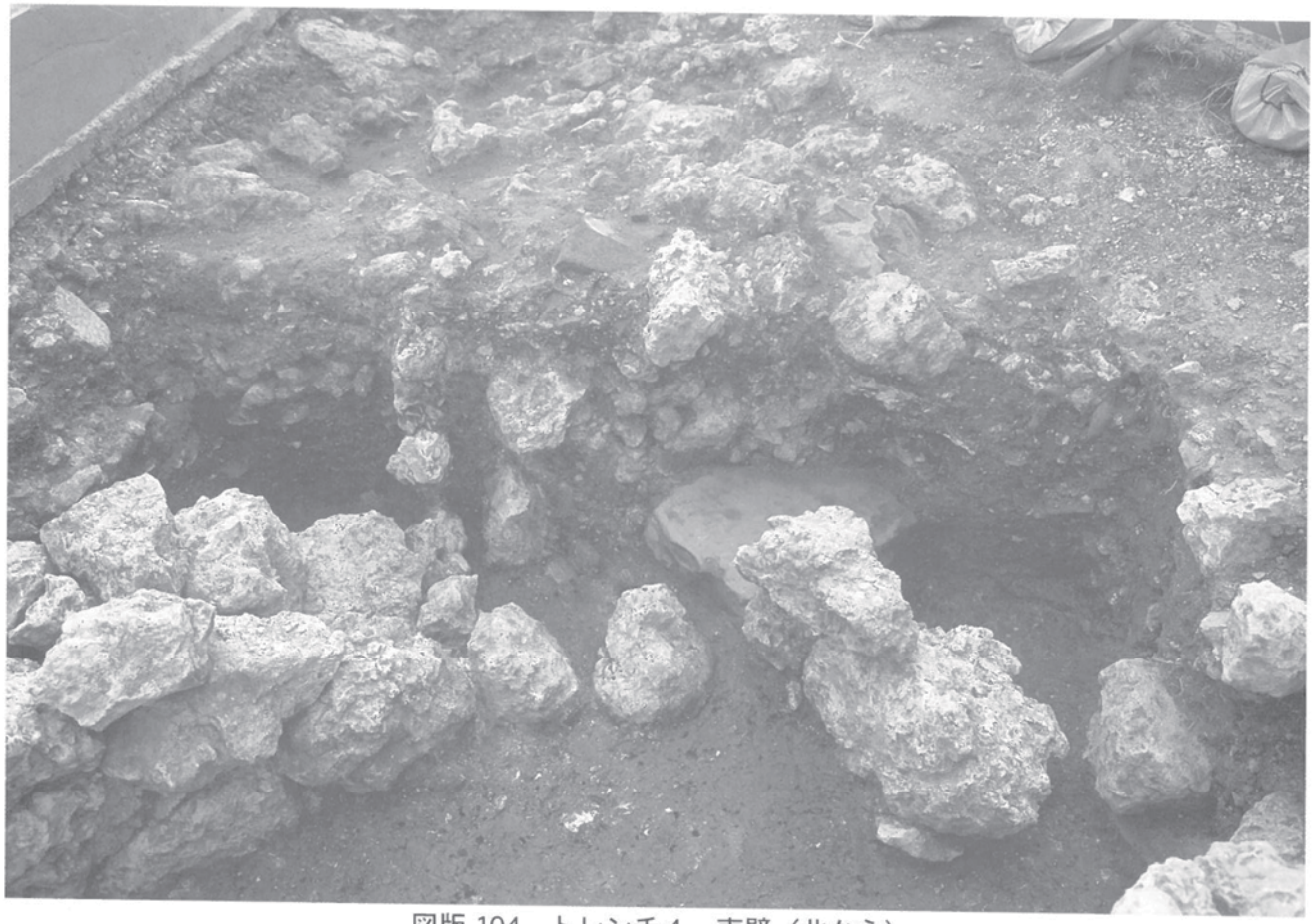
第99図　トレンチ4　南西壁土層図

近習詰所地区の下層を調べるために設定した。その結果、黒褐色系統の粘質土が堆積していることがわかった。また、砂岩製の礎石跡を新たに検出した。

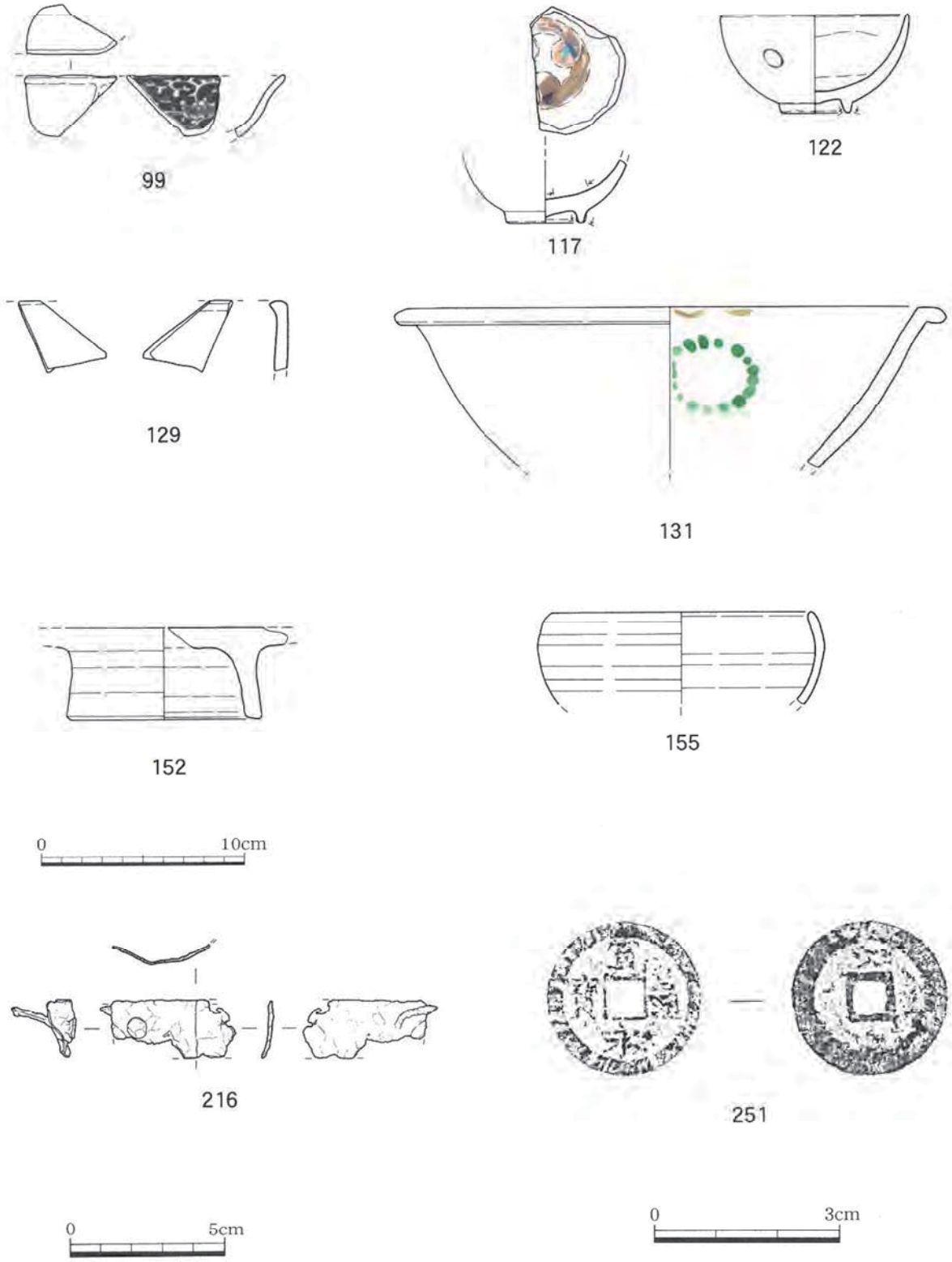
図番号	層序	色調		層厚さ(cm)	土質・混入物	備考
99	1	黒褐色	2.5Y3/1	6-25	粘質で石灰岩小礫を少し含む。	
	2	－	－	6-38?	－	砂礫層。
	3	－	－	3→7-13 3′→12	粘質で石灰岩小礫、木炭を少し含む。 (3′には瓦が含まれる。)	石積み3の上面を覆う。
	4	－	－	4-6	－	砂礫層。
	5	黒褐色	10YR3/2	6	粘質で木炭、橙色土(焼土?)を少し含む。	
	6	黒褐色	10YR3/2	14-26	粘質で石灰岩中礫を多く含む。	
	7	褐色	10YR4/4	2-6	粘質で木炭を少し含む。赤瓦を含む。	
	8	黒褐色	10YR3/2	14-40	石灰岩小礫、ｻﾝｺﾞ片、木炭を少し含む。	
	9	黒褐色	10YR3/2	20	粘質で石灰岩小礫を少し、木炭を多く含む。	礎石の下にもぐり込む。
	10	褐色	10YR4/4	2	粘質で木炭、橙色土(焼土?)を少し含む。 焼土を少し含む。	
	11	褐色	7.5YR4/3	12	粘質で砂粒を少し含む。	

図版102　トレンチ4　掘削前状況（南東から）

図版 103　トレンチ 4　掘削中状況（北西から）



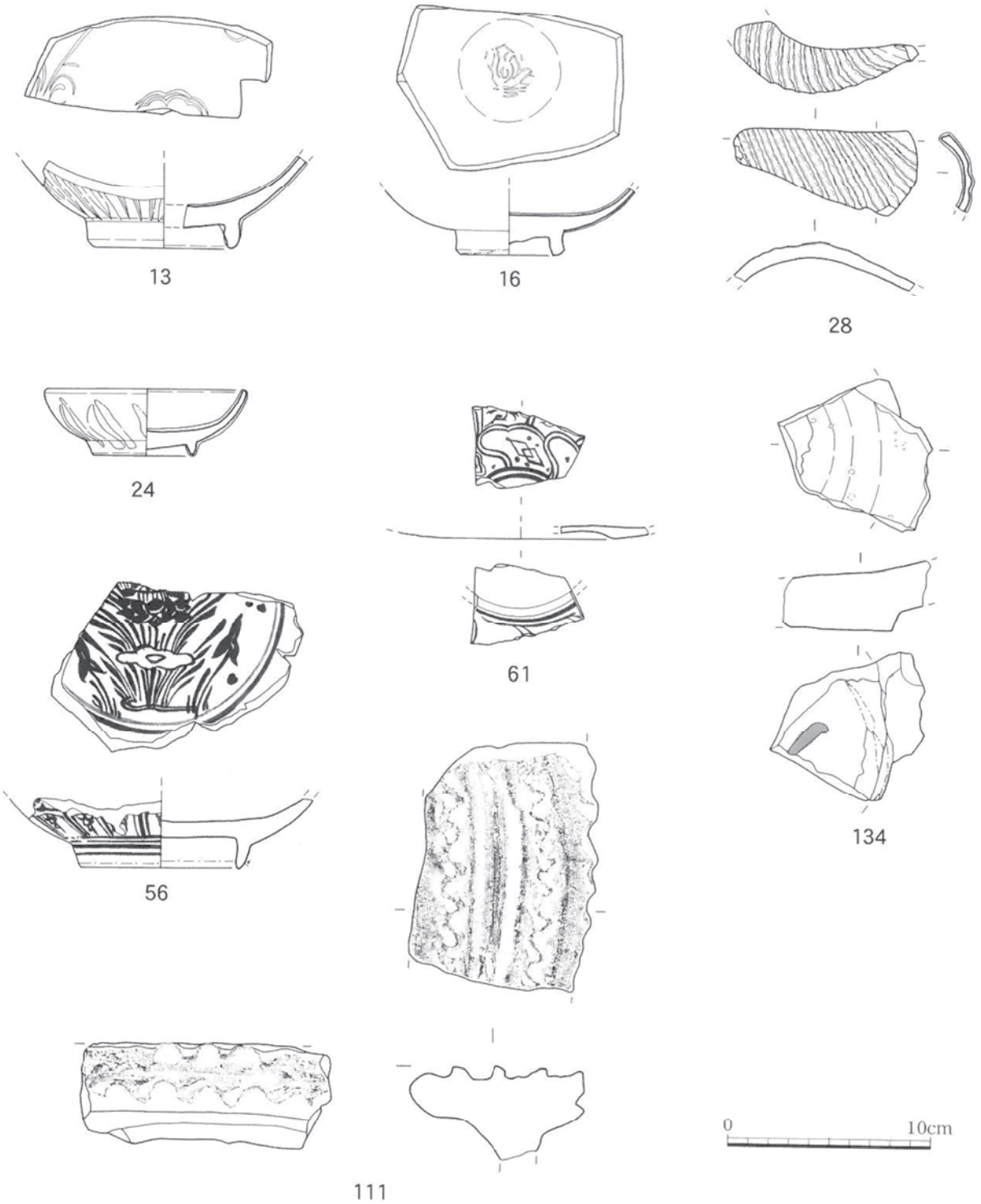
図版 104　トレンチ 4　南壁（北から）



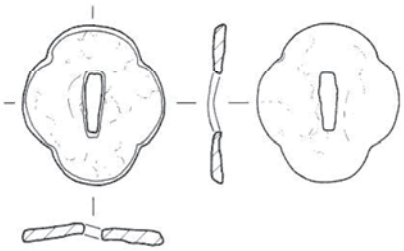
第 100 図　トレンチ 4　出土遺物

第４節　撹乱層等の遺物

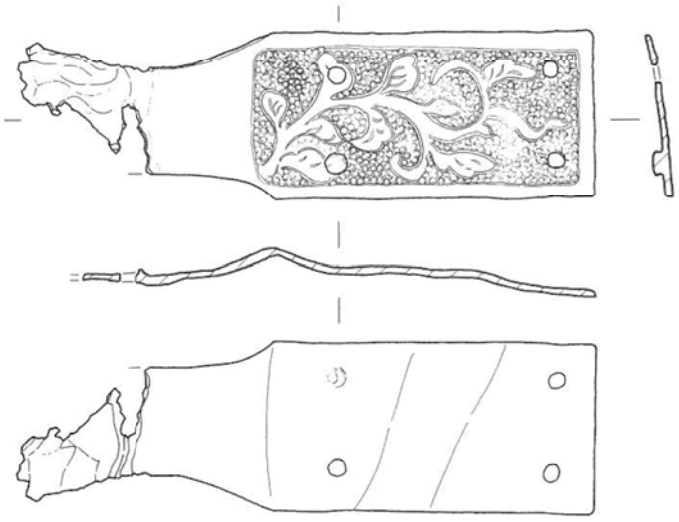
首里城跡の発掘調査で特徴的なこととして、表土・撹乱層からの遺物出土量の多さがあげられる。このことは、この場所での戦災のダメージや造成工事等の多さを物語っている。また、この撹乱層から出土する遺物の種別は、陶磁器類が中心となるが、縄文期の土器・石器から戦時中の砲弾片まで多岐にわたる。ここでは、その中から特徴的な遺物をあげ、図示した。なお、観察表は第５節遺物別概観で解説されているため、ここでは割愛する。

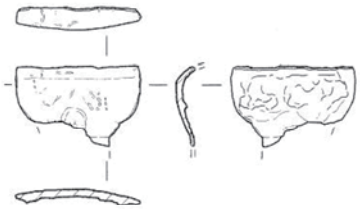


第 101 図　撹乱層等の出土遺物（１）



204

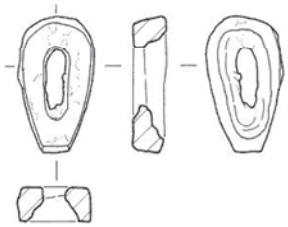




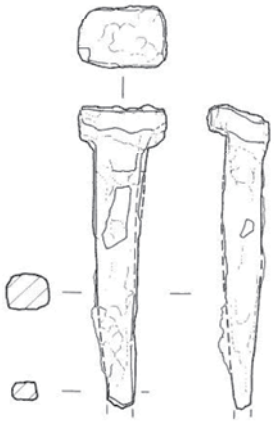
205

200

0 3cm

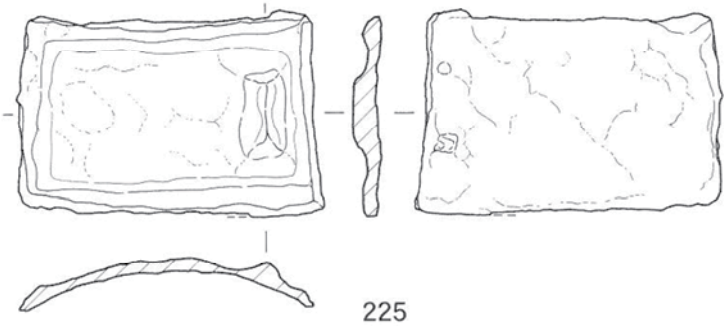


206



238

212



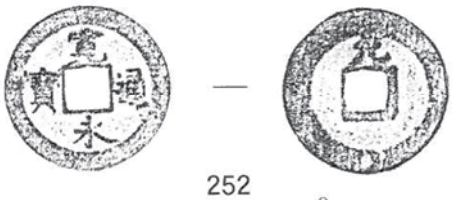
225

0 5cm

198

0 10cm

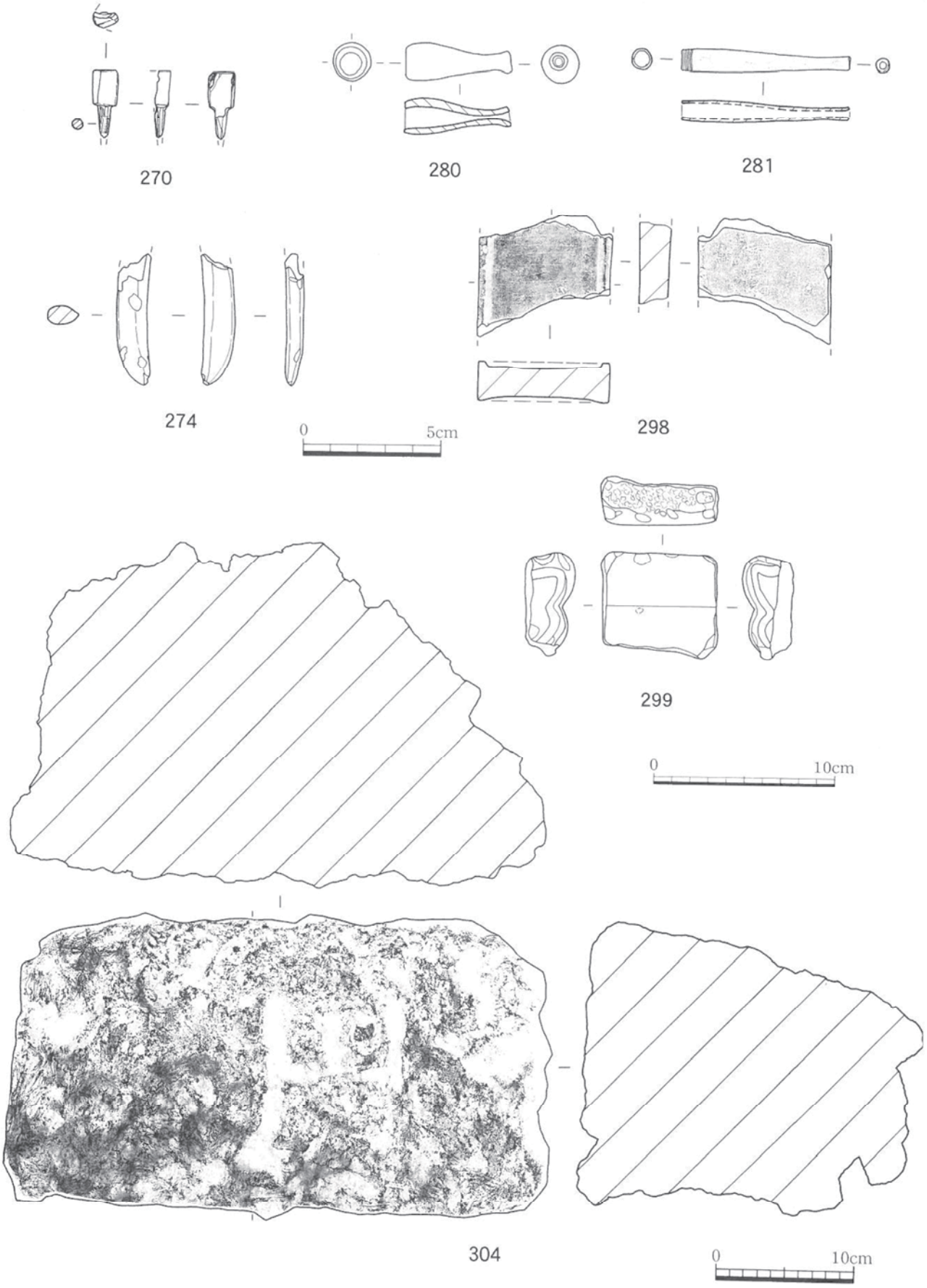
248



252

0 3cm

第 102 図　撹乱層等の出土遺物（2）



第 103 図　撹乱層等の出土遺物（3）

第５節　遺物の種類別概観

１．青磁

青磁は総数で 446 点が得られた。焼成地は中国浙江省南部に所在する龍泉窯産の製品が多数を占め、ごくわずかに福建省南部の泉州窯産の製品も含まれる。器種は碗、鉢、皿、盤のほか、水注、酒会壺蓋、天目台等が得られ、出土陶磁器の中でもバリエーションに富んでいる。中でも 29 の天目台は国内でも報告例が希少な資料で、28 の巻き貝をモチーフとした製品も類例が見あたらない。年代は概ね 14 世紀末から 15 世紀中葉に収まり、15 世紀代の製品が多い。被熱を受けた破片もみられ、火災との関連で興味深い。

２．白磁

白磁は 24 点が得られ、器種は碗、皿等がみられ、焼成地は福建・広東系の製品が多く見られる。時期は 14 世紀後半～ 16 世紀が中心となる。

３．染付

中国産染付は、碗、鉢、皿、杯、瓶等の製品が得られ、確認できた焼成地は、景徳鎮窯、徳化窯、ｼｮｳ州窯、福建・広東系である。年代は、景徳鎮窯製では 15 世紀前半～ 19 世紀、徳化窯製は 18 世紀、ｼｮｳ州窯産は 16 世紀後半～ 17 世紀前半、福建・広東系では 17 世紀末～ 18 世紀前半に位置付けられる。

４．その他の輸入陶磁器

ここでは出土量が希少な陶磁器類をまとめた。ベトナム産染付は型成形の鳥形と思われる製品である。中国産色絵は状態が悪く、ほとんどの資料で上絵の具が剥落した状態であった。中国産白地鉄絵壺は 6 点出土しているが、文様や破片の状態から同一個体と思われる。ほかに彩釉陶器や天目、朱泥等の製品もみられ、首里城で使用されていた陶磁器類の多様性を示している。

５．褐釉陶器・半練土器

褐釉陶器は中国とタイで焼成された製品が得られ、破片の総数から中国産の数量が多い。器種は壺がほとんどで、その他中国産の中に鉢が見られる。中国産の壺は口縁部が方形で肩が張る大型の壺が多く見られる。タイ産褐釉陶器については、口縁形態等から焼成窯の特定が可能で、ここではバンプーン村窯、ノイ川窯、シーサッチャナライ窯の製品が確認でき、バンプーン村窯産の製品は少ない。時期は 15 世紀初頭から 18 世紀頃までである。

６．本土産陶磁器

本土産陶磁器は 201 点が出土している。染付（第 110 図 93 ～ 100）、陶器（第 110 図 101 ～ 105、107 ～ 111）緑釉陶器（第 110 図 106）などが出土している。器種は碗、皿などの小物が多数を占める。産地は染付では肥前系、陶器では内野山産、薩摩産などが出土している。

７．沖縄産施釉陶器

第 111、112 図は釉薬を施した沖縄産の陶器でいわゆる「上焼（ジョウヤチ）」と呼ばれるものである。総数で 543 点が出土している。施釉する釉薬は灰釉、飴釉、褐釉、透明釉などで白土を施し（白化粧）赤絵で上絵付けを施すものもある。器種は碗、皿、火取、鉢、急須、酒器などが出土している。

８．沖縄産無釉陶器

第 113 図は高温で焼き締めた沖縄産の陶器でいわゆる「荒焼（アラヤチ）」と呼ばれるものである。総数で 295 点が出土している。器種は碗、擂鉢、鉢、甕、壷などが出土している。

9．陶質土器・瓦質土器

陶質土器は「アカムヌー」と呼ばれる器色が赤褐色、橙褐色を呈する焼き物である。焼成が悪いものは触るとざらざらとしており指に赤い粉末が付く。163 点が出土している。器種は鉢、火炉、鍋、土瓶などが出土している。瓦質土器は 10 点が出土している。器種は箱型火炉、擂鉢などである。

10. 瓦

瓦は 2894 点が出土している。瓦は製作技法などから高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦の 3 種に分類できる。出土量は明朝系瓦が大多数を占めており軒丸瓦、軒平瓦ともに瓦当部が出土しているのは明朝系瓦のみである。

11. 金属製品

金属製品の種別としては、武器・武具等の一部及び釘・鋲等の建築・調度品等に用いられる製品とに大別でき、その中に装飾的機能を有する飾り金具が含まれる。この中で釘類は鉄を素材とする製品が多数を占めるが、その他製品は銅製がほとんどで、飾り金具においては表面に唐草文や魚々子を彫金し、鍍金が残る資料もみられる。これらの飾り金具は、その文様の構成や特徴から、琉球製と大和製とに概ね区別できるが、今回確認できた製品は琉球製が占めている。

12. 銭貨

銭貨は 74 点が得られ、その内 50 点が破片及び溶着のため判読不明で、25 点において銭種が判明している。これらの銭貨は全て銅製で、錆に覆われた状態で出土していることから、ある程度クリーニングした上で観察を行い、特徴を明記した。判読可能な資料 25 点から産地を分類すると、渡来銭は 17 点、その他無文銭を含めた国産の寛永通宝は 8 点と渡来銭の出土比率が大きい。初鋳年からは渡来銭は開元通宝が最も古く、ほかは宋・南宋・元代の製品が占める。国産の寛永通宝は古寛永と新寛永（文銭）とに分けることができ、更に背文字等の特徴から鋳造年が判明している資料については、表中に西暦を記した。溶着資料は複数の銭貨が溶けて固まりとなったものであり、その要因は火災によるもののほか、他の銅製品として再利用するため、銭貨をスクラップとして溶解させていた可能性も考えられる。

13. 玉類

玉類は総数で 55 点得られた。素材はガラス製が 53 点と多く、ほかに水晶製 1 点、骨製の製品が 1 点みられる。ガラス製の玉は、表面に螺旋状あるいは横位に筋が見られること及び、孔内部に白い剥離剤が残る資料が確認できることから、剥離剤を塗布した鉄芯に溶解ガラスを巻き付けて成形する芯巻き技法によるものと思われる。また、ガラス製玉の中には二次的に被熱を受け、変形した製品も見られる。大きさはガラス製で 4 ㎜以下の製品が 46 点と小型の製品が占めている。

14. 貝製品

貝製品は小玉、独楽、螺蓋製品などが出土している。第 121 図 266 ～ 269 は民俗事例などから独楽と考えられているものである。マガキガイの体層部を打ち抜いて螺軸を残し独楽状に成形したものである。

15. 骨製品

骨製品は鏃、箆状製品、歯ブラシ、棒状製品、などが出土している。第 121 図 273 は骨製の鏃である。片面は鎬をほとんど持たず断面形は台形を呈する。平面形は菱形で基部に向かって一旦窄まり開く形状である。茎部は欠損している。

16. 煙管

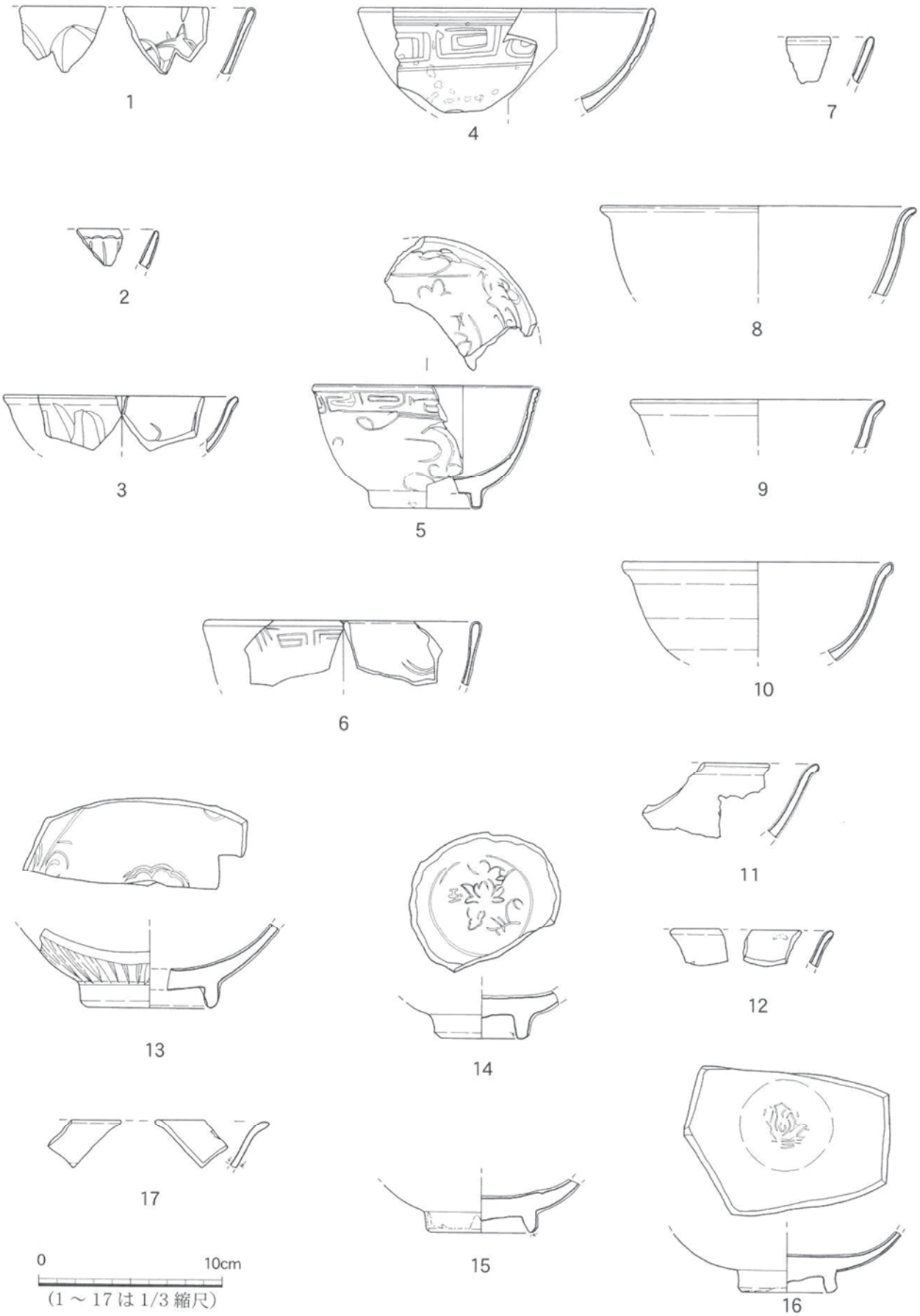
煙管は5点が出土している。そのうち3点を図化した。第122図279は沖縄産施釉陶器製の雁首である。火皿の部分を一部欠損している。火皿内面から小口付近まで施釉する。280は中国産彩釉陶器製の吸い口である。釉薬がほぼ全体で剥離しており白灰色の素地が露出している。281は銅製の吸い口である。小口付近に3本の圏線が刻まれる。

17. 碁石・円盤状製品

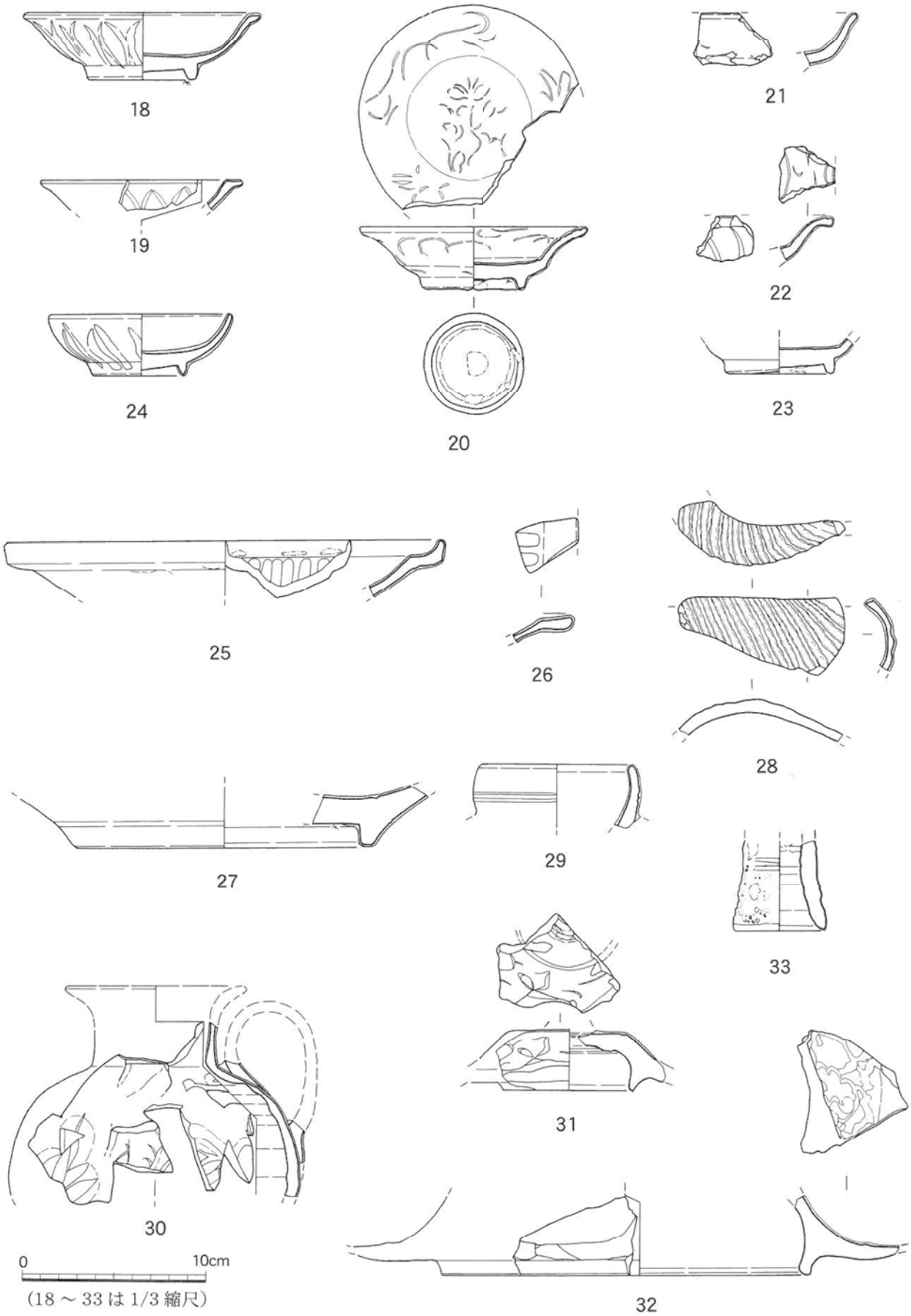
碁石は6点が出土している。第122図282は陶器製の碁石と思われる製品である。円盤状製品は97点が出土している。そのうち半数近くは中国産褐釉陶器を利用したものである。小さいもので最大径が1,5㎝、大きいもので8,2㎝まであり、2㎝～3㎝のものが最も多い。そのうち4点を図化した。第122図288は沖縄産無釉陶器を利用した製品である。打割は全体的に雑な印象を受ける。外底面に「車」の字の6画目のない文字状の線刻がある。

18. 石器・石製品・石造製品

石器・石製品・石造製品は磨石、砥石、硯などが出土している。第122図291は札状の石製品である。表面には細い線刻で唐草文や魚々子文が施される。第124図303は石柱の下端部である。ほぞが削りだされており、表面は丁寧に研磨され4面とも両端に線刻が施される。



第 104 図　中国産青磁（1）



第 105 図　中国産青磁（2）

第4表　中国産青磁観察一覧表(1)

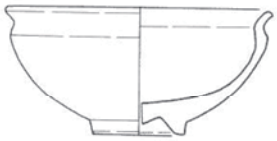
単位：cm

番号 挿図・図版	年度	出土地点	遺構	器種	部位	口径 器高 底径	釉色	器形	文様	所見
第104図 図版178 -1	H 15	C-5トレ5埋土 D-5溝1⑤5層	27・29	碗	口縁部	- - -	淡オリーブ	厚手の直口碗で口唇は円い。	外体面に幅の広い蓮弁を片切り彫りにより施し、内体は同じく片切り彫りの草花文。	釉は半透明のオリーブ色で、口唇で1mm、内外面は2mmと厚手。粗く貫入が走る。胎土は白色。15世紀前半。
2	H 15	C-7トレ8 2層	28	碗	口縁部	- - -	暗オリーブ	口唇がやや内傾する碗。	線描きの蓮弁文。剣頭文。外体口唇直下に浅く巻線を巡らし、これを基準に蓮弁を揃える。	素地は明灰色。釉はオリーブ色の半透明で気泡が多く、口唇で薄く内外面で厚い。15世紀前半。
3	H 15	C-6石組2 6層	3	碗	口縁部	12.6 - -	オリーブ灰	外反口縁。	外体面に幅広の蓮弁を片切り彫りにより施し、内体は同じく片切り彫りの草花文。	やや外反する碗。素地は明灰色で、黒色の細粒子含む。釉は透明だが気泡あり。15世紀前半。
4	H 15	C-6石列5 前面	13	碗	口縁部	16.2 - -	灰オリーブ	直口口縁。	幅広の横線を外体口唇直下に配し、その下位に片切り彫りの雷文を広く廻らす。	直口厚手の碗。胎土は明白色。全体に被熱を受けており、釉は溶解・発泡している。14世紀末。
5	H 15	D-5暗褐土	-	碗	口～底	12.4 6.7 5.8	暗オリーブ	直口口縁。	外体面の口縁上位に片切り彫りの雷文を廻らし、下位に草花文を施している。内体・内底にも片切り彫りの草花文を施す。	胎土は明灰色。釉は畳付け内側まで厚く施され、濁りが強いため文様が明瞭でない。15世紀中葉以前。
6	H 15	C-7石列9 裏込	17	碗	口縁部	15.2 - -	オリーブ灰	肥厚口縁。	口縁に印花による雷文、内体面に弧状の印花文が確認できるが文様の全体は不明。	素地は明灰色で黄褐色の粒子がみられる。釉は薄いが光沢がないため透明度が悪い。14世紀末。
7	H 15	D-7トレ1埋土	26	碗	口縁部	- - -	灰オリーブ	直口口縁。	外体口唇直下に浅く巻線が施される以外は無文。	素地は明灰色。釉は厚手で気泡を含み、表面に光沢がないため透明度が悪い。
8	H 15	D-5溝1⑪5層 D-5溝1⑫5層	29	碗	口縁部	17.2 - -	灰オリーブ	外反口縁。	無文。	外反口縁の大振りの碗。胎土は明灰色。釉は全体に厚くかかり、透明度は高いが気泡が多く粗い貫入が全体に走る。
9	H 15	C-6石列5 前面	13	碗	口縁部	16.8 - -	オリーブ黄	外反口縁。	無文。	生地は明褐色。黄土色の釉は厚くかかり、細かい貫入が全体にみられる。
10	H 15	D-5溝1黒 褐土	29	碗	口縁部	14.7 - -	黄オリーブ	外反口縁。	無文。	やや玉縁状の碗。胎土は灰色で間隙が多い。釉は全体にほぼ1mm厚でかかり、剥離状の貫入が細かいため濁って見える。
11	H 15	E-5建物跡 ③	-	碗	口縁部	- - -	灰オリーブ	外反口縁。	無文。	生地は明褐色。陶器様で軽い。釉は全体が白濁して不透明。一部に石灰分が付着。
12	H 15	D-5溝1④ 5層	29	碗	口縁部	- - -	灰白	外反口縁。	無文。	胎土は外側が明白色で内部は不規則に灰色。釉は光沢があるが部分的に剥げ落ちている。
13	H 15	客土	-	碗	底部	- - 6.8	オリーブ灰	高台は丁寧に台形状に削りだし、高台内中央が少々厚い。	外体面は片切り彫りの蓮弁文を上部から高台脇まで施し、その勢いで高台側面に傷がみられる。内体は細描の草花文、内底面に印花文がみられる。	生地は明灰色。釉は高台内面まで均質にかかり、微少な気泡がみられる。15世紀中葉。
14	H 15	D-4暗褐土	-	碗	底部	- - 5.2	オリーブ灰	高台は雑な削りで内側のみ接地。	内底面に片切り彫りの圏線を描き、中に印花文及び「玉」の字を施す。	胎土は灰色。高台の断面は内側が高い台形。釉は畳付けまでで細かい気泡を含む。
15	H 15	E-6黒褐土	-	碗	底部	- - 5.5	オリーブ灰	高台は雑な削りで内側のみ接地。	内底面に圏線を施す。	灰色～明灰色の生地。高台断面は内側が高い台形。白濁した釉は高台脇までかかる。15世紀前半～中頃。
16	H 15	客土	-	碗	底部	- - 5.0	オリーブ灰	内底面が広めの碗。高台は僅かに「ハ」状に開く。	内底面に印花文。	灰色の生地。高台断面は内側が高い台形。釉は薄く高台脇までかかる。

第5表　中国産青磁観察一覧表(2)

単位：cm

番号 挿図・図版	年度	出土地点	遺構	器種	部位	口径 器高 底径	釉色	器形	文様	所見
第104図 図版178 -17	H 15	D-5溝1⑧ 5層	29	碗	口縁部	- - -	暗オリーブ	緩やかなS字状に外反する浅い碗。	無文。	胎土は明褐色で大小の黒色粒子が混入。釉は薄く、外体中央付近までかかる。泉州窯。
第105図 図版180 -18	H 15	D-5溝1壁 面黒褐土	29	皿	口～底	13.0 3.6 5.8	暗オリーブ	折れ口。口縁外面に削りを入れ外反を強調。	外体面に幅広の蓮弁を片切り彫りにより施す。	胎土は高台内部のみ橙褐色でほかは明灰色。釉は光沢強く透明で畳付けまで。高台脇のみ貫入あり。14世紀中頃～後半。
19	H 15	E-6黒褐土	-	皿	口縁部	10.8 - -	オリーブ灰	折れ口鍔状。	外体面に片切り彫りの蓮弁を施す。	胎土は明灰色。釉は半透明。
20	H 15	D-5暗褐土	-	皿	口～底	12.4 3.45 5.6	オリーブ灰	腰折れ。	外体面、内体面共に片切り彫りの草花文、内底面に印花文を施している。	明灰色の胎土。釉は高台内部まで厚くかけたあと、高台内部のみ蛇の目釉剥ぎを行う。
21	H 15	C-7石列9 西壁②13層	17	皿	口縁部	- - -	明オリーブ灰	外反口縁、腰折れ。	不明。	被熱を受け全体がただれている。胎土は灰色で、被熱のためか部分的に暗灰色を呈す。釉は不透明でつやなし。
22	H 15	D-7トレ1 埋土	26	皿	口縁部	- - -	灰オリーブ	稜花、腰折れ。	外体面に蓮弁、内体面は草花文が片切り彫りにより施される。	胎土は灰白色。釉は白濁している。
23	H 15	D-7トレ1 埋土	26	皿	底部	- - 6.0	オリーブ灰	腰折れ。	無文。	生地は灰白色で間隙が多い。釉はほぼ全体にかかるが、高台内で斑状。高台の断面形状は台形。
24	H 15	客土	-	皿	口～底	10.0 3.4 5.1	オリーブ灰	やや内彎する直口口縁。	外体面に幅の広い蓮弁を片切り彫りにより施している。	被熱により表面がただれ、炭化物が付着。胎土は明灰色。釉は微少な気泡が入るが均質で高台内側まで施す。15世紀中頃。
25	H 15	D-5溝1黒 褐土	29	盤	口縁部	23.6 - -	暗オリーブ	鍔縁口縁。	内体面に櫛描の蓮弁を施している。	胎土は灰色。釉は厚手にかかるが鍔上部で剥げ落ちている。全体に細かい貫入あり。
26	H 15	D-3石敷1 下部	32	盤	口縁部	- - -	灰オリーブ	鍔縁口縁。	内体面に篦描の蓮弁を施している。	胎土は明灰色。釉は厚手で気泡・貫入のため透明度はよくない。
27	H 15	D-5溝1⑰ 5層	29	盤	底部	- - 16.3	オリーブ灰	内底面が厚く盛り上がる盤。	内底面及び高台脇に圏線。	胎土は明灰色。釉は高台内周辺まで。粗い貫入あり。
28	H 15	客土	-	形象物	口縁部	- - -	灰オリーブ	巻き貝形の容器。	外面に巻き貝の螺肋様の文様を施している。型作りによるものか。	巻き貝の外唇部で、貝の水管溝と思われる溝も再現されている。胎土は灰白色。釉は透明だが表面はつやなし。
29	H 15	C-7トレ8② 15層	28	天目台	口縁部	8.3 - -	暗オリーブ	天目台の碗を受けるホオズキ部分。破片下部に皿状の羽へのびる痕跡。	胴部に二条の巻線。	生地は灰白色。釉は光沢あるが気泡多し。
30	H 15	E-5建物跡① E-5黒褐土 H15客土 H17客土	-	水注	胴部	胴径 15.8	灰オリーブ	水注の身、頸部から把手の付く部位。	外体面に片切り彫りによる草花文を施す。	生地は灰白色。釉は全面にかかるが内面は薄く、轆轤痕がみられる。京の内出土資料を参考に図上復元。
31	H 15	D-6暗褐土 D-7暗褐土	-	蓋	甲部	- - -	灰オリーブ	瓶の蓋か。形状は酒会壺蓋に近似するが小型。	甲表に片切り彫りの草花文。	胎土は灰白色。釉は甲表のみ。裏面は焼けて煤ける。
32	H 17	D-6溝2周辺 床面直上	30	蓋	甲部	- - -	灰オリーブ	酒会壺の蓋。縁に近い部分。	甲表に片切り彫りの草花文。	酒会壺の蓋。生地は灰白色。釉は甲表のみ。裏面は露胎だが灰赤色。
33	H 15	D-5暗褐土	-	馬上杯	脚	- - 4.8	灰オリーブ	下部が広がり、外周のみ接地。	外体面上部に二条の圏線が確認できる。下部にも巻線と思われる痕跡があるが、被熱により判然としない。	全体に被熱を受けた馬上杯の脚部。杯底部との接合面から剥離。素地は灰白色。釉は高台脇までかかり、被熱により変色・発泡する。14世紀。


34

36

37

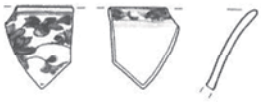
35

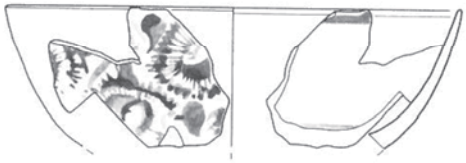
38

39

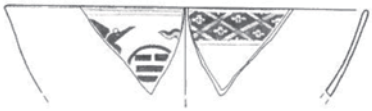
40

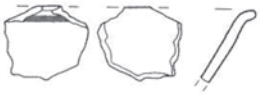
41

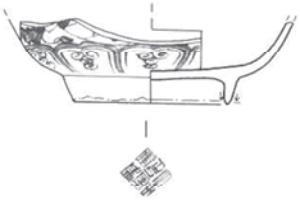

42

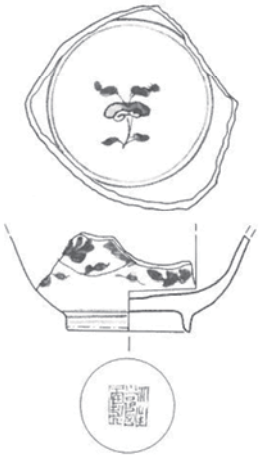

44

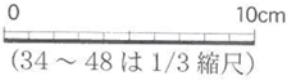
43


45


46

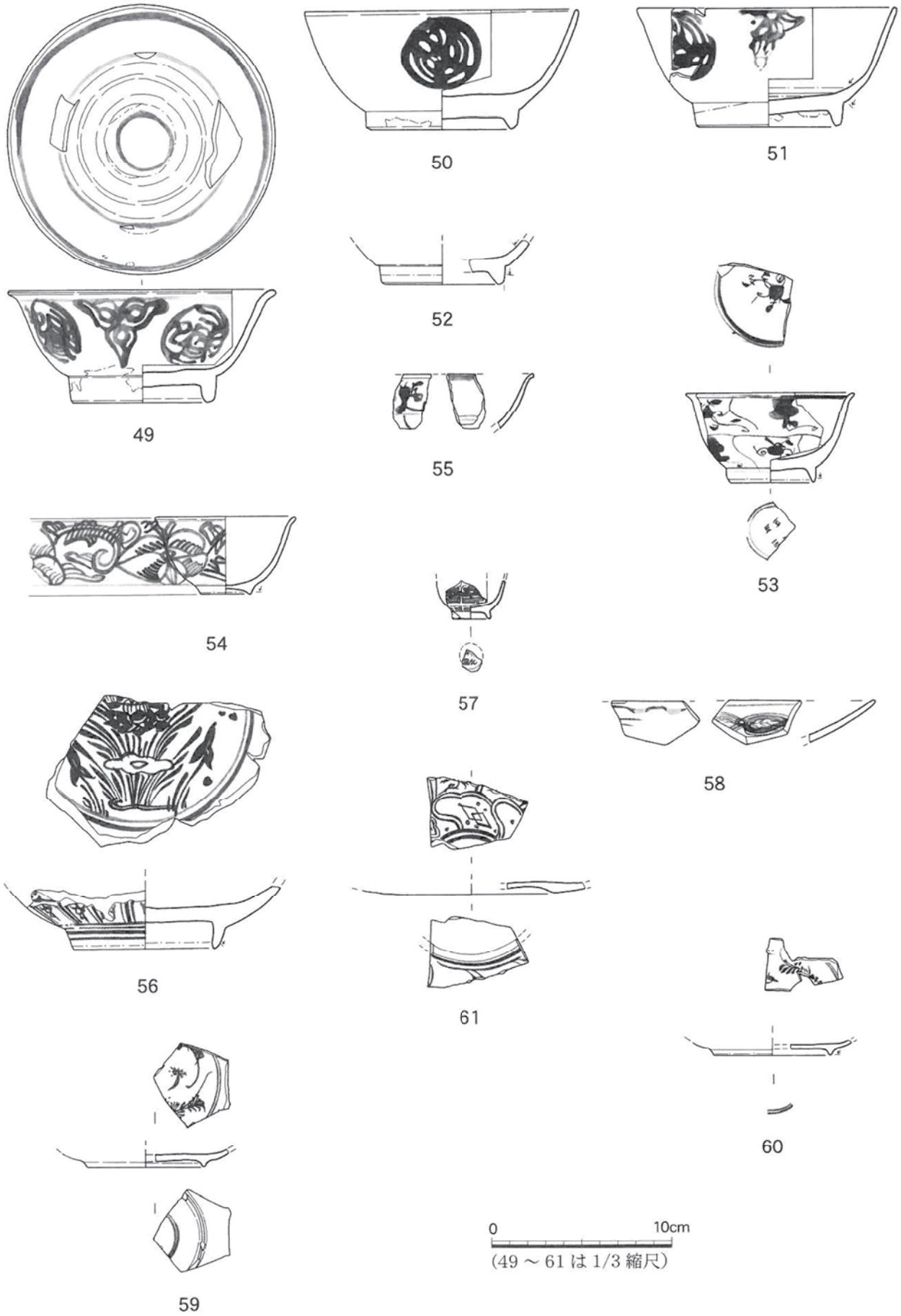

47


48



(34 ～ 48 は 1/3 縮尺)

第 106 図　中国産白磁・染付（1）



第 107 図　中国産染付（2）

第6表　中国産白磁観察一覧表

単位：cm

番号 挿図・図版	年度	出土地点	遺構	器種	部位	口径 器高 底径	釉色	器形	所見
第106図 図版182 -34	H15	F-8石組3裏込	33	碗	口～底	10.6 5.0 3.7	透明	外反口縁で胴の張った天目茶碗様で精緻。高台断面は浅い台形で外側のみ接地。	胎土は灰白色。釉は薄く高台脇までかかる。内底面には灰が溶着。福建・広東系か。時期不明。
35	H15	G-8石積2前面黒土	36	小碗	口縁部	- - -	灰白色	端反り口縁	内体下部に巻線。胎土・釉ともに灰白色で均質。薄手の小碗。16世紀。
36	H17	D-6溝2周辺床面直上	30	皿	口縁部	9.2 - -	灰白色	直口口縁で断面方形の高台がやや開く皿。	胎土は灰白色。釉はつやのある灰白色を呈し外体下部で止まる。15世紀前半。
37	H15	D-5溝1黒褐土	29	皿	口縁部	10.2 - -	黄白色	直口口縁。	生地は灰白色。釉はつやのある青灰色を呈す透明釉。15世紀前半。
38	H15	D-3暗褐土	-	皿	口～底	13.4 3.3 5.2	灰白色	胴部中位で屈曲して外反。高台は内側のみ接地。	生地は灰白色。釉は内底から胴中位までで、内底は蛇の目釉剥ぎ。14世紀後半～16世紀。福建・広東系。
39	H15	D-5溝1⑥5層	29	皿	口縁部	12.7 - -	透明	外反口縁。	胎土は明灰色。釉は光沢のある透明釉。外体に轆轤痕が顕著。
40	H15	C-6石組2 6層	3	皿	底部	- - 3.5	灰白色	高台は畳付けを三角に削り出し高台内は外刳り。	胎土は灰白色。釉はつやのある灰白色を呈し外体下部で止まる。15世紀前半。
41	H15	E-5黒褐土	-	皿	底部	- - 6.2	青白色	高台は台形で丁寧な造り。内側のみ接地。	腰折皿の底部。釉は畳付け脇までで、外体は青白色、内面は透明。高台から内側に砂目が認められる。15世紀中頃。

第7表　中国産染付観察一覧表(1)

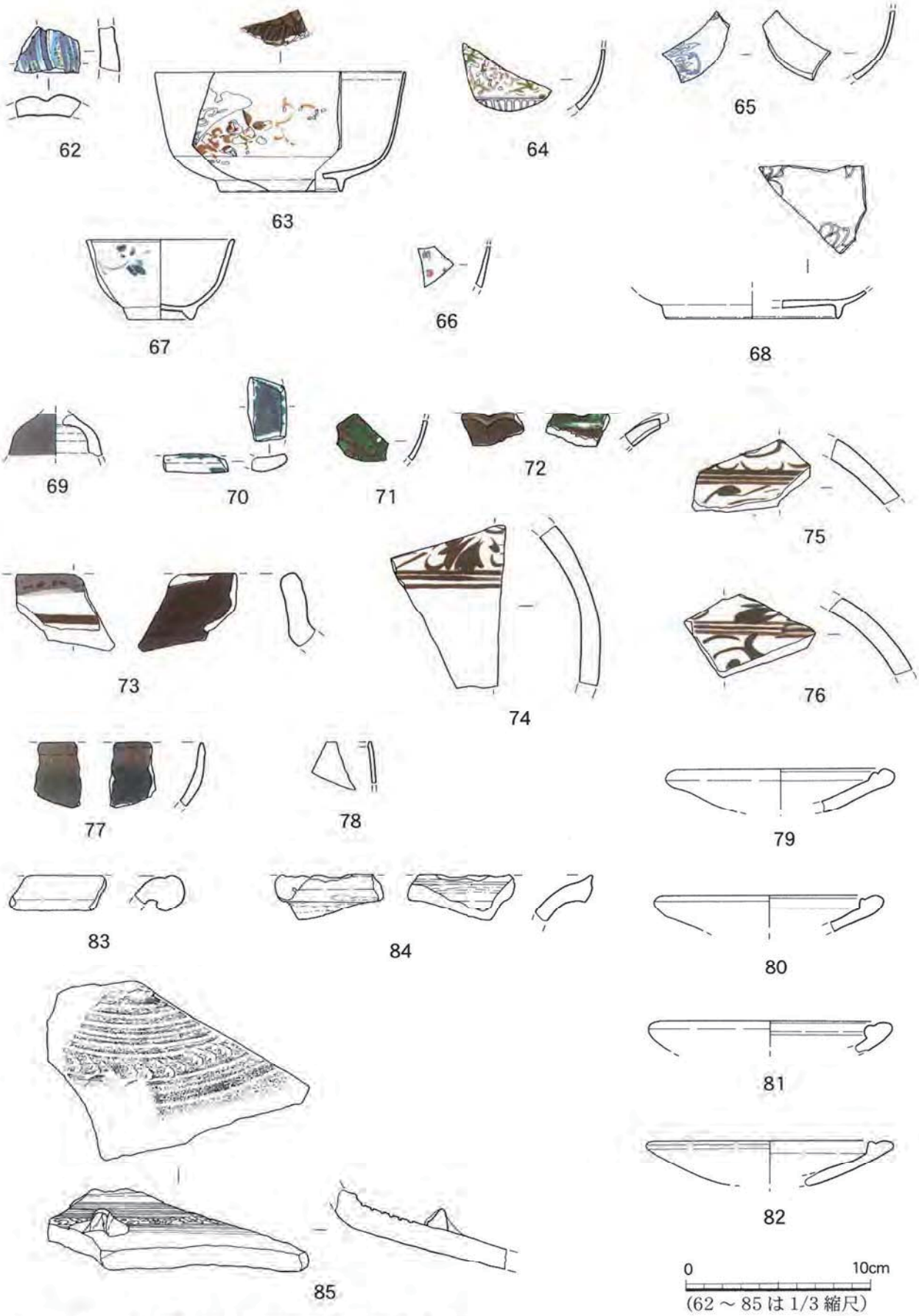
単位：cm

番号 挿図・図版	年度	出土地点	遺構	器種	部位	口径 器高 底径	器形	文様	所見
第106図 図版182 -42	H15	F-7トレ3南壁②6層	57	碗	口縁部	- - -	口唇断面は方形で緩やかに外反する。	外体面に蓮華唐草を施し、口縁内面に上下を圏線で枠取りした花唐草を配する。	胎土は灰白色。透明釉はやや青みがかる。景徳鎮窯。16世紀末～17世紀。
43	H15	F-7トレ3 1・4・5層	57	碗	口縁部	12.7 - -	口唇断面は方形で緩やかに外反する。	外体面に蓮華唐草を施し、口縁内面に上下を圏線で枠取りした花唐草を配する。	胎土は灰白色。透明釉はやや青みがかる。景徳鎮窯。18世紀後半～19世紀。
44	H15	C-6石組2 1層	3	碗	口縁部	18.1 - -	直口口縁で内湾気味に立ち上がる碗。	外体面に蒟蒻印による菊花唐草を施し、内体面は口縁と見込みに圏線を配する。	丸みを帯びる直口碗。生地は明灰色。呉須の色調は灰青色。内底面釉剥ぎ。ショウ州窯。17世紀前半。
45	H15	G-8石積前面褐土	-	碗	口縁部	14.6 - -	直口口縁の碗。	外体面に鳥、雲、八卦丸文を配する。口縁内面に四方襷をめぐらす。	薄手の直口碗。生地・器面とも他の染め付けに比して白い。景徳鎮か。16世紀末。
46	H15	C-6石組1 2層	2	鉢	口縁部	- - -	口唇を外に屈曲させた外反口縁を有する鉢。	口縁内外に幅広の圏線を配する。	胎土は明灰色でざらつく。透明釉は灰色がかり、貫入が目立つ。ショウ州窯。16世紀後半。
47	H15	F-7溝3 2層	54	碗	底部	- - 6.1	高台形は内刳りで畳付けは内外から削り出し尖る。	外体面に蓮華唐草を配し腰部から高台脇までラマ蓮弁文を描く、見込みは二条の圏線内に草花文を施す。高台内に方形の銘款。	高台は畳付け部分が内湾し、釉剥ぎを施す。景徳鎮窯。16世紀末～17世紀。
48	H15	F-7トレ3 6層	57	碗	底部	- - 4.9	高台形は外刳りの三角、畳付けは内外から削り出し尖っている。	外体面に蓮華唐草を配し内底面に二条の圏線と草花文を描く。高台内に方形の銘款。	畳付けに釉剥ぎを施す。景徳鎮窯。16世紀末～17世紀。
第107図 図版184 -49	H15	C-6石組2西壁① 3層 C-6石組2 4層	3	碗	口～底	14.8 6.2 8.0	比較的大きめの高台形は方形、畳付けは内外から削り出しやや三角状を呈する。胴から口縁まで緩やかに開き立ち上がるが、口唇で一気に外側に屈曲させている。	外体面にコンニャク印判による三角文と丸文を施す。口縁内面と見込みに一条の圏線を配す。	蛇の目釉剥ぎ。福建・広東。17世紀末～18世紀前半。
50	H15	C-6石組2 4層	3	碗	口～底	15.15 6.5 8.4	高台形は外刳りの三角、畳付けは内外から削り出し尖っている。胴上部から口縁まで直線的に外に開き立ち上がる直口口縁。	外体面にコンニャク印判による丸文を施している。	福建・広東。蛇の目釉剥ぎ。17世紀末～18世紀前半。
51	H15	C-6石組2 ⑫ 3層 C-6石組2 4層 C-6石組2 6層	3	碗	口～底	14.3 6.5 8.0	高台形は外刳りの三角、畳付けは内外から削り出し尖っている。腰部はやや丸く、口縁は胴上部から口縁まで直線的に開く。直口口縁。	外体面にコンニャク印判による三角文と丸文を施している。	蛇の目釉剥ぎ。福建・広東。17世紀末～18世紀前半。

第8表　中国産染付観察一覧表(2)

単位：cm

番号 挿図·図版	年度	出土地点	遺構	器種	部位	口径 器高 底径	器形	文様	所見
第107図 図版184 -52	H15	C-6石組1層	2	碗	底部	- - 6.85	高台形は外刳りの三角、畳付けは扁平であるが高台外側から僅かに削り出している。	不明。	蛇の目釉剥ぎ。福建·広東。17世紀末～18世紀前半。
53	H15	F-7溝3南崩部4層	54	小碗	口～底	9.4 4.85 4.6	やや丸みのある胴から口縁まで緩やかに開き立ち上がり口縁は外反する。口唇は尖る。高台形は外刳りの三角状、畳付けの外際から僅かに削り出している。	外体面に仙芝祝寿文を施している。内底面に二条の圏線と草花文、高台内に梵字の銘款がみられる。	徳化窯。18世紀。
54	H15	G-9石列4黒褐土 G-9石列4黒土	43	小碗	口～底	7.8 4.25 2.8	型成型の小碗。口唇は端反りで丸く、緩やかに底部へ至る。高台断面は丸く、高台内は浅い。	外体面に花唐草を施す。	全面施釉で畳付けは雑に釉剥ぎ。素地は灰白色。徳化窯。18世紀。
55	H15	F-7トレ3 3層	57	小碗	口縁部	- - -	口唇が尖る外反口縁の小碗。	外体面に仙芝祝寿文を施している。	素地は灰白色。徳化窯。18世紀。
56	H15	客土	-	大鉢	底部	- - 8.0	高台形は内刳りで畳付けは内外から削り出し更に先端は丸く整える。	外体面腰部から高台脇までラマ蓮弁文を描く、見込みは二条の圏線内に蓮束文を施す。	元染付の模倣品。15世紀前半。
57	H15	F-8暗褐土	-	小杯	底部	- - 2.0	高台は外刳りで、畳付けは内外から削り出し三角状に尖る。	外体面に雲を配した雷文を施している。高台内に「化成年製」の銘款がみられる。	景徳鎮窯。18世紀後半～19世紀。
58	H15	E-5黒褐土	-	皿	口縁部	- - -	直口口縁の浅い皿。口唇断面は丸く、口縁から胴部までほぼ直に移行する。	口縁外面に圏線、内面に草花文。	17世紀前半。
59	H17	E-7礫下暗褐土	-	皿	底部	- - 6.6	浅めの皿。全体に薄手で、見込みがわずかに盛り上がる。高台断面は三角。	見込みに圏線と草花文、高台内に圏線。	畳付けのみ釉剥ぎ。16世紀中頃。
60	H15	F-7トレ3 1·4·5層 F-7トレ3南壁⑤1層	57	皿	底部	- - 6.4	浅めの皿。全体に薄手で、見込みがわずかに盛り上がる。高台断面は三角。	見込みに圏線と草花文、高台内に圏線。	畳付けのみ釉剥ぎ。16世紀中頃。
61	H15	客土	-	皿	底部	- - 9.2	碁笥底の浅い皿と思われる。	内外面とも中央に二条の巻線を施し、二重線で蓮華を描く。内体の弁の中に宝文。	被熱を受けた碁笥底の皿と思われる。底の周囲は釉剥ぎ。



第 108 図　ベトナム産染付・中国産色絵・瑠璃釉・緑釉鉄絵・三彩・白地鉄絵・天目・朱泥・タイ産褐釉陶器・半練土器